

佛法ぞ、凡夫も聖者も迷も悟も分け隔ては無い、其實は戒律を破る者もなければ又持つ必要もない迷を苦にする者もなければ悟を求むる者もない、着語に敗、少、か、らず、文殊が無着に追いつめられて大敗北ぞと言ひ、又直に得たり、脚忙しく手亂る、文殊が狼狽する様を見ると言ふ、コレは果して何處が敗缺の處で何處が脚忙手亂であらうぞ、即ち吾人の参究すべき要點が、着云く多少の衆ぞ、其の凡聖や龍蛇の數は何程ありますかと問ふ、其實は衆生の方から見ても無量無數であり、佛菩薩の方を見ても阿僧祇無邊であつて本より凡聖には限りが無い、然るに無着は自分が初め文殊に問はれた通りに多少の衆ぞと問ふた、ソコで圓悟が我に、話頭を還へし來れ、無着あまりに齒がゆいぞ、圓悟が代つてやらうから其の問答を我に任せるが好いと云ふ也、た放過するを得ず、どうも此れは打ち棄てゝは置けまいぞ、殊云く前三々後三々、文殊の教へかたは無着の三百五百と全く違つて世間の數理では聞えなことの無い數である、しかし前からも三々後からも三々と見ても又は前が三々後も三々と見ても勘定に違算は無い、着語に顛言倒語ほとんど狂人の癡言のやうだと言ふ、且らく道へ是れ多少の衆ぞ、コレは一鉢何百人といふことか何千人とい

ふことか、諸人は何と思ふぞと門下後生への警誡、結局コレは千手大悲の觀音でも數へされまいぞと言ふ、要する所この公案は前に申した通り無着禪師一人の垂示であつて、語をかえて言へば無着が文殊といふ客を一人つれて來て一段の狂言をやつたのである、即ち此の一則の公案を一首の詩と見ねばならぬ、畢竟世人が小乗持戒の比丘僧と龍蛇混雜の菩薩衆との間に分け隔てをしたり、輒もすれば數量を以て佛法を判断しやうとしたりする迷倒を教はんがために、無着の慈悲の老婆心切からは是の如き示衆をせられたのである、數量のことに就て先年或人が「法數大全」と云ふ書を出版したいに依て何ぞ題辭をかくれと言ふから一篇の偈頌をかいたことがある曰く、法本無數量、日々是好日、法本有數量、九々八十一、法數畢竟作麼生、幽溪水落奇石出、

頌 千峰盤屈色如藍、誰謂文殊是對談、堪笑清

涼多少衆

且道笑什麼

前二二三與後三二三

試請脚下辨、何處泥裏有

千峰盤屈色如藍の如し、コレは無着が文殊に遭ふたといふ五臺山の景色であるが、其

の實は清淨法身毘盧遮那如來の住處すなはち常寂光土の景色ぞ着語に還て文殊
 を見るや此の境には文殊の普賢のといふて別段に有り難そうな人物を眼中に置
 くべきには無い、ソコで誰が謂ふ文殊是れ對談と文殊はサテ置き釋迦にも彌陀に
 も用は無、只この千峰盤屈色藍の如きを見そこなはぬやうにせよ、況や設使普賢
 も也た願りみず然るに若しも此境に於て文殊に遭ふたなど、言はゞ蹉過了也、そ
 れは大間違ひぞと言ふ笑ふに堪えたり清涼多少の衆この清涼といふは五臺山の
 一名で即ち文殊の住處であるといふことだ、無着が其の文殊の處に凡聖同居龍蛇
 混雜して居る人が幾人あると問ふた、其の可笑さは腹の筋がよれて臍が宿がへを
 しそうであるぞと云ふ、ナゼかと云ふに彼の千峰盤屈色藍の如しコレが多少の幾
 許のといふべきものかい、それを問ふたのがあかしくてたまらぬと言へば、圓悟は
 且く道へ什麼をか笑ふと咎めた、何があかしいぞ其あかしいわけを能く參究して
 見ると學人にも響く、已に言前に在り其の笑ふに堪たる理由は雪竇が斯う言はな
 い前から疾に知れきつて居るぞと云ふ、前三々と後三々と千峰盤屈色藍の如き山
 色の價を定めた、圓悟が試みに請ふ脚下に辨じて看よと參學の諸人に實參實究を

勸め更に爛泥裏に刺あり前三々と云ひ後三々と云ふ數量に涉つたとも言はれぬ
 ば數量に涉らぬとも言へぬ、何か奥歯に物のはさまつたやうなくあひ、ソコが脱落
 すれば始めて彼の盤屈して色藍の如き青山を飽まで見るの分があると云ふ、碗子
 地に落ちて椀子七片となる、茶碗を落せば茶臺が破れるといふも同じことと、同異
 の分別に支配されて居るうちは到底此の間の消息を窺ふの資格はない。

第三十六則 長沙一日遊山

本則 舉長沙。一日遊山。歸至門首。首座問和

尚什麼處去來。沙云。遊山來。首座云。到什

麼處來。沙云。始隨芳草去。又逐落花回。首座云。到什

麼處來。沙云。始隨芳草去。又逐落花回。首座云。到什

麼處來。沙云。始隨芳草去。又逐落花回。首座云。到什

湖南長沙の鹿苑寺景岑禪師は南嶽下の第三世で南泉普願和尚の法嗣である、此人は餘程文才も秀でてた様子で傳燈錄には多くの偈頌なども擧げられてある、乃ち此の本則の如きも自から文學上の趣味が甚だ深い、一日遊山し、飯て門首に至る、この遊山と云ふのは其時實際に長沙和尚が山中を散歩してきたので有たらうけれども、凡そ禪録の中に遊山とか玩水とか云ふことのあるのは、已に眞實修行の功を積んで大悟徹底安心無事の身となつた人の境界が、縁に觸れ感に随つて閑雅風流悠悠々自適する有様を遊山とも玩水とも云ふのが多い、尤も此れは禪門に限つたことでは無い、他力の極點と稱する淨土眞宗などでも安心獲得往生決定の上には園林遊戯地門といふこともある、況んや即心即佛の禪宗に於てをやである、サテ今の處は長沙が散歩から歸つてきて門の處まで見えたのを弟子の中の第一座すなはち首座が問ふ、和尚、什麼の處にか去來するや、あなたは何處を遊んであるさなさい、ますかと言ふ、此首座もサスガ長沙門下の第一座であるから只ひと通りの挨拶とは聞えない、園悟は長沙の遊山に着語して今日、一日と言ふ過去にも關係なければ未來にも關係はない、只現在目前の閑に乗じて興を遣るまでのこと、誠に安穩無事

の境界ぞと言ふ、又、只管に落草す、コレは山中を散歩するといふ語に就て山といふても孤峰頂上に高あがりをしやうといふのではない、只管に草裡に落ちて遊ぶのぞと云ふ、前頭も也、た、落草、後頭も也、た、落草、あへて佛とか法とか向上とか向下とか其様な有り難そうな高尙らしい意味は少しもない、徹頭徹尾草刈り小僧も同様に草の中をカサ／＼と何處までも安穩無事の遊戯三昧よ、又首座の問の下の着語に也、た、這の老漢を勘過せんを、要す首座が和尚の脚下に氣を附けて一つ勘驗しやうとするは、誠に好い思ひつきで、寝ても起ても此の事を放過して居らぬことも分るが、箭、新羅を過ぐ、遅いぞ／＼、何うして此の和尚の去來の蹤跡を見とめることが出来るものぞと言ふ、然るに沙云く、遊山し來るとアツサリした無邪氣さわまつた答へてある、着語に、落草すべからず、餘りに落草に過ぎると言ひ、更に、敗、缺少、からず、て何とか首座を驚かす手段もあり、そうなものだに、草裡の、漢いよ／＼、草茫茫たる横路をガサ／＼あるくだけのことか、と言葉の上では長沙を抑へるやうに聞えるけれども、其實長沙の境界の高潔にして及び難き所を稱揚したのである、首座云く、什麼の處にか到り來る遊山して御座つたは、分りましたが、其の遊山が山上か山

下か山前か山後かと益々長沙の脚下を勘驗しやうとする、圓悟が抄よくも抄し得たぞとけしかける、若し、至る所あらば、未だ落草を免かれず萬一にも斯くく、目的があつて斯れく、の處へ往つたといふのであるなら、其れは全く凡情を脱しない、有所得の往來であるから、本統の邪路小徑に呻吟するといふもので決して遊山とは言はれない、相牽ひて火坑に入る、コレは首座が頻りに長沙を孤峰頂上へ引き戻さうと戦ひを挑むのぞと言ふのである、然るに長沙は何處までも去來の蹤跡は見せない、始めは芳草に隨ひ去り、又落花を逐ふて、回る往くときには何となく春の野に萌え出る千草のうつくしさに見とれて、知らず／＼山の中をあるいたが頂上であつたやら谷間であつたやら一向に覺えがない、又歸る路も歸らうと思ふて歸つたわけでもなく、落花のヒラ／＼と飛ぶのが面白しさに、其れを逐ひかけ逐ひかけ、到頭してまでやつてきたのよと、頓と突つこむべき隙間のない答へぶりである、着語に漏逗、少からず、餘りに蕩樂すぎた遊山のしかただナと冷かし、更に元來只荆棘林の裏に在て、坐す大層にノン氣らしく聞えるけれども、其の遊山のために中々辛苦艱難されたであらうと長沙の底意を穿つ、座云く、大に春意に似たり、ソレは大層

に陽氣な御遊山で御座いましたなと云、て聊か突つ込むべき隙を見出したのであつた、ナゼかといふに芳草と云ひ落花と云ひ春景に片寄つた所から一戰をと益々いどみかける兆である、圓悟は相隨來也と言ふ、芳草落花の御隨行かなと冷かし、更に將錯就錯と言ふ、長沙も春色に取りつかれ、首座も春色に取りつかれ、春色の流行病のやうだと云ふ、又一手は擡げ、一手は搦ゆ、コレは春意に似たりと軽く受けた裡面には、コ、から突き込まうといふ考へがあるからである、然るにサスガの長沙中々其の手は食はぬ也、た秋露の芙蓉に滴たるに、勝れり、春色の長閑さは秋露の露さむく芙蓉などに滴たるさまの物ずごいよりは、マダマとしてあるかと思ふ、どこまでも去來に滞ふらず蹤跡を留めないのが長沙の境界である、到底サスガの首座も其の城塞に迫ることは出来ないて、問答を止めてしまふた、着語に土上に泥を加ふ、春色の上に又秋景愈々出て、愈々のん氣ぞ、前箭は猶ほ軽く、後箭は深し、芳草と云ひ落花と云ふ、長閑さに更に加へて秋露に勝るとまで、證文に印紙を貼つた、何の了期かあらん、斯のやうな老僧をイツまで相手にして居たからとても果てしが無いぞと言ふ、其底意は長沙の平生が如何にも受用不盡なる境界であることを稱賛した

のである、ソコで雪資着語して云く答話を謝すかくまてに長沙の本分灑々落々たる所を承まはつた上には首座がコ、て禮拜頓首して謝意を表さんければならんはずであるに、其の儀が欠けて結末がつかんから拙僧が代つて御禮を申そうといふので段々の御答話有り難う御座いましたと言ふた、圓悟が一火泥團を弄する漢と言ふ、一火と云ふは兵隊の數を五人を伍となし五伍を火となすといふから二十五人の一小隊を一火と謂ふのである、今は長沙も首座も乃至雪資もどれもこれも揃へも揃ふて泥遊びをして居る子供のやうな連中よと抑へた、其の實は孰れも皆尋常の衲僧ては無いと云ふのである、三個一狀に領過す三人ともに同じ罪狀であるから同じ罪科に處すべきぞと言ふ

頌 大地絶纖埃、聲閉戸、屬當軒者誰 何人眼不開、項門上放天光明始得 始

隨芳草去、草過不少、不是一向落 又逐落花回、處處全成、且喜歸 羸鶴翹寒

木、左之右之添二句、一狂猿嘯古臺、却因親着力、添二句、一長沙無限意、便打一句、道

什麼在鬼風裏、却 咄、草裏漢、賊過後張

大地纖埃を絶す十方法界清淨無礙にして佛だの衆生だの迷ひだの悟りだのと云ふ厄介な品物が毫末ばかりも見えぬ有様、即ち長沙遊山の境界を一句に頌し盡してある、着語に戸淵を豁開して軒に當る者は誰ぞガラリと窓も戸を推し開いて少しも掩ひ隠す所なく露堂々たる者は誰であらうぞと長沙を見せて、人々各自斯くなければならぬと言ふ、ソコで次に盡く道箇を欠くことを得ず、て道箇といふは大地纖埃を絶したる底の境界を謂ふ、誰でも必ず一度は此境界に到らねばならぬのである、已に一たび此處に到りさへすれば天下泰平、國土安穩ぞ、サー斯うなつて見れば何人が眼開かざらん、釋迦何人を我何人を草木國土悉皆成佛よ、着語に頂門上に大光明を放つて始て得てん、眉毛の下の兩眼ばかりでは纖埃を絶したる大地は見えぬ、必らず頂門の一雙眼を要するぞ、然るに若しコ、て迷の悟の佛の衆生のと、土を撒し、沙を撒して居るやうな事であつたならば、什麼をか作さん、到底救ふべき道がないことになるぞと警誡し、始は芳草に隨ひ去り、又落花を逐ふて回ると長沙の答話をソツクリ持て來て遊山の現況を言ひ、其没蹤跡のさまを頌す、前句の着語に漏逗、少からず芳草に隨ひ去るといふは、チト浮氣の沙汰では無いかと答めたる

やうな語調、是れ一回落草のみにあらず、已に先刻長沙が其のやうなことを言ふてあつたに、又雪竇も其跡を逐ふての遊山かなと抑へ頼むに、前頭已に道ひ了るに値ふその事は疾に長沙が道破してしまふたことであつたにと更に抑へる、後句の下に處々全真どころか、しこも物みな全真ならぬは無いと云ひ、更に且喜すらくは歸り來れることを芳艸を逐ふて三十三天の上へても往き切りになるかと思ふたに、マゝ歸つてきて好かつたと冷かし又脚下泥深きこと三尺往たり來たりいかにも御深切すぎるぞと抑へたやうに揚げた、モ、此れて本則の頌は十分であるが芳草と云ひ落花と云ふ春色にばかり憧憬したのを一轉して、更に他方面の遊山の路を開いた、羸鶴寒木に翔ち狂猿古臺に嘯く、羸は弱なり劣なりて瘦せ衰へたる鶴が、冬山の寒風凜烈と吹き荒む中に枝葉もなく孤立して居る枯木にスゝと突き立つた有様、彼の春風飜蕩の遊びとは事異つてるやうであるが、其の大地織埃を絶する底の遊山たることは同一味ぞ着語は左之右之、一句を添ふ何とか彼かと言ひ、草をこしらへる人より雪竇を評し、更に許多の困事の在るあり、幾らても餘計な仕事をもち込むと此二句は皆雪竇の文才縦横を讚歎したものと見える、さて又狂猿古

臺に嘯く此の狂の字は軽く見て愚蒙なるといふほどのこと、すべての知慮分別を離れて愚の如く魯の如き境界に喩へたので、其の居處も今はハヤ人跡たえたる右臺に於て左なきだに猿の鳴く聲は人をして悲哀を催ふさしむることであるに、其の嘯く聲の聞くに得堪えぬと云ふので、大地織埃を絶したる境界の遊山玩水を諠ふた着語に却て、親く力を着くるに、因る雪竇は大層に力を入れて長沙の境界を頌したとほめ、更に一句を添ふることも得ず、一句を減ずることも得ず、一言も抜き差しは出來ぬぞと稱讚した、長沙限り無き意、コレは幾ら言ふたからても言ひ盡せるものではない、と雪竇の聲のマダ止まぬうちに圓悟がビシヤリと便ち打つ何うだ雪竇あまりに興に乗じて夢中になつて諠つて居るのが此の一棒で目がさめたか、目がさめたなら、最後の一句を什麼とか道ふぞ、其の言ひやう次第では長沙も首座も雪竇も皆一坑に埋却するぞ、恐らくは鬼窟裡に墮在して自由がさくさいと言ふて結句に力をつける、ソコで愈々結句は咄、サスガは雪竇の遊山は是れまで芳草だの落花だの羸鶴だの狂猿だの色々なことを並べたのも、只この一咄でことごとく一陣の颯風に艸も木も家も人も吹き飛したやうな景況ぞ、着語に草裡の漢イヤ末

後の一句はモツと力があらうと思ふたにヤツぱり落草とまぬかれぬぞと抑へ更に賊過後の張弓今ころになつて咄散したからと云ふても間に合はぬぞと言ひ更に放過すべからず我れ圓悟ならば中々まだ其れては許さぬと云ふので評唱の結末には若し是れ山僧ならば即ち然らず長沙無限の意地を堀て更に深く埋めんと言ふてある其れが即ち圓悟の遊山のしかたである

第三十七則 盤山三界無法

垂示掣電之機徒勞佇思當空霹靂掩耳難諧腦門上播紅旗耳背後輪雙劍若不是眼辨手親爭能搆得有般底低頭佇思意根下卜度殊不知鬪體前見鬼無數且道不落意根不抱得失忽有箇恁麼舉覺作麼生祇對試舉看

掣電の機と云ひ空に當る霹靂と云ふは語を分けて對句にしたまてのことと同じく宗師たる衲僧が學人を接する活機の敏捷峻峻なる様子を形容したのである斯

る俊發なる機鋒に接せられる時にあたつて學人たる者が少しでも徒づらに佇思に勞しと彼れの此れのこと思慮分別にわたるやうなことであつたならば耳を掩ふに諧ひ難して到底その雷電に打たれて震死するより外はない是の時の宗師の有様は腦門上に紅旗を播け耳背後に雙劍を輪して居るやうなものぞと云ふ紅旗といふは當今の戰場で降参の時に用ゐる白旗の反對で大勝利の時に建てる旗を赤幡とも云へば紅旗とも云ふ其の大勝利の旗を最初から腦門上すなはち頭の上に高く掲げて接得される學人の耳背後すなはち頭のまわりへ二た振りの刀を推し當てゝ居るやうなものモハヤ學人の命は無いと定まつて居るのであるかやうな時に臨んだ學人たるものが若し是れ眼辨じと敏捷に機先が見えて手親くと間に髪を容るゝすさまじく無く咄嗟に斬り込むことが出来なんだなら争でか能くあたり得ん到底ち相手になれるものには無い然るに有般底は低頭佇思して意根下に卜度し此の有般底といふ語は常に聞きなれない言葉であるが般の字はアチラコチラといふことを那般道般といふやうな時に使ふと同じことで別に意味は無いコゝでは或人はといふまでのことであるが其實は或人はぐらゐのことでは無い

大概の者は低頭佇思して意根下に卜度するるのである、意根といふは今さら申すまでもないが、當今の言葉で云へば脳髓中といふほどのことであるが、結局凡夫普通の脳髓で幾ら考へて見たからと云ふても、玄の又玄、衆妙の門とも云ふべきことが分別し得らるべきものでは無い、昏に分別し得られないだけのことならばマダしものこと、殊に知らず、獨體前に鬼を見る無數ならんと種々様々なる幻想幻覺の續起して神經病人となつてしまふであらう、然らばコレは何うしたら好いてあらうか、且く道へ意根に落ちず得失に拘はらず思慮をも離れ且つ勝敗の如何などといふ考をすべて打棄て、そうして忽ちに箇の恁麼に擧覺することあらば前に謂ふたやうな掣電霹靂底に接せられる時にあたつて作麼生が祇對せん、サ、何うするぞ、試みに擧す看よ、

本則 擧盤山垂語云、三界無法人既離法無返向勢、何處求心既離法無返向勢

心既離法無返向勢、何處求心既離法無返向勢

幽州の盤山資積禪師は馬祖の法嗣で後に勅して凝寂大師と諡號を賜はつた高僧

である、此の人は最初まだ俗人であつた頃のことであるが、肉屋の肆へ肉を買ひに往て、好い肉を賣てくれと言ふた、其時に肉屋の亭主が皆こと／＼好い肉で御座いますと言ふたのを聞いて、チラリと宇宙の活機を發明した實に其れに違ひない天地萬物ひとつも悪いものは無い、それを好いの悪いのと擇り嫌ひするのは擇り嫌ひするものゝ罪であるといふことを合點した、それから本統に修行する氣になつて終に古今に屈指の大宗師となられた人である、其人が或時門下の衆僧に對して垂語して云く、三界無法何の處にか心を求めん、コレは盤山が四言四句に示されたので、此次の二句は四大本空なり佛何に依て住せんと云ふのである、今は其中から雪竇が前二句だけを擧て頌せられたのである、サテ此れが即ち掣電霹靂底の垂語であるから、苟くも佇思して分別知解にわたつては喪身失命するより外は無いのであるから、人々各自に實參實究するより外に致しかたは無いのであるけれども、之を講話するといふことになつては亦た已むを得ずして婆々談義をせんければならぬ次第である、サテ三界といふことは常には欲界と色界と無色界との三つであつて、其の實は限りのあることであるけれども、今は三界といふ言葉に拘はらず

に之を十方法界すなはち無限の空間のこと、思ふが好い、サテ其の無限の空間中に有りとあらゆる森羅萬象を二つにわけて心と云ひ法と云ふ、當今の言葉では精神と物質との二つとも云ふてあらう、然るに其の心と法との關係に就て昔から心外無法とも萬法唯識とも云ふて心識にばかり片寄つた説を主張するのが佛教者の常である、ソコでやゝもすれば佛心であるとか心印であるとか頻りに心にはかり付きまわる病がある、今盤山は其病を切斷的に療治してやらうと云ふので、一體六祖大師も本來無一物と言はれた通り此の十方法界中に法とか物とかいふべきものは無い、已に無法無物であるとしたならば何處に心といふものがある、常に法があると思ふから心の外に法が無いとか又は法が直に心であるとか色々な妄想を逞くするのであるが抑も其の法の法とすべきものが根本的に見とめられないとしたならば、其れと相對して精神とか心識とか認むべきもの、無いといふことは當然で無いかと云ふのである、圓悟の着語に、箭、既に、弦、を、離、れて、返、回、の、勢、な、し、三、界、無、法、と、射、と、ば、し、た、一、箭、は、再、び、取、り、返、し、や、う、が、無、い、宇、宙、萬、象、み、な、盡、く、勦、絶、し、了、つ、た、ぞ、月、明、照、し、見、る、夜、行、の、人、い、や、し、く、も、口、を、開、け、ば、ハ、ヤ、第、二、第、三、に、落、つ、る、の、で、

三界の無法のと言ふだけ却つて三界の法に心のこりがあるやうに聞えるのが、恰かも月あかりて夜行の人の影が見える如くであるぞと評した又中れりたしかに本來無一物の當體が見えたぞ、しかし法を識る者は、懼る、イ、ツ、を、三、界、と、も、無、法、と、も、言、は、な、い、の、が、本、統、で、あ、る、已、に、言、ふ、て、は、ハ、ヤ、法、に、背、く、ぞ、好、し、聲、に、和、し、て、打、た、ん、盤、山、が、三、界、と、言、ひ、出、し、た、時、に、皆、ま、て、言、は、せ、ず、に、ド、シ、ン、と、打、ち、と、ば、し、て、や、る、べ、き、で、あ、る、ぞ、と、云、ふ、何、處、求、心、の、下、の、着、語、に、人、を、瞞、す、る、こ、と、な、く、ん、ば、好、し、盤、山、は、誰、も、彼、も、心、を、求、む、る、者、ば、か、り、の、や、う、に、思、ふ、て、其、様、な、こ、と、を、言、ふ、の、で、あ、ら、う、が、其、う、人、を、馬、鹿、に、す、る、も、の、で、は、無、い、わ、れ、圓、悟、な、ど、は、最、初、と、か、三、界、だ、の、法、だ、の、心、だ、の、と、い、ふ、や、う、な、こ、と、に、少、し、も、關、係、は、無、い、ぞ、重、ね、て、擧、す、る、を、勞、せ、ず、已、に、無、法、と、云、ふ、た、な、ら、又、其、上、に、無、心、の、説、明、を、す、る、に、は、及、ぶ、ま、い、と、抑、へ、自、ら、點、檢、し、て、看、よ、御、自、分、の、お、手、前、は、何、う、で、あ、る、ぞ、と、盤、山、に、向、ふ、や、う、に、聞、か、せ、て、學、人、へ、の、警、誡、で、あ、る、便、ち、打、て、云、く、是、れ、什、麼、ぞ、此、れ、是、の、一、擊、此、れ、は、法、か、無、法、か、心、か、無、心、か、三、界、か、法、界、か、是、れ、何、ぞ、と、參、詳、し、て、看、よ、と、言、ふ、

頌 三界無法 何處求心 白雲爲蓋 流泉

作琴

○開一○相○來也

一曲兩曲無人會

音不六律盡分明○自領出去○聽則

雨過

夜塘秋水深

○帶水○在○在○便打

雪竇は例の如くに本則の三界無法何の處にか心を求めんと云ふ二句をソツくり其儘に謠ひ出した吾々も此二句を聲ほがらかに幾たびも幾たびも謠ひ味はふて其妙味が不言の間に合點せられて忘れないうらになる時節がなければならぬ着語に言猶ほ耳に在り先刻盤山から聞えたるのを忘れて居らぬに重ねて擧すること勞せざれソ一幾たびも言ふには及ばぬ人に向つて盤山の口真似をするよりは自ら點檢して看よと例の雪竇に向ふ言葉を以て吾人への警束である然らば其の三界無法無心の有様は何んなであるかと云ふに白雲を蓋と爲し流泉を琴と作す仰いて青山を望めは暈々たる白雲を被つて峨々として聳えて居る俯して碧溪に臨めは潺々たる流泉の聲が天籟の琴を鳴らして居る見るにつけ聞くにつけ無法の法のうちるはしき無心の心のどかさよと云ふもハヤ第二第三で彼の白雲は無法を名乗りをあげて去來しても居らねば彼の流泉が無心ぞと威張て奔騰して居るの

蓋も無い圓悟が頭上に頭を安ず青山ならば青山で足りる何が不足で白雲などを蓋とな やと撻着しイヤ其れが白雲ばかりでは無い種々様々なものが千重萬重よ其れは其はず無法の法無心の心は花とも咲けば月とも照る雨ともふれば風ともふく宇宙萬象みな其儘に三界無法何處求心の當躰である聞くやコレは學人に向つて彼の流泉の天樂が聞えたかと注意し更に相隨來也他人のお供をして居て聞えはぬぞ一たび聴けば一たび悲むに堪えたり此れが聞えた上からは其れは其れは悲哀の曲で感涙に袖をひたすであらうぞと云ふ然るに一曲兩曲人の會する無し餘りに其の曲調が高いに依て之を合點する者は無いといふたら大層にむづかしい遠方のとのやうに思ふかも知れんが日々夜々の天樂は元來會すべき底のものでは無い花が何と會して咲くぞ月が何と悟りて照らすぞ之を強めて名けて不會底の會とも曰ふか圓悟は其の曲調の説明をして宮商に落ちず角徵に干かるに非ず永嘉大師は之を説明して江月照し松風吹く永夜の清霄何の所爲ぞと言はれた到底人間の音樂論で彼れ此れと批判するとは出來ぬ路を借りて經過す何とも言えぬとを強て不會と言ふのは譬へば通るべき路の無い所を他人の庭を通

りぬけするやうなものよと言ふ、と云へば音韻もなく曲譜もないのかと思ふものもあるかは知らんが、蛙聲は蛙聲、松風は松風、少しも混亂はせぬと云ふので、五音六律盡く分明、又自領出去、コレは其の人の會する無しといふは他人のことでは無く、雪竇も前御自身が會し得ぬといふのであらうと雪竇をほめたのである、又聴けば、則ち聲すと言ふ此の曲調を耳で聞かうとしたならば決して聞えぬのみならず、必ず耳が聾するぞとコレは吾人に此の曲調の聞きかたに就ての注意である、然らば雪竇は之を如何やうに聞いたぞ、雨過ぎて、夜塘秋水深し、雨後の池塘に水が多い、夜の字や秋の字に用は無、飯を食へば腹が張るといふも、風が吹けば涼しいといふも同じこととて、平常其儘いはゆる現成公案ぞと云ふのである、圓悟が迅雷耳を掩ふに及ばず、此に到つては彼れの此れのと行思卜度すべきでは無いけれども、雪竇が斯のやうに説き立てるのは直に得たり、拖泥帶水、ハヤ兒を惑みて醜を忘れたる様、見にくさよと讃歎し、什麼の處にか在る畢竟落處は那邊に在るか能く參拜せよと諸人に警誡し、便ち打つと従上のすべての葛藤を勦絶し了つた。

第三十八則 風穴鐵牛機

垂示 若論漸也返常合道。鬧市裏七縱八橫。若論頓也。不留朕迹。千聖亦摸索不着。儻或不立頓漸。又作麼生。快人一言快馬。一鞭。正恁麼時。誰是作者。試舉看。

いかなる物にも必ず裏と表がある如く、いかなる仕事にも亦た必ず正則と變則とがある、佛教といふも禪學といふも已に社會の一現象であるとして見れば、此れにも必ず一往は両面なければならぬわけである、ソコで釋迦一代の説法にも大小權實頓漸顯密等の差別があつて各宗各派それ／＼に其方法手段を異にして居る、いかに不立文字教外別傳の禪宗でも自づから其の手段に色々あつて或ひは放行或ひは把住臨機應變に學人を接待するのである、乃ち今この垂示に若し漸を論ずれば也た常に返して道に合ひ、鬧市裡に七縱八横すといふは謂ゆる放行の方で、學人の機根まかせに寛々と誘導してゆくのである、漸といふは頓に反して追々と進ま

せるといふこと、其れには常經といふ正面の大道ばかり踐むわけにはゆかぬに依て、常に返してコノ返の字は反の字と同じに見るが好い、即ち平常とは違ふて横道とあるくこともあるけれども、其れが其まゝに正き道に契合する、其横道といふは謂ゆる落草の手段で鬧市裏といふ五濁惡世の貪欲瞋恚愚痴煩惱の眞ツ只中を七縦八横と自由自在に奔走する、例へば支那に於ては布袋和尚だの傅大士だの紙衣道者だのといふ人たちが、凡俗に混じて變則な化導をせられた類、日本でも一休和尚が地獄太夫といふ娼妓相手に青樓に遊んで居たといふやうなこと、親鸞上人の肉食妻帯も禪とこそ言はぬ其の意味は同じことである、其れであるから近代日蓮宗に於て傑出の高僧であつた優陀那日輝上人は親鸞蓮如二師を評して、在家同事の姿を以て一乘圓頓の法を弘む能く大乘の旨を得たりと言はれてある、サテ又これと反對に頓を論せば也た、朕迹を留めず、千聖も摸索不着、これは謂ゆる把住の方て少しも緩漫をゆるさぬ直指單傳の正面からゆくのである、朕迹といふことは第十三則の垂示で委しく辨じて置いた通り、朕は物のさざしあつてマダ現はれない所て云ひ迹といふは已に其象が現はれた上て云ふ、今は其の迹のみならず朕をも

留めないのであるから三世の諸佛も歴代の祖師も摸索不着て此れはコウ彼はア一と説き明かしやうが無いのである、サテ此れまでの所は漸と頓、放行と把住互ひに兩々相對したのであるから、朕迹を留めぬと言へば其の留めぬといふ所に手掛りがあるが、モ一一つ或は頓漸を立せずんば又作麼生モハヤ頓とも漸とも放行とも把住とも言はぬ、例へば有るなら有るて好し無いなら無いて好し何とでも考へは附けやうけれども、有るてもなければ無いてもない、然らば有無の中間かといふに其の中間でもないといふことになつては何とも手の着けやうがない、之を禪語で鐵椀子だの鐵饅頭だの鐵蒺藜だのといふ、近頃の奕堂禪師は鐵砲玉といふた、實に筒を離れて飛び出した鐵砲玉ほど手のつけやうの無いものはあるまい、それが即ち快人の一言快馬の一鞭で一言下に千悟萬悟を開き一足とびに千里萬里を走る、正恁麼の時誰が是れ作者サ、斯かる場合になつて誰が能く其人であらうぞ、試みに擧す、看よと本則を提出する、

本則 擧風穴在鄧州衙内上堂云依公說 祖師心印狀似鐵牛之機千人萬人不助 去即印住正令當住 即印破再犯不容

只如不去不住○多無頓悟印卽是不印○天下人頭出頭沒卽是○但謂振倒禪床

時有廬陂長老出問某甲有鐵牛之機○得一箇請喚請師不搭印○文彩已

好箇話頭○爭奈話頭穴云慣釣鯨鯢澄巨浸却嗟蛙步○不妨奇特驤泥沙○神駒千里陂

佇思○可憐許穴喝云長老何不進語○妙問來也陂擬議○三回死

穴打一拂子○好打穴云還記得話頭麼試舉看○上加霜陂

擬開口○一死更不再活穴又打一拂子牧主云佛法與王法一

般○灼然招其亂○似則似是非則非穴云見箇什麼道理○也好與一抄牧主云當斷不斷返

招其亂○有眼穴便下座○且得參學事

風穴の延沼禪師は臨濟大師の曾孫で達磨第十四世の祖師である時代は唐が亡びて宋がマダ興らぬ五代亂離の頃であつたが鄧州といふ國の牧主すなはち昔の日本て云へば國主大名といふやうな人で名は何と曰ふたか分らんが其人が此の延

沼禪師を自分の役所へ請待して置て頻りに參禪したものと見える乃ち此の本則も其頃の事であつて風穴鄧州の衙内に在て上堂す衙の字は唐朝に於ては天子の居を衙と曰ふとあるけれども其れが轉じて後には都べての役場を官衙衙門だのいふことになつた上堂といふは禪宗の師家が門下の一同に垂示して聞かせたり問答商量させたりする時の正式で法堂の正面の須彌壇上他の宗旨の本堂ならば彌陀とか釋迦とか本尊佛を安置してある處へ和尚みつから登つて法を説くのである圓悟が公に依て禪を説く國主の請に依ての説法であるから私し事では無いぞと擲論し又什麼と道ふぞ元來說くべきの法は無いはずであるかと答めた云く祖師の心印狀鐵牛の機に似たり祖師には達磨大師初めて大師が支那へ來られた時に梁の武帝と問答があつて其の結局大師は佛の心印を傳ふるために來られたのであると寶誌和尚が言はれたことは第一則で委しく話した通りのことである其の心印といふものは何であらう時としては真如とも佛性とも菩提とも涅槃とも又は本來の面目とも主人公とも色々の名をつけられるものであるが人々各自に此心印を所持して居ない者は無いのであるけれども其狀がどんなものであら

うやら能く見届ける人は甚だ少ない、ソコで今風穴禪師が其狀の説明をして鐵牛の機に似たりと言ふ、この鐵牛といふは陝州といふ處で黄河を守護してもらう神として鐵の牛を造り、黄河を跨いで頭は河南に在り尾は河北に在り歲時に祭りをして其守護を祈るのである、そうなる、非常に壯大なる鐵の牛であるから到底動かすことも出来ねば幾ら水が出て流れる憂ひもない、本より鐵で造つたのであるから活きて居るのでは無いけれども、其れが州民の祭りを享けて河を護るとして見れば死物とも言はれぬ、吾人互ひ人々各自の心印も亦た其のやうなものぞと言ふ、圓悟が千人萬人撼せども動かすと言ひ、又諸訛節角什麼の處にか在ると言ふ、諸訛といふは齋牙といふも同じで物の複雑して辨じにくいこと、節は木や竹のフシ角は牛や羊のツノ皆堅くて俄に截断しにくいこと、乃ち今は心印は鐵牛のやうであると言へば手のつけ難いものであらうが、其の手のつけ難い處はどこに在ると學人への警誡である、三要印開して鋒銚を犯さず、コレは臨濟大師に三玄三要といふ教があるので、一句語須らく三玄門を具すべく一玄門須らく三要を具すべしとも言はれてある、今この事を委く言ふて居る暇は無いが、今此の風穴が鐵牛の機

に似たりと言ふた一句に三要を具足して居て而して其痕迹は見せてないといふ、たのである、去れば即ち印住し住すれば即ち印破す、心印といふ印の字は元來誰も使ふて居る印判に譬へたのである、印は都ての文書などに間違ひの無い證據として押すものであるから吾々の心も佛祖の心も少しも差異がないといふ證形の立つのが即ち心印である、已に印判に譬へたのであるから更に印判の押しやうに就て去れば即ち印住し住すれば即ち印破すと言はれた、之を通俗に言ふて見れば印を押すときに其印を氏の上へ推し附けて置いたのでは其印の用をなさない、其印を取り去つた時に印の文字が明かに現はれるのであるから、去れば即ち印住するのである、コ、の住するとは印文が紙の上に留まるといふことぞ、然るに若し之と反對に印判を紙の上に住し留めて置いたならば印判はあつても印文は破す、コ、の破すとは其文が現はれないから印が印の用をなさないといふこと、けれども印判の外に印文はなく印文を棄て、印判の用はない、之を禪語で言へば放行と把住との關係で孰れと定められたものであらうぞと言ふのである、着語に正令當行、此の印住が祖師門下の正き法令の行はるべき所ぞと言ふ、又錯と言ふ去るの去らぬのとは問

違ひぞと咎める、印破の下に再犯容さず、前の印住て済て居るては無いか、令行する時を看取せよ、印住であるか、印破であるか、實地に當つた時にどうするかに氣をつけるとコレは學人への注意、抄と氣をつけて置いて、便ち打つコレが圓悟の正令ぞ、只不去不住の如きは、即ち垂示に頓漸を立せずといふた場合、放行とも把住ともつかぬ時節、着語に看よ、頓置の處なきをコ、の頓の字は垂示に謂ふ頓漸の頓ては無、頓置といふは日本の俗語にチヨイと置くといふほどのこと、不去不住となつては、印判の置き場處がないぞと言ふのである、多少の請訛餘程むづかしいぞと言ふ、果して印するが即ち是が印せざる即ち是が其實こゝに到つては、印も不印も無い、印住も印破も無い、其の様な場所を通りぬけた話であるけれども、風穴が學人を釣り出さうとて斯う引つ掛けられたので之を釣語と謂ふ、圓悟が天下人頭出頭没するに分あり、斯う引つ掛けられては誰でも皆色々氣を揉むであらうとコレも亦た學人を釣たのである、しかし文、彩、已に彰はる、其の釣竿がアリアリと見える、それに就ては、但請ふ、禪牀を掀倒した、大衆を唱散せんことをモハヤ風穴に説法をさせぬが、好いぞと言ふ、時に、廬、陂、長老といふものあり、出て、問ふ、某、甲、鐵、牛の機あり、此の廬

陂長老といふ人も同く臨濟下の高僧であるといふことだが、大衆の中から突然飛出して我に鐵牛の機ありと名乗りをあげた、しかしコレ廬陂に限つたことでは無い、十方法界の一切衆生誰れ彼れに論なく皆鐵牛の機の無い者は無いはずである、但この鐵牛が如何に活動するかといふ所が問題である、廬陂長老果してウマクやり逐ふせれば好いが、着語に風穴が大層な勢ひて下した釣針にヤツと一箇の暗曉得を釣り得たりと言ふ、暗曉といふは知りもせぬことを知つたよりする者のことである、そうならながら誰ありて口を開く者の無い中に進み出たは、妨げず奇特である、サテ又廬陂が言ふことには、請ふ、師、印を搭さざれ、拙僧の鐵牛の機は印住だの印破だのといふ疵はつけてほしくない、ソツくり本のまゝにして置てもらひたいと言ふ、着語に好箇の消息、中々うまうやるぞとほめた、しかし請訛を争奈せん、風穴の下した釣針の餌は容易に齒は立つまいぞと危ぶむ、果して穴云く、鯨、鯢を釣て、巨浸を澄ましむるに慣れて却て嗟す、蛙歩の泥沙に輾するを、巨浸といふは多くの水の集つて居る所といふ義で、大海のことである、鯨、鯢の如き大魚が遊泳してある、けば海水が濁るに依て其れを捕獲すれば、大海が澄む、其ういふ仕事には慣れて居

るけれども蛙がヒョコ／＼して泥沙にころがつて歩くのなどは餘り面白くも思はぬといふので、コレは誰ぞ古人の句であるやら風穴の卒作であるやらは分らんが、とにかく鯨を釣らうと思ふたに蛙がと鷹を壓倒せられたのである。圓悟が鶴の鳩を捉ふるに似たり、風穴が鷹を壓伏するに何の世話があるものかと言ふ、又賽網空に漫たり、風穴に更に其の様な大網をおつかぶせられて、誰でも出頭はむつかしいぞ、實に風穴は神駒千里の勢ひであるとはほめた、陂竹思す大層な勢ひで問端を起したにも拘はらず、忽ち却退とは實に可惜許である。しかし此に至つて一獸ものいはぬ所に也、た、出身の處ありと冷かし、惜む可し、放過したることを我であつたならば、風穴に一棒を食はせて閉口させるであつたと言ふ、其れと反對に穴喝して云く、長老何ぞ進語せざる、サ、何とかナセ言はぬぞと攻め寄せる、着語に旗を擺き、鼓を奪ふ、その上に炒開來也、関の聲をあげて、鷹軍を全滅させる勢ひぞと云ふ、陂擬議す、擬議は何か言はうとして言ひ得ぬ貌である、着語に三回死し了る、又、兩重の公案前の竹思て澤山だに幾たびも醜態をあらはすと咎めた、穴打つこと一拂子と拂子を以て打つ勢ひを示した、着語に好打まことに好い打ちやうぞとほめ、這

箇の令は、須く是れ、恁麼の人にして、行して、始て得べし、風穴ほどの人であつてこそ此の一拂子に價直があると言ふ、穴云く、還て話頭を記得すや、試に擧し看よ、最初から自分に鐵牛の機があると言ふたては無いか、其れを忘れたか、若し忘れないとならば、ナセ鐵牛らしくせぬぞと死骸を更に鞭つやうな慘酷な接しかたである、圓悟は何ぞ必とせん、何も其れを記憶して居らねばならぬ必要はあるまいと言ふ、雪上に霜を加ふ、其の様に重ね／＼壓迫せん、ても好い、陂口を開かんと擬す、長老マダ息がある、と見える、しかし圓悟は、一死更に、再活せず、到底蘇生は出來ぬ、又、這の漢は、人を鈍置殺す、狂人走れば不狂人も亦た走るといふたやうなわけ、鷹の如き鈍漢を相手にして居ると誰でも皆鈍漢にされてしまふぞと言ふ、しかし他の毒手に遣ふ、風穴の如き惡辣の接得に遣ふたは氣の毒な次第である、穴又打つこと一拂子、いよく留めをさしてしまふた、教主云く、佛法と王法と一般この教主平常風穴の提撕をうけて居るだけあつて結局の裁判宣告に及んだ、着語に灼然、それに相違ないと贊成した、却て傍人に、觀破せらる、岡目八目とは能く言ふたものぞ、然るに風穴今度は教主に咬みついて穴云く、箇の什麼の道理をか、見る次第に依ては、お前も許さぬ

どと云ふ勢ひ、着語に也た好し、一拶を興ふるにと云ひ、又鎗頭を却回し來ると云ふ、
 牧主云く、斷ずべきに當りて、斷ぜざれば返て其の亂を招ぐこの語は、黄石公の語て
 あると云ふことだ、世間の事でも出世間の事でも皆姑息では禍亂の本となる牧民
 の職たる高官の人にして別して此語に價直がある、しかし是れは世間の常情を以
 て本分の大事を推量するのであるから、圓悟は似たることは、則ち似たり、是なるこ
 とは、則ち未だ是ならずと咎めた、しかし専門家の盧陂に比すれば、須く知るべし、傍
 人に眼あることをと上げたり下げたり、更に東家の人死すれば、西家の人哀を助く、
 長老の死だのを、牧主が弔慰する氣味だと言ふ、穴便ち下座下座とは上堂を畢りて
 壇を下ることである、牧主の理窟的説明で下座とは錯を將て錯に就くと云ふもの
 ぞと圓悟は抑へ、又機を見て變す下座すべき時機になつてからである、と扶けコレ
 て先づ且らく、參學の事畢ることを得たりと結勸した、

頌 擒得盧陂跨鐵牛千人萬人中也要呈巧 三玄戈甲未經酬當局者迷

如受降 楚王城畔朝宗水天地任是四海也須列流 喝下曾令却倒流不是道

却倒舌頭 鐵牛蘇州大泉

盧陂を擒得て鐵牛に跨がらしむ、風穴が上堂した時に多くの衆僧も居たであらう
 が、其の中から盧陂一人がケナげにも進み出たのであるから、何うかして之を眞の
 鐵牛たらしめやうと風穴が骨を折られた有様を鐵牛に跨がらしむと頌した、故に
 圓悟も千人萬人中也た巧藝を呈することを要すと盧陂を悟らせたいと思ふた様
 子を説いて居る、しかし敗軍の將は再び斬らず、今更に盧陂を批評しても仕かたが
 ないと言ふ、三玄の戈甲未だ輕しく酬ひず、盧陂を鐵牛に跨からせは跨からせたい
 れども、臨濟門下の三玄の戈甲は少しも緩漫に放過することは出来ぬから自然
 に峻峻孤危の接しかたになるのである、臨濟の三玄三要といふことは、鉢中玄と句
 中玄と玄中玄との三玄、又空と有と非有非無との三つて之を空と水と泥とに喩へ
 たのが三要である、委しいことは臨濟録を見るか好い、サテ風穴は其の臨濟の嫡孫
 であるから、此の三玄三要といふ武器すなはち戈甲に身を固めて戰爭するのであ
 るから中々容易に敵對は出来ぬ、着語に局に當る者は迷ふ局といふは、碁盤のこと
 て其れに當る者とは碁を打て居る人といふことである、誰しも負けやうと思ふて

碁を打つ者は無いけれども、勝たう勝たうと思ふて居るうちに遂に失敗するのである。其れ故に三玄三要て少しも油断をせぬのが肝心であるぞ。災を受くるは福を受くるが如く、降を受くるは敵を受くるが如し。一目二目負けたからと云ふても悲みもせず、又勝たからと云ふても喜びもせぬ所に終局の大勝利を得るので、其れが臨濟下の門風である。と云ふ、これにて本則の頌は濟だが更に楚王城畔朝宗の水。この楚王城といふは即ち郢州牧主の衙が其舊趾であるといふ、即ち今は風穴の座下をさす朝宗の水とは今さら申すまでもない、百川の水は盡く大海に流れこむことを朝宗するといふ、其の本は諸侯が天子の闕下に參朝することをいふのであるけれども、今は其れを川の流に用ゐたのである。サテ彼の水が低い方へ低い方へと海をさして流れゆくのであるけれども、喝下曾つて却て倒流せしむ。風穴の機鋒は其の順流の水をも一喝の下に逆流させる力があるぞと、其の宗風の孤危峻峭比類なきことを稱揚したのである。若語に、什麼の朝宗の水とか説かん、百川の海に朝するぐらゐのことも無い、浩浩として、天地に充塞す、十方法界水漫々ぞ、サテ風穴の宗風は楚王城畔の水くらゐのことでは無い、たとひ是れ、四海も也、た須く逆流すべし、又結

句の下に是れ、這の一喝、爾が舌頭を截断するのみに非ず、陝府の鐵牛を驚走し、嘉州の大象を嚇殺す、陝府の鐵牛は前に略辨した通り、黄河の神として造つた大鐵牛、又嘉州の大象といふは唐の玄宗皇帝の時に沙門海通といふ人が嘉州の大江といふ處へ高さ三十六丈の彌勒佛の石像を造つたといふことがある、今風穴の一喝の下には盧陂が口をあげないぐらゐのことでは無い、黄河を跨いて居る鐵牛でも三六丈の石像でも皆吹き飛ばされてしまふぞと、飽まで風穴の宗風を稱讚し盡したのである。

第三十九則 雲門金毛獅子

垂示 途中受用底。似虎靠山。世諦流布底。如猿在檻。欲知佛性。義當觀時節。因緣欲煨百鍊精金。須是作家爐鞴。且道大用現前底。將什麼試驗。

此の垂示は學人の得失を明された先づ途中受用底ならば虎の山に靠るに似たり。

と此れは即ち得の方で、途中といふは未だ到るべき家舎まで行き着かぬのであるからマダ安穩無事の人とは言はれないけれども、ハヤ途中に在りながらも家舎同様自由自在に本分の事を受用するほどの人であつたならば、さなきだに猛き虎が山に據り嶋を負ふたやうなもので、其威憚凜然たること恐ろしい勢ひであらう、然るに其れとは反對に世諦流布底ならば、猿の檻に在るが如し、世諦流布と云ふは世間の人情に引かれて居る人のやうに、彼れの此れのと思量分別に使はれて居るやうなことであつたならば、さなきだに狂躁痴愚なる猿が檻の中へ入れられて居るやうなものであるぞ、されば佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし、コレは涅槃經の文で、吾人參禪學道の上に尤も大切なる聖訓である、佛性は本より人々具足して居るには相違ないけれども、其の妙用を現はすためには其れくの修行を積んで其の功の顯はれる時節に到らねばならぬ、永平寺開山承陽大師は其事に就て、此法は人々分上ゆたかに具はれりと雖も、修せざるには顯はれず證せざるには得ること無しと言はれてある、其れに就ては正き師家の提撕をうけるのが尤も肝要で、若しも其の人にあはなければ、何ほど志はあつても幾ら力を盡しても、

全たく徒勞に屬することが多い、乃ち百練の精金を煨へんと欲せば、須く是れ作家の爐鑪なるべし、つまりらぬ爐鑪では百練の精金を煨へることが出来ないと同様に、作家の座下に參じないでは本統の悟りが開けないぞと云ふ且らく道へ大用現前底は何麼を將てか試験せん、サ、其の作家の洪大なる機用は如何やうに働らくものであらうぞ、本則を看よと結歸した、

本則 擧僧問雲門。如何是清淨法身。門云。花藥

欄同處不眞答來幽莽僧云。便恁麼去時如何。門云。金毛獅子

也。實也。既。兩。采。一。實。將。歸。就。結。是。什麼。心。行。

雲門大師のことは前に屢々出てある通りのことであるから今は略して、或る僧が大師に對し如何なるか、是れ清淨法身と問ふた、コレは今更に事新らしく申すまでも無いが、凡そ佛身には法身と報身と應身との三つある、其中で三千年前に印度へ生れたといふ釋迦佛の如きは應身といふので衆生の機根に相應じた形をあらはしたまでの佛である、又極樂の教主と稱する阿彌陀如來の如きは宗派に依て色々

といふけれども淨土宗や眞宗では報身の佛であると云ふ、又其の法身はといへば釋迦の方では久遠實成の釋迦と云ひ、彌陀の方でも久遠實成または法性法身の彌陀と云ふのであるが、其の惣名は摩訶毘盧舍那如來て之を漢譯しては徧一切處とも大日とも云ふのである、然らば其の法身佛の姿は如何なるものであるかと云ふに宇宙萬象日月星辰山河草木禽獸蟲魚ありとあらゆるものは皆ことごとく法身のあらはれたので本來現成其儘であるから清淨法身である、清淨といふも空といふも無礙といふも同じこととて、無爲無作に天真爛熳たる、形容に過ぎぬのである、今此の僧が雲門大師に向つて其法身佛を問ふた、圓悟が塩坂堆頭、丈六の金身を見る、と言ふ、塩坂堆頭といふは塵埃穢土の集つた處といふこと、其の穢らはしい芥菜場さいさいばに一丈六尺の金色赫々たる如來の身を見ると此の問題の突然として起つた様を言ふ、又班々駭々その法身とかいふ者は虎のやうな毛色でもあり、又馬のやうな毛色でもあり、何とも言ひやうのないものぞと言ひ、更に是れ、什麼ぞ抑も其れは何てあらうぞと學人を警發させる、門云く、花藥欄けりやうらんコレは花畑のことだ、そやうな之を此語に就て彼れの此れのと幾ら思慮分別して見ても清淨法身に益々遠ざかりこそすれ、

決して法身を生けどりにすることは出来ぬ、只々如何なるか、是れ清淨法身花藥欄、如何なるか、是れ清淨法身花藥欄と打成一片に拈し去り拈し來りて、時節因縁を觀するの外は無の着語に問處眞ならざれば、答へ來りて、莽鹵なりとある、言句の上に法身を求めて問ふ者も不都合なれば、其れを相手にして答へる者も不都合ぞと、此の問答を一言に勦絶してしまふた、登着、撞着といふは打ては響くといふやうな意味の俗語で、こちらでカチリと云へばむかふてもコツリと云ふと言つたやうなことと見える、乃ち今の問答の法身と打ては花藥欄と響いた機合を評したのである、又曲は直を藏せず、曲つたものは曲つたまゝ、て別に直を飾らない、此の答話こたわは蓋天蓋地かいてんかいちで毫も掩ひ藏す所がないと云ふこと、僧云く、便ち恁麼おんまにし去る時、如何いかハ、然らば仰せの通り左様に心得た時には何うてありましやうぞ、と言ふ、此僧餘程俊發の人である、と見えて、此の進語に中々力があると云ふことだ、圓悟が渾崙こんろんに箇の棗さうを呑む、渾崙呑といふは謂ゆる丸呑といふこととて、而も棗の丸呑ては味も何にも全く分るまい、乃ち今此の僧が早や合點したぞと抑へ、又放恣ほうしして作廢さくぱい、この放恣と云ふ放はホシイマ、恣はオッカで關東邊の俗に遣りッばなしとか、だらしがな

いと云ふやうな意味と見える、乃ち此の僧が花薬欄といふ答に打ちまかせて便ち恁麼に去ると云ふ放任のしぐあひを評したものであらう。門云く金毛の獅子、金毛の獅子と云ふ語は常に他の語句を肯定して印可するときに多く使ふ言葉である。然らば今も雲門が此の僧の便ち恁麼にし去ると言ふたのを肯ふて許可したのかと云ふに、其うも思はれぬ、然らば肯はないのかと云ふに、其うも思はれぬ、ソコで此の語が尤も鐵槌子であると古人が皆其う言ふて居る、乃ち圓悟も也た褒し也た貶すと言ひ又兩采一賽と言ふ、采といふは双六の骰子のことで、兩人相對して双六の骰子を握る、兩方同一の目が出て、孰れが勝つたか孰れか負けたか分らないと云ふことと見える、賽の字は報賽なり、續いて勝を求めることである、錯を將て錯に就く彼の僧が恁麼にし去ると錯つたのを、雲門が金毛獅子と錯つたぞと双方を抑へ、遂に是れ、什麼の心行ぞと愈々益々吾人をして思慮分別し能はざらしめて、實參實究を勧められるのである。

頌

花薬欄

在耳

莫顛預

如麻似粟

星在秤

兮不在盤

太葛藤

金毛獅子

大家看

免脫

便恁麼

真諦

太無端

其語怪他

金毛獅子

大家看

放出一箇半

是狗子○雲門也
是普州人送賦

例の如く先づ花薬欄と雲門の答語を其儘に擧げた、故に圓悟は言猶ほ耳に在りと云ふ、然るに若し此の花薬欄といふ言葉に着き廻つたならば雲門の眞意を會することは出来ぬ、仍て瞞預すること、莫れウカ／＼と此の花薬欄を見てはならぬ、然るに此の語に着き廻つて雲門の清淨法身を見やうとする瞞預底のものが、麻の如く粟に似たりと圓悟は言ふ也、た些子あり尤も中には瞞預しない者即ち我圓悟の如きもあるぞ、却ても前雪竇は瞞預して居るかを知れぬと云ふので、自領出去ナセかと云ふに、星は秤に在て盤には在らず、星といふは權衡の目のこと、權衡の目は其の竿にこそ附けてあれ、皿の方には無いぞ、今この雲門の眞意も雲門の大機大用の上にこそあれ、花薬欄と答へた語句の上には無いぞと言ふ、然らば其の大機大用といふは如何なること、其の眞意は何處に何のやうな姿をして居るであらうぞ、着語に太た葛藤大層に面倒なことを言ふては無いかと、雪竇にあたり各自に衣單下に向て返觀せよ、衣單といふは僧堂で坐禪して居る時に、自分の牀の前に法衣其他の物を入れて置く戸棚のやうな處があるのを衣單といふのであるから、今は雲

門の花薬欄といふ語にも拘はらず、雪竇の葛藤を離れて、自分／＼の手元に立戻つて参究せねばならぬぞと學人への垂誡である。免かれず道理を説くことを、雪竇が秤に在るの盤に無いのと色々な説明、みな理窟だけのことであるから、惑はされないうやうにしるよとコレも學人への注意である。便ち恁麼前には雲門の答話をあげて頌し、今度は僧の進語をあげて頌す、此の進語が太た端なし。雲門が花薬欄と答へた所を直に會し去つたやうな積りて、咄嗟に其れなら其うと譯もなく承けた有様を、誠に簡潔に能く言ひあらはしたものである。着語に渾崙に箇の棗を吞むといふは本則の下で辨じた通りのこと、自領出去とは彼の僧よりも雪竇も前が太た端なしでは無いかと揶揄し、更に灼然と雪竇が端なしといふたに同意し、又錯て他の雲門を恠むこと、莫れ、コレは雪竇が太た端なしと言ふのに、雲門が金毛の獅子と許したのが變であるなど、言ふまいぞと云ふのである、いよく結句に金毛の獅子大家看よ大家といふは都べて此の公案に参する一般の人をさす、彼の僧が便ち恁麼にし去ると端なく言ひ出したにも拘はらず、雲門が金毛の獅子と承けた、此れは如何なる道理ぞ何とか思慮を容れられるか將た手が附かぬか諸人能く高く眼を着

けて看るが好いぞと云ふのである。着語に一箇半箇を放出す也、た是れ箇の狗子、金毛の獅子も其う幾たびも放出されては狗子も同じよと言ひ、更に雲門也、た是れ普州の人賊を送る、この中の雲門也、是の四字は行文であらうと風外老人の説である。左もあらん、普州の人は盜賊のことであるから、雲門と雪竇と盜賊仲間ぞと稱賛したのである。

第四十則 南泉如夢相似

垂示 休去歇去。鐵樹開花。有麼有麼。點兒落節。直饒七縱八橫。不免穿他鼻孔。且道請訛在什麼處。試舉看。

休し去り歇し去るといふは戦争に大勝利を得て凱旋した軍人が其の軍功にも誇らす悠々と晝寝をして居るやうな太平の姿で、すべての煩惱妄想こと／＼征伐し盡し、サテ又其の悟りをも打忘れて安穩無事なる衲僧の境界である。然らば其の境界の人は枯木死灰の如く何の活動もないかと云ふに、鐵樹花開くとあつて一旦

死地に陥つた軍人は、其の死中から大活を得て益々勇猛なる戦闘が出来るが如く、譬へて見れば鐵で造つた樹に花が咲くやうなもので、實に不可思議なる働らきのあらはれるものである。有りや有りや、現在目前その境界に到り得た者が何處に居るぞ、黠見は落節す小利口なものはチョツと鉢裁をつくらふて、其れに似たやうな働らきぶりをするでは有らうけれども、遂に落節してしまふぞ、落節といふは商人が物を賣りそこなふて損をすることである。到底利潤を得ることは出来ぬぞ、直饒それが七縦八横と中々立派に自由自在の働らきをするやうであつても、眞實作家の大善知識に遭ふては免がれず他に鼻孔を穿たれて如何ほど強き牛でも、鼻づらへ繩をとほされては、七八歳の牧童にも逐ひまはされて自由がさかぬことになる。且らく道へ諸訛什麼の處にか在る。サテ其の脊牙屈折のむつかしい所は何處に在ると言ふて試に擧す看よと本則を呼び出す。

本則 擧陸巨大夫。與南泉語話次。陸云。肇法師道。天地與我同根。萬物與我一體。也甚奇恠。鬼窟裏作活計。○靈餅不。○可充肌。○也是神。○靈商。○量。 南泉指庭前花。○此。○什。

唯○經有經師論有論師不于山僧事○唯○大○丈○夫○當
時下得一轉語不唯我斷南泉亦乃與天下稱僧出氣

召大夫云。時人見此一株花。

如夢相似。

○人○氣○驚○了○從○看○者○交○把○金○針○度○與
○人○氣○來○語○引○得○黃○鶯○下○柳○條

陸巨大夫は姓が陸で名は巨と曰ひ字を景山と曰ふ。蘇州の人で太夫の官に仕へて居たものと見える。かねて南泉普願禪師に參じて大悟徹底したと稱せられてあつたが、或時南泉と語話する次でに陸巨が云ふには、肇法師いはく、天地と我と同根にして萬物と我と一體なりと也。た甚た奇恠なりと斯う云ふた、肇法師といふは姚秦の時代に龜茲國から支那へ來て、法華經や阿彌陀經や、大智度論を、始め多くの經論を翻譯した羅什といふ人の弟子で、しかも此僧肇と僧叡と道生と道融とは什門の四哲と稱せられた其隨一である。後に難に遭ふて死罪に處せられた、其宣告をうけてから官に請ふて七日間の猶豫と筆紙墨とを得て、寶藏論と曰ふ大著述を後世に貽した大偉人である。其遺著を集めた肇論の中に今こゝへ陸巨大夫が話し出した語があるので、天地と我と同根で萬物と我とが一鉢である、天地萬物森々羅々ことごとく差別の姿で一つも同じものは無い、ソコで凡夫は其別々な所にはかり執着

して我見を起し妄想を逞ましくして、太平無事の宇宙間に種々様々なる風波を起すのである。然るに其の根本を尋ね其本體を求めて見れば、天地萬物も吾人も草木山川あらゆるもの皆ことごとく同一根本同一本體であると言ふのである。これは千差萬別なる諸法の方から其の根本體性にさかのぼつて見た時の話で、孔子流て大極を認め、耶蘇流てゴッドを認めるのも、多少程度に違ひはあるか知らぬが、大略皆同一筆法である。けれども更に其の孤峰頂上から頭を回らして、高い山から谷底見れば、瓜や茄の花さかりといふ景色を知らなければならぬので、之を常に却來とも退歩とも返照とも還相とも云ふて、都べて一乘圓頓の佛法では、名目こそ違へ必ずこゝに到らねばならぬのである。然るに今陸亘大夫は此の肇法師の語に目がとまつて、也た甚だ奇怪なりと言ふた。此の奇怪といふ言葉が肇法師を咎めたのであるとも見えれば、讚歎したとも見える。どちらであらうかが問題であるけれども、つまり陸亘大夫は此の語に驚いたには違ひないのである。宋朝以後の儒者輩が佛法を奪跡換骨して太極が無極であるなどと言ひ出した後は別として、唐朝頃の儒學者は韓退之を始めとして甚だ眼光の低い者であるから、陸亘が此の語に驚いたも無

理は無い、團悟が鬼窟裡に活計を作す、太夫の悟りが餓鬼道の料理の献立のやうであると言ふ、書餅は飢に充たす、古人の語を讀て悟りが開けるならば書にかいた餅を見て腹がふくれるであらうが、其うはゆかぬぞと云ふ、也た是れ草裡に商量す到底小徑邪路の婆々談義よと抑へる、南泉庭前の花を指して、日本では單に花といへば櫻のことであるが、支那では牡丹のことぞ、たうな、折から庭前に咲きほころびて居る牡丹の花を指さして、陸亘大夫に示された、着語に、什麼と道ふぞ、イヤこれは妙なことをする牡丹を指さして何うするのぞと氣をつける、咄イヤ餘計なことを爲んでも好いにと斥け、經に、經師あり、論に、論師あり、其れく商賈が違ふ、經論師の肇法師が何と言ふたからとても、山僧が事にあつからず、達磨門下の吾々が其のやうなことの相手になるには及ばぬぞと言ふて又咄した、大丈夫當時一轉語を下し得ば、唯南泉を截斷するのみに非ず、亦乃ち天下の衲僧の爲めに氣を出さん、今南泉が庭前の花を指さした其の途端に、陸亘が眞の大丈夫であつたならば、何とか目の醒めるやうな一轉語を言ひ出して、南泉が口を開かれないやうにしてやつたことであつたならば、古今參禪の人の爲めにも何程の活用を示したか、知れなんだに惜いこと

よと、陸亘の活機なきを抑へる、然るに遂に南泉に口を開かしめた、乃ち南泉は太夫とよんで云く時人此一株の花を見ること夢の如くに相似たり、世間一般の人々が此牡丹を見ても何の事とも分らず夢を見て居るやうなものよと言ふ、天地と我と同根であるとか、萬物と我と一體であるとか云ふことを理窟では分つたやうに思ふても、實際に天地萬物と己れと如何に同根であるか何處が一體であるかソコは全たく夢中であるから、宇宙萬象が皆バラ／＼になつて萬境と一心と少しも冥合することが出来ぬ、其れ故に己れが實際萬物の主となつて、如何なる場合にも如何なる時節にも自由無碍に活動することが出来ぬのである、斯ういふ風に講釋すると直に禪宗の人は理致だとか老婆だとか言ふて叱るけれども、實際の所は全くそこが肝要なのである、今この南泉と陸景山との問答は平常のわけもない茶のみ話の上のこと、別段に事々しく上堂とか小參とか云ふやうな表立つた商量では無いのであるから、別して南泉禪師の慈悲心があふれて見えるのが有り難い、圓悟の着語に鴛鴦绣し了りて、君が看るに従す金針を把て、人に度與すること、莫れとある、南泉の手段の美しくしさ鴛鴦の刺繡を見るやうであるが、此の美しくしさ刺繡をした金針

までも人に渡すこと出来ぬのであるから、陸亘が南泉の巧妙なる垂示を聞かすまで、到底その眞意を會得することは出来まいと云ふのである、寐語すること、莫れ、イヤ南泉が斯んなことを言ふのもヤツぱり寐言よと抑へ黄鶯を引き得て、柳條を下らしむ、陸亘が強論の文句ぐらゐに取りついて、同根だの一體だの一體だのといふほどのことに腰を据えやうとするのを柳條にとまつて居る黄鶯に比して、其れを口笛ふいて柳條を飛び離れさせやうとしたのが南泉の慈悲である、惜いかな陸亘の黄鶯がたしかに柳條を離れた様子は見えぬ、コレは陸亘といふ昔の人に任せて置いて済むことではない、人々お互ひに自己の脚下を照顧せねばならぬ、

頌 聞見覺知非一一一耳鼻舌身意 山河不在鏡中觀一時是箇無孔鐵鎚

共澄潭照影寒有麼有麼 霜天月落夜將半引爾入草了也 誰向人愁殺人

聞見覺知といふは眼耳鼻舌身意の六根が色聲香味觸法の六境に對し、あれは花である紅葉であると思われ、これは太鼓である笛であると聞きわけ、眼が耳の代り

も出来ず花が紅葉と融通もせぬ、天地萬物みな是の如くに一々に非すこと、千差萬別である、要する所は萬物は萬物自己は自己、現成公案そのまゝに何の不足があつて、同根だの一鉢だのと餘計な心配をして疵のない天地萬物を疵物にするのであるぞと言ふ、即ち本則の上で婆々談義をした通り、孤峰頂上に腰を据えて同根とか一鉢とかいふ平等一相の處にばかり取りついて、高い山から谷底見れば瓜や茄の花ざかりといふ好景色を忘れて居る所の病を療治する手段であるから斯ういはれるのである、着語に、森羅萬象、一法も有ること無し、元來天地も萬物も自己も他人も有たものでは無い、其れを聞見の覺知のと雪竇何を言ふぞと抑へるやうにして、其實は非一々の眞の意を示す、七花八裂、一々に非ず即ち別々であるから天地萬物チリ／＼バラ／＼ぞと云ふ、眼耳鼻舌身意、一時に是れ箇の無孔の鐵鎚、眼は眼で獨立獨尊、耳は耳で獨立獨尊、箇々各々に無孔の鐵鎚でいづれも他から手はつけられぬ、山河は鏡中に在て觀され、萬物の代表者として山河を擧げ、都べて色聲香味觸法の六境を都べて自己の心鏡の中に推し込めて見るには及ばぬ、眼に色を見る當轉其儘に十方法界沙門の一隻眼で、其他に性の心の同根の一鉢のと彼れ此れ言

ふには及ばぬぞと云ふ、着語に、我が這裡這箇の消息なし、圓悟などは元來其の様な彼れ此れの沙汰をしたことは無いぞ、長者は自から長く、短者は自から短か、し鴨の脛は短いまゝ、鶴の脛は長いまゝ、其れを融通差引したならば皆片輪になるぞ、青は是れ、青、黄は是れ、黄、互ひに他の御厄介には相成らぬ、實は法華經の諸法法位に住して世間相常住と説かれた通りのことである、爾什麼の處に向てか、觀んし、かし鏡中に在て觀され、即ち自己の心で判斷するとを許さぬと云ふ、ならば何處で何うして觀るのぞと學者に參究の路を指し示される、霜天月落ちて、夜將に半ならずとす、モ、夜が更けて、艸木も眠る、丑滿の時、誰ありて月を眺める者もなければ、水に臨む者も無い、此に到りては聞見覺知も絶え果てた時節ぞ、着語に、爾を引て、草に入り了れり、到頭雪竇に妙な處へ引ずりこまれたぞと、其の慈悲の深さをほめ、徧界不徧、藏夜半の景色そのまゝに十方法界一枚の現成公案ぞと示し、切に忌む鬼窟裡に向て坐すること、を月落て夜の更けたからと云ふて、何も見えない、真くら闇の處に腰を据えてはならぬぞとの注意である、誰と共に澄潭影を照して、寒き是の時に當りて鏡の如く澄みわたりたる水の上に、彼の山の端に傾いた殘月の影が物すごとく

映つる、これは何の爲めて如何なる道理であらうぞ、水に映つさねじならぬ義務があるてもなければ、月に映つる権利があるてもない、善てもなければ悪てもない、すべての理窟は離れてあるが、月影はどこまでも月影で澄潭はどこまでも澄潭で前にも言ふたと思ふが行誠上人が何をかは照せるものと冬の夜のあらしのあとの月に問はばやと詠じた歌があつたが、この着語にしても好いと思ふ國悟は若し、同様に眠らずんば焉くんぞ被底の穿つを知らん抱かれて寝て居るもてなければ其の夜具の裏の破れて居るのが知れるものではないと南泉雪竇の同道唱和を評したのである、愁人は愁人に、向て、説くこと、莫れ、愁人に、説向すれば、人を愁殺す、南泉も雪竇も皆斯事に就ては千辛萬苦せられたので、我も亦た同様のことであるから、其のやうな話を聞けば同情の涙に堪えぬと國悟心底からの賛成である。

第四十一則 趙州大死底人

垂示是非交結處。聖亦不能知。逆順縱橫時。佛亦不能辨。爲絕

世超倫之士。顯逸羣大士之能。向氷凌上行。劔刃上走。直下如麒麟頭角。似火裏蓮華。宛見超方。始知同道。誰是好手者。試舉看。

是非交結の處といふは禪機の商量に於て或は是と云ひ或は非と云ふ例せば第三十一則麻谷持錫の話に於て章敬は是々と云ひ南泉は不是不是と云ふ果して孰れが是か孰れが非か抑も是非一致か其語訛分明ならぬ所を是非交結と云ふのである、コレは如何なる菩薩たちでも判然と決断することが出来ぬに依て聖も亦た知ること能はずと云ふ次に逆順縱横の時は佛も亦た辨ずること能はずコレも前と同じ意味で作家の手段が或は逆に或は順に或は縦に或は横に孰れに真意が在るとも分らぬ所に到つては如何に果滿の佛陀でも之を辨明することは出来ぬ即ち西方彌陀の本願と東方薬師の本願とは同じ佛陀ながらも全く其の立場が違ふ同じ春風に發展するに於ても花は紅に柳は緑である、花の三昧は柳の知つたことでは無い、月の悟りは風の會せぬ所であるやうなものぞ、此の様子を永嘉大師は證道

歌に或是或非人不識逆行順行天莫測と言はれた然るに絶世超倫の士たるものは逸群大士の能を顯はす絶世超倫といふは調ゆる聖とか佛とかいふ定式の境界を超過して佛を呵し祖を罵る底の補子のことで此人にして始めて彼の聖も知ること能はず佛も辨ずること能はざる底の消息を通ずる其れを今假りに名けて逸群の大士と謂ふのである乃ち逸群の大士たるものは氷凌上に向て行き劍刃上を走るつまり行き得べからざる所に自由に行き走り得べからざる所を自在に走る直下麒麟の頭角の如く火裏の蓮華に似たり麟角は出格の義で定例の格式以外であるといふ意味火裡の蓮華は真に不思議であること宛かも超方なるを見て始めて同道なるを知るサテ其の超佛越祖の地に到り得た人と到り得た人との相見であつたならば始めて同道唱和が出来るといふものであるが誰か是れ好手の者ぞ其のやうな人たちがあるかナ試みに擧す看よと趙州投子二大老の出格逸群なる公案を提出せられた

本則 擧趙州問投子大死底人却活時如何有意麼事○賊不打貧兒家○世會作客方憐客 投子云不許夜行投明須到若不同床臥焉知被底穿

趙州觀音院從諗禪師のことは第九則の所で申して置いた投子といふは舒州投子山の大同禪師といふ人て其法系は曹溪慧能青原行思石頭希遷丹霞天然翠微無學投子大同と相承して達磨第十一世の孫である或時趙州が此の投子に逢ふて大死底の人却て活する時如何と問ふた今こゝて死と云ひ活と云ふは申すまでも無いが肉體のことでは無い都べての見聞覺知を離れ有らゆる思量分別を絶えて大悟徹底大般涅槃の大寂定に入つた所を大死一番といふ其れが更に大死の中から大活を得來つたときは何んなものであらうぞといふのであるコレは毎度淨土門の例を引いて世人が反對の立場と思ふて居る所から婆々談義を試みることであるが彼の真宗の法義に於ては一念發起入正定聚即得往生住不退轉と申すのが謂ゆる大死底の人になるのである然るに其の往生極樂の後は何うするぞ極樂に長く腰を据えて居るのかといふに其うては無い必ず元の五濁惡世といふ娑婆へ還相回向と戻つてくるのである其れが即ち大死底の人が却て活する時である圓悟が恁麼の事ありと言ふソレ其んなこともあるぞと相籠を打つ又賊は貧兒の家を打せずコレは趙州が投子に向て其の脚下を勘檢しやうと思ふて此の問題を提

出したのをサスガ大賊の趙州であるから貧乏人の家などには目を懸けず、投子ほどの富豪の家へ忍びこんだぞと云ふ更に會て客と作るに慣れて方に客を憐れむ趙州自分がかねて此處の一段に苦辛したことがあるに依て友人の投子が何うであらうぞとの同情の念が深いのであるといふ然るに投子も趙州に優るとも劣りのないサスガの老作家である、どうして趙州に足をすくはれるやうな迂濶なことを言はうぞ、夜行を許さず明に投して須らく到るべしとやつてのけた平たく俗話で言へば夜分では分らないから明朝くるが好いと誠に手輕な答である、一鉢に趙州が死と活との二つを捉らへて居るのを投子は許さない、元來死だの活だの向上だの向下だのといふことは第二第三の話である、百尺竿頭さらに一步を進めて來れと拂ひのけたのである、しかし投子の答にも夜と晝と明暗の二途が見えるが、サスガに老大家の立合であるから趙州も其機を見て、刀を鞘に收めたものと見える、着語に樓を看て樓を打す此の樓の字を樓に作つたのもある、樓なれば百姓の使ふ籠のことだ、さうな樓でも樓でもどちらでも宜しい、向ふの品を見て其品次第にこちらの品物を出すといふこととて、問者の脚下を見すかしての答であるといふことと

うな是れ賊は賊を知るこれも言葉が違ふだけで意味は同じである、若し同牀に臥さずんば焉くんぞ被底の穿てるを知らんこの語は前にもあつたが趙州と投子は同じ臥床に抱かれて寝たのであるから、お互ひに能く内情を知りぬいて居ると云ふのである、

頌 活中有眼 還同死

不不相知 翻來去 若 藥忌何須 鑿作家 爭不辯過

且何妨 也 要問過 古佛尙言 曾未到

不傳 有伴 千聖也 不知誰解 撒塵沙 今即

也 不 少 閑 蒙 德 塵 落 在 什 麼 處 也 若

活中に眼ありとは趙州和尚元來活眼の開けた人で安樂淨土に死在して居る人では無い、然るに今他の老作家たる投子を勘驗するが爲めに還て死に同ず、同ずるといふは同じやうな姿をするといふとてあだかも決死の勇士が戰場に倒れて居て死んだふりをして敵將の隙間を窺ふやうなものである、實際此時には死も活も無いのであるから、圓悟は兩ながら相知らずと着語した、又翻がへし來り覆かへし去ると言ふ、死かと思へば活であり活かと思へば死である、實に雨と翻がへり風と覆

がへるやうなものぞ、若し、蘊藉ならざれば、争てか、這の、漢の、細素を、辨得せん、蘊藉は、閑雅寛容の姿である、乃ち今、投子老漢の、死活如何を、辨得しやうと云ふには、餘程蘊藉に、持ち懸けなくてはと、第二句の様子を、豫め言ふやうである、藥忌何ぞ須むん、作家を鑑みること、を藥忌といふは、藥によりて食物などに、禁忌のものがある、たとへば、譬へは、鐵劑を服用して居るものは、茶を忌むとか、地黄を用ゐて居る時は、大根を禁ずるとか云ふやうなものを、藥忌と云ふ、今、教外別傳の、宗乘に於ては、死活だの迷悟だのと云ふことが、大禁物である、然るに、其の大禁物の、死と活とを、並べて、投子の如き無病の老作家を、鑑定しやうとするなどは、餘計なことであるから、止めたが好いぞと云ふ、しかし、若し、驗過せずんば、争てか、端的を、辨せん、と、圓悟が、擲論する、更に、遇着して、試みに、一鑑を、與ふる、又且つ、何ぞ、妨げん、雪竇は何ぞ鑑を、須むんと云ふけれども、出會つた、次に、チヨツと當つて、見たからでも、好いては、無いかと、趙州に、加擔する、也、た、問過せん、を、要す、我も、亦た、問ふて、見やうかと思ふと、重ね／＼、問ふ方に、賛成する、然るに、雪竇は、第三句に、古佛、尚ほ、言ふ、會て、未だ、到らずと、言ふ、サ、其の、死活を、超越して、垂示に、謂ゆる、火裏の、蓮華に、似たる、超方の、境界は、三世の、諸佛も、未だ

到り得ざる所である、此に到りて、投子老漢は何うするかを、看よといふアンバイ、着語に、頼ひに、是れ、伴あり、其の、古佛が、好い、道づれて、あらうと云ふ、しかし、此事は、千聖も、也、た、不傳、山僧も、亦た、知らず、誰ありて、其の、境界に、到つたものは、無いぞと、其の、實は、久遠以前に、到り了つたのであるから、今では、忘れてしまふたのである、サ、テ、結句に、知らず、誰か、塵沙を、撒くことを、解す、此の場合に、於て、投子は、洒々、落々として、夜行を、許さず、明に、投じて、須く、到るべしと、答へた、調子が、即ち、能く、塵沙を、撒くことを、解したので、垂示に、謂ゆる、冰凌上に行き、劍刃上に、走ると云ふものである、此れは、到底他の、大方の、人の、容易に、作し得ざる所であるから、不知誰解と言ふたのである、サ、テ、其の、塵沙を、撒くと云ふことは、人の、眼に、翳を、起させるといふこととて、彼の、葛藤を、打すといふも、同じやうなことになる、色々と言句を、弄し、伎倆を、呈して、人を、接化、導引する、手段のことである、着語に、即、今、也、た、少、から、ず、雪竇は、誰か、解すなど、言ふが、現に、今、雪竇も、前も、其、通りに、塵沙を、撒て、居るては、無いかと言ひ、更に、開、眼も、也、た、着、合、眼も、也、た、着、此の、様に、塵沙を、撒かれては、眼を、開いて、居る者も、閉ぢて、居る者も、皆、其の、塵沙も、目がつぶれて、しまふぞと、ほめ、閻黎、恁麼に、擧す、什麼の、處にか、落在、す、結局

落處は如何と語は雪寶に向て意は諸人を警醒する。

第四十二則 龐居士好雪片片

垂示單提獨弄。帶水拖泥。敲唱俱行。銀山鐵壁擬議。則觸體前見鬼。尋思則黑山下打坐。明明杲日麗天。颯颯清風匝地。且道古人還有諸訛處麼。試舉看。

單に提げ獨り弄すとは些の方便手段をもまじえずに第一本ひきさげて真ッすぐらに敵陣へ飛びこんで往くやうな姿、其れが即ち帶水拖泥で慈悲心の甚だ深い兒を感むために己れの醜態を全く忘れた有様である。敵唱俱に行ずれば銀山鐵壁敵とたゞけば唱となへる、此れは師家と學人との問ひつ答へつする姿、其の間に寸分の隙もないことは、銀山鐵壁の寄り附きやうが無いやうなものぞ、サ、此の場合に臨んで少しでも擬議すれば則ち觸體前に鬼を見る、憶病者が骸骨を見て怖ろしいと思ふうちにソッて幽霊が見えてくるやうなもの、僅に尋思すれば則ち黑山下

に打坐す彼れの此れのと思量分別にわたれば、ハヤ魔鬼の接む闇黒な處へ落ち込で到底足も腰も立つものでは無いぞ、然うに若し本分の作家であつたならば、明々たる杲日天に麗きと旭日の輝やき昇るやうに、颯々たる清風地を匝ると十方廓落一點の塵埃も無いやうな、限なき光輝ありて而して如何にも瀟洒たる所が無ければならぬ、且く道へ古人還て諸訛ありや、龐居士の如き即ち其人ぞと試に舉す看よ。

本則舉龐居士辭藥山作過老漢山命十人禪客相送至門首他〇不輕

什麼境界〇也須是什麼境界〇也須是居士指空中雪云好雪片片不落別處無風起浪〇指頭

中有時有全禪客云落在什麼處中也〇相隨來也士打一掌若〇果然全

云居士也不得草草檀水裏士云汝恁麼稱禪客檀水裏閻老子未放汝

在第二約惡水澄了〇何止開全云居士作麼生龍心不改〇又是士又打一

掌果然〇雪上加霜云眼見如盲口說如啞更有斷和句雪寶別云初問

處但握雪團便打是則見賊過後張弓〇也漏逗不少〇雖然如

龐居士といふは衡州衡陽の人て姓は龐、名は蘊、字は道玄と曰ふ儒者であつたが、初め石頭希遷禪師に參じて省あり、更に馬祖道一禪師の座下に於て大悟徹底せられ、在家の居士ながらも傳燈錄に載せられてある所の馬祖の法嗣百三十八人の隨一である、得法の後も處々の知識たちに請益してあるき、藥山惟嚴禪師の座下にも暫らく參じて居られたが、サテ暇乞をして賑るといふ時になつて藥山も此居士を鄭重に待遇せられてあつたから、門下の衆僧のうちから禪客十人を撰んで門まで送らせた、其事を本則に龐居士、藥山を辭す、山十人の禪客に命じ、相送て門首に至らしむとある、藥山を辭すの下に圓悟が這の老漢怪を作せり、一鉢この居士は奇怪な人物ぞと先づ最初から稱賛した、送て門首に至るの下に也、た、他を輕んぜず、御丁寧なる待遇ぞ、一鉢に是れ、什麼の境界ぞ、何の爲めに箇様な待遇をするぞと咎め、也、た、須く是れ、端倪を識る底の衲僧にして始て得べし、然かし此居士を送るといふとは參禪の大事に於て能く其の始終を合點して居る者で無ければ出來ないことよと云ふ、時しも雪が降て居たものと見えて居士空中の雪を指さして云く、好雪片々別處に落ちずと謂ゆる單提獨弄せられた、好雪片々は現在目前の風光で、一往は誰も

見る通りのことである、然るに別處に落ちずと言ふのが、居士の帶水拖泥慈悲片々たる所、即ち十人の禪客の爲めに好餌を下して罽龍を釣らんとするのである、圓悟が風なきに浪を起すと着語した、別處だの同處だのと餘計なことを言ふて無限の空間を狭くするかと咎め、更に指頭に眼あり、空中を指さした所に眼があると云ひ、又這の老漢言中に響きあり、其の別處といふた所に耳を傾けねばならぬぞと言ふ、時に全禪客といふものあり、云く、什麼の處にか、落在す居士が別處に落ちずと言ふた釣針にかゝつて、別處に落ちないといふなら何處へ落ちますぞと言葉咎めをした、圓悟が中れりと冷かし、相隨來也、ちともして來たなとからかひ、果然とし釣に上り來ると笑ふ、此の居士どうして其んなこととて承知しやうぞ、即ち全禪客を打つこと一掌と手の平でビシヤリ、何をうるたへたことを言ふぞ、此の片々たる好雪の落處を知らぬかと叱りつけた、圓悟が着よく打つたと賛成する、果然として勾賊破家、コレは賊を引き入れて財産を失ふたといふことで、全禪客が居士の口車にのせられて、遂に一掌にあふたは笑止千萬だと云ふのである、然るに此の禪客は痛痒も也、た知らぬ様子で、居士也、た、草々なることを得ざれ、其の様に鹿相ツかしく人を打つ

やうなことをするもので御座らぬと愚痴をこぼした着語に棺木裡の瞠眼すてに棺の中に入れられた死人が目をばちくりさせて居るやうなものよと言ふ士云く汝恁麼にして禪客と稱す閻老子未だ汝を放さるること知らん貴公は話頭の落處を知らぬばかりでは無く、人に一掌せられて其の何の故かといふことさへ分らぬ其のやうなことで禪客であるなどと稱して居ては、今に生死岸頭に立つて閻魔王に取調へをうけたならば、決して彼れは貴公を放さぬであらうぞと諭された、これは昔の全禪客のことばかり見て居ることは出来ぬ、吾人お互ひ大に反省せねばならぬ所である、圓悟が第二杓の惡水潑き了る前には手の平でビシヤリ、今度は口を極めて惡水を全禪客の頭からザブリ、何ぞ止だ閻老子のみならんや、山僧が這裡も也た放過せず、閻魔の裁判までも及ばぬ、今直に圓悟が罰するぞと言ふ、けれども全禪客マダ退却しない、更に居士作麼生と突込んだ着語に、塵心改めすどこまでも虛頭の漢である、又是れ棒を喫せんと要すモツと打たれたいのと見える、道の僧徒頭到尾便を着けすどこまでも不都合な坊さんよと叱る士又打つこと一掌着語に果然それ見たことか、雪上に霜を加ふかさねくの醜態ぞ、棒を喫し了りて款を呈

せよ、拷問にかけられたならば白狀するが好いと云ふたやうなアンバイ、居士は打て置て更に云ふ眼に見つゝ、盲の如く口に説きつゝ、啞の如し、此の好雪片々が見えぬか、又其落處を言へぬか、盲啞兼帶の痴漢めがと罵しりつゝ、已に落處を説示し了つて居る、着語に更に、斷和の句あり、此の眼見如盲云々の一語は喧嘩の仲直りをしたやうな語句ぞといふのである、斷和といふは絶交などをして居る人の間を調停して舊の如く親睦させることさうな、又他の與めに判語を讀む罪人に裁判宣告書を讀み聞かせるやうなものよと言ふ、然るに雪寶は更に意見あり別して云く、初問の處に、むて但雪團を握つて便ち打たん、此の別して云くといふは別語と申して他の問答に對し更に自家の所見があつて、我ならばと云ふ時に下すのであるから彼の代語といふのとは大に其意味が違ふといふことである、初問の處といふは最初に居士が空中を指さして好雪片々別處に落ちずと言ひ出した時、直に雪を一握り引つかんで居士にドンと打ちつけてやれば好かつたにと云ふのである、コレが雪寶の落處を示す方法と見える、圓悟が是は則ち是なれども、賊過後の張弓て今更何の効もない也、た漏逗少からず雪を握るまでも無からう、直に一掌を與へれば

好いに然も是の如しと雖も箭鋒相拄ふを見んと要す箭鋒相拄ふといふは弓の名人と名人とが互ひに双方から射た矢が途中でカチリと出あふて落ちたといふ故事である今雪寶が言ふ如く雪を握つて居士に打つけたとすれば居士と雪寶との立合てコレは一段の見ものであつたらうにと云ひ更に争奈せん鬼窟裡に落在し了れることを如何に言ふても皆あとから彼れ此れと分別した空論で何の効もな

頌 雪團打雪團打

出○頭○上○没○脚○下○没○

龐老機關沒可把

知○住○往○有○入○不○

天上人間不自知

是○何○處○消○息○

眼裏耳裏絕瀟灑

如○箭○鋒○相○拄○

絕 碧眼胡僧難辨別

達○勝○出○來○向○何○道○

一○坑○埋○却○

雪寶が自分の別語を拈起して此の話を頌した雪團打雪團打すなはち彼の雪を一握り居士に打つけるといふ手段でなければならぬ着語に争奈せん第二機に落在するを若し其第一機ならば居士が未だ空中を指さぬ前に一擲を與ふべきである

と言ふ然るに已に拈出されたに依て頭上漫々脚下漫々どこもかしこも雪だらけ宇宙萬象只一色の銀世界となつてしまふた龐老機關沒可把もし當時雪團打を實行してあつたならば龐居士に如何なる禪機玄關があつたからと云ふても其れは決して手のつけやうのあるわけのものでは無い皆盡く打破したのであると言ふ着語に往々人の知らざるあり然るに龐老機關沒可把の所は多くの人が會しそこなふに居るぞと云ふ只恐くは恁麼ならざらん雪寶は其ういふけれども實際其う巧く往かないかも知れぬナゼかといふに居士には亦た居士の別生涯があらうぞと云ふ天上人間自から知らず此の好雪片々として宇宙萬物皆同一色の光景は誰ありて之を知る者は無いたとへは水の中に住て居る魚は濡れるといふことを知らないやうなものである着語に是れ什麼の消息ぞ一轉これは何の事を云ふたものであらうぞ審細に參究せよと門下への警誡そもく天上人間はさて置て雪寶還て知るやと一擲して參學の諸人にも響かせた眼裏耳裏絶はだ瀟灑宇宙萬象同一色の雪中に立つものは眼耳も鼻舌も奇麗さつぱり一點の塵埃も留めない是れより美しいことは無いぞ着語に箭鋒相拄ふ最初空中を指さして好雪片々と言

ひ出した時に、早く此の眼裏耳裡絶瀟灑と謠ふて聞かせてあつたならば、謂ゆる敲唱俱行で矢と矢とが途中でカチリといふ味でもあつたらうにと云ひ、眼に見つゝ、盲の如く口に説きつゝ、啞の如しと居士が本則ていふたのも矢張りこゝの趣ぞと云ふ、然るに斯う一色邊にばかり滯ふつては亦た難治の病となる、ソコで雪竇さらに機輪を一轉して瀟灑絶すと其の一色瀟灑の處を打ち拂つてしまふた着語に作麼生その瀟灑を打拂つて何とするぞと咎め、更に什麼の處に向つてか、龐老と雪竇とを見ん、龐老は雪を粘じ雪竇も雪を握る、然るに今其の雪を盡く取り棄てしまふたとすれば二老は何處へ身を置いてあらうか、碧眼の胡僧も辨別し難し、此の瀟灑絶すと云ふ所の諸訛は、釋迦でも達磨でも之を辨別することは出来ぬぞと言ふ、着語に達磨出て来て、爾に向て什麼とか道はん、現に今達磨が出て來つても何とも言ふことは出来まい、ナゼかと云ふに元來一法の人に與ふるなして、言句伎倆を超絶したものであるからである、更に打て、云く、關黎什麼と道ふ、ぞ已に碧眼の胡僧も辨別し難き言詮不及の所を、雪竇も前が何をくどくと言ふて居るぞと奪ひ、遂に一坑に埋却せん、龐居士も雪竇も皆一つ穴へ生埋めにしてしまへと言ふ、

第四十三則 洞山寒暑廻避

垂示 定乾坤句。萬世共遵。擒虎兇機。千聖莫辨。直下更無纖翳。全機隨處彰。要明向上。鉗鎚須是作家。爐鞴且道。從上來還。有恁麼家風也。無試舉看。

乾坤を定むる句とは作家の宗師の一言一句は、十方に透徹して宇宙の眞理を断定するのであるから、萬世共に遵ふと三世を通貫して未來永劫誰ありて之に背くことは出来ぬ、サテ其の學人を接する活作略に至りては、虎兇を擒ふるの機、の如く虎穴に入て虎兇を擒ふる時に、寸分でも隙間が有つたならば、忽ち其の母虎の爲めにガブリと咬み殺されることになる、其れをスカサズに虎兇を擒へ得るといふことは尋常容易の活機では出来ぬことである、然るに禪機を以て學人を接することは、全たく其れと同様の活機が無ければならぬので、此に至りて人々各自其れく、獨得の妙處あるので、下聖も辨ずること莫し、三世の諸佛も歴代の祖師も窺ひ知るこ

とは出来ぬ、其の有様は直下更に織翳なく如何なる場合にも如何なる時節にも、一筋の糸ほども障りになるものとしては無く自由自在に働かけ、至機隨處に彰る。其の活機の一部分では無く、其の全分が盡く彰はる。譬へば獅子は大象を殺すときにも全力を出だし、小兔を撃つときにも全力を盡すといふやうなものである。右様な向上の鉗鎚如何といふことを明めんと要せば、須く是れ作家の爐鞴に投じて見なくては決して實驗することが出来ぬ。鉗鎚と云ひ爐鞴と云ふは鍛冶職や鑄物師の道具で、鉗は銅鐵を煉かすもの、鎚は其れを打ち鍛へるもの、爐鞴は其の銅鐵を鍛錬するため火をおこす場所であることは申すまでも無い。今作家の宗師が學人を接化薰陶するのにも全く其れと同じやうなことであるが、且く道へ從上來むかしから還て、恁麼の家風ありや也。た無や誰ぞに其の様な活機輪を轉じた人があるか無いかと自ら問ふて、試みに擧す。看よ有るとも有るとも、自ら答へて本則を提起する。

本則 擧僧問洞山寒暑到來如何廻避不是道時節 山云何不

向無寒暑處去天下人尋不得 僧云如何是無寒暑處賺殺一船人

便上 山云寒時寒殺閻黎熱時熱殺閻黎真不掩偽曲不掩直 洞山在什處 僧云賺殺一船人

洞山は即ち曹洞宗の高祖で名を良价と曰ひ後に勅して悟本大師といふ徽號をうけた人で、法孫は青原行思、石頭希遷、藥山惟儼、雲巖曇晟、洞山良价と相承し、達磨第十一世の法孫である。其の宗乗の唱へが甚だ綿密で且つ峻峻であつたから、其の書き貽されたる五位または寶鏡三昧の如きは、現に今日では曹洞門下ばかりでは無く、臨濟宗に於ても白隱禪師などは審細に參詳せられた結果、すべて參禪の人の實經實證を勘檢する所の標準として居られる程のことである。或時一人の僧が此洞山大師に寒暑到來如何が廻避せんと問ふた。言葉の上では辨ずるまでもなく、一年を暮らす間には、春秋の彼岸ごろのやうな氣候ばかりといふわけにはゆかず、夏になれば金を煉かすといふやうな熱さで、焦熱地獄も宜しくといふやうな苦みにも遣はねばならず、又冬になれば雪風凜烈として、凍傷のために指も落ち耳朶も腐るといふやうな難澁なことにもなる。これは、何うしたならば廻避と之をのがれることが出来まじやうぞといふの問である。寒暑到來は人間普通尋常のこととて怪むに足ら

ぬが生死到来は何うしたものであらうぞ、苦樂到来は何うしたものであらうぞ、迷悟到来は何うしたものであらうぞ、其れも皆普通尋常のこととして灑々落落たることを得ればおめてたい、若しも其生死苦樂迷悟等のために自由が得られぬとしたならば、此れは實に大問題では有るまいか、即ち此の僧が斯く問案を提出した所以である。着語に是れ這箇の時節に非ず、即今其の様なことを問ふて居るべき時節では無いぞ、劈頭劈面俗にブツツカリ次第といふたやうなアンパイで、寒ても暑ても來たら來たに打任せて置けと言ふ更に什麼の處にか在る、一鉢に其生死とか苦樂とかいふものは何處に在る、圓悟などは一向に知らぬぞと言ふ、山云く何ぞ無寒暑の處に向て去らざる、煩惱生死が苦いと云ふならば、煩惱生死の無い處へ往つたら好からう、これが洞山大師の爐鞴に於て火の煽りかたである、無寒暑の處すなはち生死も煩惱もない處といふは如何なる處であらうぞ、極樂であらうか兜卒であらうか、圓悟は天下の人尋ぬるに得ず、其のやうな處は誰が尋ねても見あたらぬぞと言ふ、身を藏して影を露はす、洞山の言葉の上では何處かに無寒暑の處があるかも知れぬやうに聞ゆるけれども、口と心とは全く違ふて居るであらうぞとの意、蕭何

賣却す假銀城、コレは漢の蕭何が單于と戦ふた時に我國には銀の城がある其れを、前前の國へ上げやうと言ふた、敵が其れに欺むかれて銀城を見やうとて都へ來たのを、悉く捕獲したと云ふ故事がある、その今洞山大師が無寒暑の處があるかのやうに言ふて、彼の僧を引きずり出したのであるぞと言ふ、果して僧は口車に載せられて無寒暑の處があるならば、其の淨土へ往生したいと思ふ、卑劣な心を出して、如何なるか、是れ無寒暑の處と問ふた、着語に、一船の人を賺殺す、賺の字はスカスともアヤマルとも訓ずる字であるが、こゝではアヤマルの義で、此の僧が寒暑到来の地の外に無寒暑の地があると思ひ、即ち娑婆の外に淨土があると思ひ、煩惱生死の外に菩提涅槃があると思ふて居るのは、己れ一人の錯謬では無く、世の中の多くの人を誤まる、譬へば乗合船の乗合人の中に、一人誤つた者があれば、乗合一同の迷惑になるやうなものぞと、他に随つて、轉ず、畢竟自己に正信が無いから、他人の言葉に轉ぜられるのぞと、此僧を叱りつゝ、諸人に警告し、一鈎に便ち上る、元來無寒暑の地すなはち煩惱生死を離れて別に安樂の地を求めやうとする邪念があるに依て、此のやうに僅か無寒暑の地に去れと言はれた一言に、是の如く釣りあげられるの

ぞと重ね、學人を警醒する。山云く寒の時は閻黎を寒殺し熱の時は閻黎を熱殺す。これが即ち無寒暑の地に迴避し得たる實況である。閻黎といふは前にもあつたが阿闍黎耶の略で、日本の今日の言葉で言へば尊師とか貴僧とか言ふほどのこと。即ち其の望みの無寒暑の處といふのは、寒い時には貴僧を寒殺せしむるほど寒く、熱い時には貴僧を熱殺せしむるほど熱い、其れが即ち無寒暑の處よと云ふのが、洞山大師の大慈悲深重なる垂誡である。煩惱即菩提生死即涅槃と云ふことは、教家に於ても常に言ふて居ることではあるか、實際苦樂も迷悟も貧富も貴賤も智愚も賢不肖も一味平等に見て、少しも隔てなきの境界に到るといふことは中々むづかしい。そこで慈悲ふかき宗師たちが頻りに惡辣なる手段をめぐらして、煩惱業苦の中へ逐ひ込んで而うして自由を得させやうとして下さるのである。昔し南泉禪師が喚て如々と作すと早く是れ變了、直に須らく異類中に向て行くべしと言はれた、如々といふは不變の義で涅槃菩提の常住なる姿であるが、己に其の様な境界があると思ふたのが、其れが早や不變が破れて變了了つたのである。其れよりは直に異類すなはち地獄や餓鬼や畜生の方に向つて往生するが好い、牛になれ馬になれ無

間地獄の獄卒になれ、其れが即ち最大安樂の極點ぞと云ふのである。しかし此の點に於て毫末ばかりも歩武を誤つたならば、モハヤ取り返しのかねることになるから、異々も邪見に落ちぬやうにせねばならぬのである。着語に眞は僞を掩はず、曲は直を藏さず、コレは何事も皆其儘のものよと云ふこととて、寒は寒のまゝ、熱は熱のまゝ、其他に求むべきものは無いぞと云ふこと、崖に臨て虎兇を看る、特地一場の愁この着語は崖に臨て虎兇を看ると云ふ方言と、特地一場の愁と云ふ俗語とを二つ續けたので、絶壁の懸崖を上から臨んで見るだけであらへ、中々足が慄へるほど恐ろしいものであるのに、其の谷底に虎が居るのを見出したと來ては怖ろしい上に畏しいので、特地一場とは何處も彼處もといふほどのことであるから、身も世もあらぬ愁ひ悲みぞと云ふ意である。ナゼかと云ふに大抵の佛教學者は煩惱生死と菩提涅槃とを別物と思ひ、娑婆の外に淨土を求めて眞實大乘の極意を知らぬ、然るに今遽に洞山の是の如き言句を聞いたならば、其の驚き恐れは何んなであらうかと云ふのである。大海を掀翻し、須彌を踢倒す、コレは洞山惡辣の手段すなはち乾坤を定むる句の價值、虎兇を擒ふる機のすさまじさを讚歎したのである。けれども後の學

人が之を洞山の昔話にばかり任せて置たのでは何の詮もないに依て、且らく道へ、洞山什麼の處にか在る、即今諸人自家の洞山は何處に何うして居るぞと、吾人の反省を促がされた、

頌 垂手還同萬仞崖、不是作家誰能辨得○何處正偏何必在安排 琉璃古殿照明月、圓陀陀地○切忌且莫當頭 忍俊韓癩空上階、是

○作塵生兩頭不涉 琉璃古殿照明月、圓陀陀地○切忌且莫當頭 忍俊韓癩空上階、是

○行草假水到渠成

○打云爾與道僧同參

垂手還て萬仞崖に同じ洞山大師の此の答話は誠に落艸の手段に出られたやうで、即ち手を垂れて子供を導びくやうに見えるけれども、其れが還て萬仞懸崖の登ることも降ることも出来ないのと同じこととて甚だ手を着けにくい、着語に是れ作家にあらずんば誰か能く辨得せん、コレは講話するまでも無からう、何の處か圓融せざらん雪竇は萬仞崖に同じと言ふは高いことばかり讚歎せられたが、低くても淺くても圓滿に融通の出来るのが洞山の宗旨であるを、洞山が是の如き斷案を下されたのは、恰かも王勅已に行はれて諸侯道を避けるやうなもので、誰ありて背くこ

とは出来ないと言ふ、第二句に正偏何ぞ必らずしも安排に在らんサテ此の正偏といふことを通俗に分り易く辨ずることは甚だ困難であるが、此れが即ち洞山大師の五位の二本柱であつて、五位といふは正と偏との二つを以て宇宙萬象の實相眞理を説明するのである、正といふは眞中の意味で平等一相の本體のこと、偏といふは片寄るといふ意味で千差萬別の現象のことである、ソレで此の正と偏との二つを標準にして正中偏すなはち平等一相の本體中に千差萬別の現象が含まれて居る位、又それと反對に千差萬別の現象その儘に皆悉く平等一相の本體を離れない位を偏中正と云ふ、サテ此の正中偏と偏中正とが社會百般の種々雜多なる作用をあらはす上に於て、正中來と偏中至との二位があり、結局その圓融無礙なる終歸の位を兼中到と云ふ、即ち正中偏と偏中正と正中來と偏中至と兼中到との五位を以て、宇宙萬象の本體現相および妙用を悉く説明し盡さぬといふことの無いのが、即ち洞山大師の宗旨であると、自宗でも他宗でも誰も彼れも其う思ふて居るのであるが、眞の作家の宗師の作略といふものは、決して其の様な窮窟なものでは無い、謂ゆる直下更に纖翳なく全機隨處に彰はるといふ場合になつては、正偏何ぞ必ずし

も安排に在らん、必ずしも此れが正位で、必ずしも彼れが偏位であるといふやうなものでは無い、眞に自由自在縦横無礙なものぞといふのである、安は安置排は排列て物を行儀よく並べることである、着語に若し是れ安排せば何處にか今日あらん若しも此れが思量分別を以てア一かコーかと安排して洞山大師の眞意を知らうとしても決して其目的を達することは出来ぬぞと云ふのである、作麼生か兩頭に涉らざらん、兩頭といふは即ち寒暑の偏位と無寒暑の正位、今は寒暑そのまゝに無寒暑と兩頭に涉らないやうにするには何うしたものぞと學人への注意である、風行けば草偃し、水到れば渠成ると其の安排を假らずして自然に正偏宛轉たる様を形容した、第三句に瑠璃古殿、明月照る、コレが即ち洞山大師自家の境界で、瑠璃とは莊嚴にして一點の塵埃をも留めざる姿、古殿は古色蒼然として日本の俗に神々しいとか神さびてるとか云ふやうな景況、其の森嚴清淨にして神聖なる九重の宮中に十五夜の月が照り輝いて居るやうな境界、強て五位の名て言はゞコレが兼中到の妙處である、着語に圓陀々地と明月の欠る所もなく餘る所もなきに寄せて、洞山の答話の圓轉滑脱なるを稱した、切に思ひ影を認むる、とを其の圓陀々地の月に

依て己れの影のさしたのを妄認してはならぬぞと、問、だる僧を誡めて諸人への注意である、且らく當頭なること、莫れ其の明月に着き廻らぬやうにせよと重ねての警醒、結句に忍俊たる韓獺空く階に上る、韓獺と云ふは、戰國策に出て居る故事である、其の大略を申さば、齊が魏を伐たうとした時に淳于髡といふ人が齊王に謂ふた言葉に、韓獺は天下の俊犬なり、東郭狡は海内の狡兎なり、韓獺、東郭の狡を逐ふ、山に騰ること五たび山を環ること三たび兎は前に極り、犬は後に疲る、犬兎俱に疲れて各其處に死す云々と言ふたことがある、今は明月と云ふたので玉兎を思ひ出し、兎を逐ふと云ふことから此の公案に參する者が、瑠璃古殿の明月すなはち洞山大師の答話に轉せられて、韓獺が如何ほど忍俊と伶俐俊發でも犬は犬だに依て、月の照る所に兎が居ると思ひ誤り、古殿の階上に飛び上つたやうな、愚蒙とも迂濶とも言ひやうの無い失敗を取らんやうにせよとの警誡で、表面は彼の僧を誡め、裡面には門下後學すべての諸人に反省せしめられたのである、着語に是れ這圍のみにあらず、イヤ其の影を逐ふて空く階に上るのは、今度に限つたことでは無い、此僧に限つたことでも無い、蹉過了也、塊を逐ふて、什麼をか作さん、コレ等の着語モ一無くも

好からうと思ふ打て云く備も這の僧と同參と雪竇の頻りに言句を弄するを抑へるやうに言ふて學人に重々の警誡である。

第四十四則 禾山解打鼓

本則 舉禾山垂語云習學謂之聞。絕學謂之鄰。天下稱僧不出。一箇鼓槩子。無過此二者。是爲真過。 僧出問。如何是真過。道什麼。一筆勾下。

山云。解打鼓。鼓槩子。一箇。 又問。如何是真諦。道什麼。兩重公案。 山云。解打

鼓。鼓槩子。一箇。 又問。卽心卽佛。卽不問。如何是非心非佛。道什麼。三段不同。

山云。解打鼓。鼓槩子。一箇。 又問。向上人來時如何接。道什麼。第四杓惡水來。

也。○又有二箇。○初到西天。○且道。○東土。

吉州禾山の無般禪師は青原行思、石頭希遷、藥山惟儼、道吾圓智、石霜慶諸、九峰道虔、禾山無般と相承して、即ち青原下の第七世達磨大師よりは第十三世の法孫である、或

時垂語して云く習學これを聞と謂ひ絶學これを鄰と謂ふ此の二つの者を過るこれを真過と爲すこれは禾山の新説では無くして僧肇法師の寶藏論に出て居る語て教家に於ける尋常の所談である其の大意を言はゞ凡そ佛教を修行して證悟を得る階級を習學と絶學と眞道との三段に分ける其中で最初の習學といふは小乗の修行で煩惱生死の苦き有様や菩提涅槃の樂き様子を耳に聞いて心に信じ其れを實地に修行して苦を離れ樂を得たいと思ふ階級であるから之を聞といふのである然るに更に一段進んで實際に其の苦を離れ樂を得てしまふた身となればモハヤ其上に學ぶべき所は無いのであるから之を絶學とも云へば無學とも云ふ此の境界に到れば已に如來に等き覺りを得たのであるから等覺とも云ふのであるけれども未だ直に其れを佛とか如來とか名けるわけにはゆかぬしかし羅般一點と申して薄絹一重隔てたほどのことであるから之を鄰と謂ふと言はれたソコで更にモ一一段その羅般のうすぎぬも取りのけた所即ち此の聞と鄰との二つの者を透り過ぎた處を眞過と謂ふとある本據の寶藏論には眞とばかりあつて過の字は無いしかし意味はどちらでも違ひは無いかやうなことは他の教家の諸宗の人だち

が常に談じて居ること、此の三段の階級を踐んで成佛得道するには無量阿僧祇劫の長い時間を要し、生れかはり死かはり修行に修行を累ねばならぬことにも説くのであるが、其れを今禾山禪師が拈提し來りて祖師門下直指單傳の材料にしたのである。ソコで絶學の下に圓悟が天下の衲僧跳不出と着語した。古今大概の學人皆此の習學絶學以上に跳出することは出来ぬぞと言ふのである。又無孔の鐵鎚、此の垂示は容易に手を着けられぬぞと言ふ、更に一箇の鐵槌子、この着語はモ一無くも好い、恐らく後人の妄添であらう、眞過の下に頂門上に一雙眼を具して、什麼をか作さん、習學絶學の二を超過して更に眞過があると云ふは、左右の兩眼ある上に、別に頂門の一雙眼を要するやうなわけであるが、已に兩眼を超過閉却した後に、其の様な別段の眼などに何の要があるぞと抑へたやうに言ふて、學人に參究の要路を示すのである。サテかやうな垂示であるに依て、座下の一僧が禾山の語の未だ畢らざるにスカサス出て、問ふ、如何なるか、是れ眞過、此の僧なか、油斷のならぬ者、若しも禾山の答へやうに因ては直に十分咬みつく下心があるらしく思はれる、着語に什麼と道ふぞ、能くも眞過を聞き答めたと耳を聳てた調子に見える、一筆

に、勾下す、禾山が眞過を珍重らしく提出したのを、此僧が其の眞過といふは何であるかと問ひ掛けた一言に、禾山の垂示が全く取消されたぞと、此の僧を扶けるやうに言ふて、暗に宗乘の甚だ高尙幽玄なることとす、しかし更に其れよりも格段なる一箇の鐵槌子あり、到底噛み切れまいぞと、次の答語を喚び出す、山云く、解打鼓、これは實に着語の通り、鐵槌て手が着けられぬ、鐵槌、藜て寄り付かれない、確々て摧くことも破ることも出来ぬ、ナゼかと云ふに、此れが何とか少くも佛法とか祖道とかいふことに縁がありさへすれば、何となりとも取りつく所があらうけれども、解打鼓といふは大鼓を打つことを知つてるといふことである、如何なるか、是れ眞過といふ問に對して、太鼓を打つことを知てるヨといふ答では、木に竹を接ぐといはるか、對話申そうか、到底思量分別の及ばない御挨拶である、然るに此僧は更に如何なるか、是れ眞過と問ふた、これは只その言葉を換えたまでのこと、同じことを再び問ふたのである、着語も又同じく、什麼と道ふぞと下したが、其意が前と違ふて、今の解打鼓で會せられぬものが、更に同じことを問ふて何うするのぞと答め、且つ兩重の公案と抑へ、更に又一箇の鐵槌子ありと例の如く次の答語を豫言した、山云く

解打鼓ヤハリ禾山は太鼓を打つことを知てるよと言ふ着語の鐵、概、鐵、蔘、蔘、確、々、皆前辨の通りて、益々手の着けやうが無いことになつた、ソコで今度は問端を改めて即心即佛は即ち問はず如何なるか是れ非心非佛、これは前の第二十八則でも申した如く、此の時代には即心即佛と非心非佛との研究が盛んに行はれたので、其の本は馬祖大師が頻りに即心即佛と言はれるのを、ナゼ其う言はれるかと問ふた者のあつた時に、小兒の啼を止めんが爲めぞと答へられた、ソコで更に小兒の啼が止だ後は如何と問ふたら、非心非佛と言はれた、其れが中々の問題である、佛といふものが別にあるやうに思ふて居る小兒は、即心即佛すなはち吾々互ひの心の本性が佛である、其外に佛は無いと聞けば、一旦その啼きは止むてあらうけれども、更に其即心即佛と云ふことに取りついて自由がきかぬから、ソコで今度は非心非佛と心佛ともに拂ひのけるのである、然るに今此の僧は真過を問ふても真諦と問ふても、唯一言の解打鼓で取りつく所がないから、更に其の非心非佛の問題を提出した、然かし此れも全く前の二問と同じこととて心とか佛とか云ふ間は真過では無い、其心も佛も超過しての非心非佛であるから、又語を換えて同じことを問ふたわけであ

る、圓悟は相變らす什麼と道ふぞ、マダ其様なことを言ふて居るか、抑へた、這箇の坵、坵、堆、これは前にも同じやうなことがあつたが塵塚、即ちゴミタメのこととて、即心だの即佛だの非心だの非佛だのと、魚の骨やら大根の皮やら何の用にも立たない穢い物を集めて何うするのだと咎める、三段、不同、しかし真過に真諦に非心非佛と三度問端を改めたは御苦勞であるが、禾山にも又一箇の鐵、概、子、あり、といふから、何ぞ別に答處があるかと思ふたが相變らす山云く、解打鼓いよく、鐵、概、ぞ、益々、鐵、蔘、蔘、ぞ、更に確々ぞ、けれども此僧なほ退ぞかぬ、又問ふ、向上の人來る時如何が接せん、これまで頻りに真過とか真諦とか非心非佛とか、謂ゆる向上の法門を問ふても、太鼓を打つとを知てるよとばかりて、頓と會得が出来ぬのであるから、今度は其の向上の法門ではなくて、向上の人にあふたら何うするぞと問ふた、圓悟は相變らす什麼と道ふぞ、己れが向上の人のつもりか、既に他の第四杓の惡水に遭ひ來れり、これまで已に幾たびも解打鼓といふ恐ろしい惡水をあひせられたのでは無いか、其れにも懲りずに、復た其のやうなことを言ふか、禾山には更に又一箇の鐵、概、子、あり、山云く、解打鼓相變らす太鼓を打つことを知てるよと言ふ、着語も同じく鐵、概、と鐵、蔘、

藜と確々との連下である更に、且らく道へ、什麼の處にか、落在す禾山は此他に如何なるか是れ祖師西來意と問ふても、如何なるか是れ佛法の大意と問ふても、只この解打鼓の外は無いてあらうが、彼の俱胝和尚の一指頭の如く、語句に向つて如何ほど尋討思惟したからといふても、決して其意を得ることは出来まい、これは畢竟如何なることであらうぞ、其の落着の處を言ふて見ると、圓悟が座下および後學の吾々までこの垂示である、サテ其の圓悟自分は如何に之を決したかと云ふに、朝に西天に到り暮に東土に歸る、これが解打鼓の妙用ぞと言ふのである、西天東土は空間的に數千萬里の隔たりであるに、朝暮は時間的に甚だ近い、然るに今は其邊は時間に遠い空間を往來するといふは、今日の電信電話も同様な自由自在の有様で、そうして其の蹤跡を見とめることは出来ぬのである、即ち鐵槩の如く鐵蒺藜に似たる所以である、

頌 一 拽石

實中天子勅○向上人德慮來

二 一般士

外將軍令○同病相憐

發機須是千鈞

弩若千鈞也透不得○豈爲死蝦蟇

象骨老師曾鞞毬

也有人曾慳來○阿誰不知

爭似禾山

解打鼓

鼓麻子○須道老

報君知

上實也○未見在○

莫莽函

也○有字子○

甜者

甜兮苦者苦

謝答語○錯下三脚○好與三十棒○

一 拽石といふは飯宗智常禪師の故事である、それは或日門下の衆僧が集つて働いて居るのを見て、何をしてるかと問ふた時に衆僧を監督して居る維那がハイ今日は石臼を拽いて居りますと答へた、飯宗は更に石臼を拽くは宜しいが、中心の樹子すなはち真中の木の軸を動かさないやうにしるよと言はれたことがある、着語に寰中は天子の勅、これは命令が能くさくといふこと、即ち飯宗が中心の樹子を動かすなかれの命令は、千古萬古そむくことが出来ぬぞといふのである、癩兒伴を牽く、禾山と飯宗と好い道つれぞとほめ、向上の人、慳麼に來る、彼の僧が如何か接せんと問ふた所の向上の人が其れソコへ來たぞと賛成する、一般土この般の字は手扁のついた搬の字と同じこと、ハコブと訓む字である、これは木平の善道禪師が初めて門下に入り來つた人があれば、眞に先づ三轉土を般ばしむと云ふて、必らず土を三荷づゝ運んで門前の道路を修繕させたと云ふ故事を引て來たのである、着語

に塞外は將軍の令これは前の天子の勅といふも同じ意味で命令すべき人の命令は嚴重に遵守せねばならぬと云ふことである。兩箇一狀に領過す飯宗と木平同罪であるから、一つ裁判宣告よ、同病相憐む、禾山飯宗木平雪竇好い仲間ぞと云ふ機を發することは須く是れ千鈞の弩なるべし。禾山は勿論飯宗にせよ木平にせよ佛見法見を離れて是の如く上根上機の人を接する手段、即ち天子の勅の如く將軍の令に似たる活機輪を轉することは、千鈞の弩すなはち非常なる強弓を射るやうなもので、一たび發すれば如何なる猛獸でも命は無いやうに、千佛萬祖も退倒三千里であるぞと言ふ、千鈞といふは三十斤が一鈞であるから千鈞は三萬斤であると云ふ、着語に若し是れ千鈞ならば也た透ること得ず、雪竇は千鈞と力を定められたが千鈞と限るやうなものならば、千佛萬祖の胸板をグサと射透すことは恐らく出来まいぞと抑へる、しかし輕々しく酬ふべからずメツクにも相手に成ることは出来まどと學人への警誡、已に千鈞の弩であるからには豈死蝦蟆の爲めにせんや上根上機の人でなくてはと揚げる、象骨老師曾て毬を輶す、これは前にもあつた雪峯山の別名を象骨山といふので、即ち雪峯義存禪師は學人を接する毎に、必らず直に木

毬を輶して其の機鋒を勘檢するのが常であつた、是れ亦た彼の俱胝の必らず一指を立てたといふのと同じこととて、謂ゆる手のつけやうのない無孔の鐵錘である、着語に也た人の曾て恁麼にし來るあり、飯宗の抜石や木平の搬土ばかりでは無い、此のやうなことをして學人を接した人は幾らもあるぞと云ふ、箇の無孔の鐵錘ある孔がないから柄をつけれないけれども、雪竇それを珍らしそらに言ふには及ばぬ、阿誰か知らざらん、天下に名高い話であるものをと斯う幾つも鐵概子を並べて置て、孰れも蹤跡の見とめやうは無いけれども争てか、禾山の解打鼓に似かんと禾山の大機大用は復た一段の出格であると云ふことを明かにした、着語に又鐵概子と言ふ何處までも手のつけやうの無い話ぞ、須らく這の老漢に還して始て得べし、コレは全禾山の獨り舞臺に任せて勝手に踊らせて置くが好いと言ふ、一子親く得たり、只雪竇一人は能く其太鼓の打ちやうを合點して居るらしい、君に報じて知らしむ、君とは都べて參禪學道の諸人をさす、莽鹵なること、莫れ此の一則の公案を草卒にしては成らぬぞ、審細に實參實究するが宜しいぞとの報告である、着語に雪竇も也た未だ夢にも見ざること、在りナゼかといふに此の言詮不及の鐵概子をチト説

活潑峻峻なることは疾焔過風とあつて、さなきだに消し止めやうの無い大火事を
 烈き風が吹き煽ぐといふ有様で手のつけやうのあるものでは無い、又譬へて見や
 うならば流を奔り刃を度る矢の如く下る激流を渡り觸るれば斬れる刀の下を潜
 るといふ機合の時に、少しも隙間があつたならば忽ち喪身失命するやうなもの
 である、それ故に是の如き師家が向上の鉗鎚を拈起する場合になつては、如何ほど
 伶俐俊發なる學人であつても未だ免かれず鋒を亡じ舌を結ぶことを鉗鎚は前
 もあつた鍛冶職や鑄物師が銅鐵を煅煉する時の器械で、其れを師家が學人を陶冶
 する手段に譬へたのであり、鋒を亡じは戰を止むる姿、舌を結ぶは黙して退ぞく貌
 サテ其次の一線道を放ちてといふ一句は甚だ突然であつて前後の續きが悪いも
 のだから、古人にも色々の説があるが天桂和尚は此の放の字の上に暫の字が脱け
 たのであらうと言はれる乃ち假りに暫らく一線道を放ちて試みに擧す看よと續
 けば實に作家の手段は前に言ふたやうに寸分の隙間もないから、手のつけやうも
 足の下しやうもないけれども、今暫らく假りに一筋の道を開いて、此の公案を參究
 して見るが好いと云ふことになつて、能く分るやうである。

本則 擧僧問趙州萬法歸一。一歸何處。抄書趙州老漢○堆山橫嶽 州云。我

在青州作一領布衫重七斤。果然七斤八斤○換却漫天網○還見趙州麼○初僧鼻

天下唯我獨尊○水到渠成風行草
 低○荷或未然老僧在爾脚跟下

趙州は前にも屢々出てあつた觀音院の從諗禪師で、六十にして初て參じ二十年の
 修行を経て八十の時に大悟徹底し、其後四十年爲人度生して百二十歳の壽命を保
 つたといふ偉人である、或僧の問は萬法は一に歸す一は何の處にか歸すといふの
 である、萬法といふは萬象といふも諸法といふも同じとて、凡そ世の中に有りとお
 らゆる物がら事がら千差萬別であつて一つも同じものは無いけれども、段々と其
 の本源を推し究めて見れば唯一つになつてしまふ、其の一つの所を儒教では太極
 と云ひ基督教では獨一眞神とも云ふので、其れを佛法では眞如とか法性とか菩提
 とか涅槃とか法身とか妙心とか本來の面目とか主人公とか那一物とか這箇とか
 色々な名目を其の時と場合とに依て幾つもつけてある、ソレで此の僧ももふやう、
 千差萬別なる一切諸法が一相平等なる眞如法性に結歸するといふとは能く分つ

て居るが、其の一相平等なる眞如法性は何處に結歸するのであるぞとの問であるから、之を儒教の方の言葉で言へば萬物は太極に歸す太極は何の處にか歸すといふことになる。ソコで宋朝頃の儒者たちが此問題に就て苦心の末に遂に太極は無極であると云ふ説を立てたのである。又之を基督教で言ふたならば萬物はゴットが御造りなされたがゴットは誰が造つたのでありますぞとの問にならう。今の基督教家で果して如何に之に答へることであるやら、只々例の如くゴットは無始無終であるとか、ゴットのことは人間の智識の及ばぬことであるとか言ふて、片付けてばかり置くわけにも往くまいと思ふ。他はさもあらばあれ圓悟は此の問に對して這の老漢を撻着すと云ふ。老漢とは趙州老人をさす。能く問ひ詰たぞと使喚したのである。其の一の歸處は山に堆く嶽に積む幾らてもあるぞとからかひ切に思ひ鬼窟裡に向て活計を作すことを何か胸中に一物あつて此の一間に趙州を閉口させやうなどと思ふて居たならば、大失敗するであらうぞと問者を抑へる。州云く我れ青州に在て一領の布衫を作る重さ七斤。拙僧は先頃青州といふ土地に居た時に布の衣を一領こしらへたが、其の重さが七斤ほどあるよ。これは一鉢に萬法とい

ふことであらうか、歸一といふことであらうが、佛法といふものであらうが、禪宗といふものであらうか、其やうな臭い匂ひのある理窟や議論では無い、此の人は又曾て或僧が如何なるか是れ祖師西來意と問ふたのに答へて、庭前の栢樹子と言ふたこともある。前の禾山の解打鼓と同様で頓と手のつけやうの無い鐵榔子である。決して口舌を以て説明することの出來べきものでは無い。着語に果然として七縱八橫案の通りに趙州は自由自在なものである。漫天の網を拽却す。一領の布衫が漫天の網となつて宇宙萬象みな其中に引かけられたぞ。還て趙州を見るや、コレは學人に向つて此の趙州老の活作略が見えるかとの注意。稱僧の鼻孔還て拈得す。只この一言に天下の稱僧の鼻孔を悉く捏ぢあげてしまふたぞとの稱揚。サテ此次に尙ほ着語が四つあるけれども何れも皆評唱の中の語句が混じてきたので、圓悟自から着語として下したものは思はれないけれども、其の語句が何れも皆此の公案に參ずる扶けになるのであるから、ザツと讀てゆかう。還て趙州の落處を知るや、趙州が此の問に對して是の如く答へたる其の落着の處が分るかとは學人への垂誠。若し這裏に見得すれば、便ち天上天下唯我獨尊。這裡といふは趙州の答話をさす。此の

き過ぎはせぬか、雪上に霜を加ふ言はずも好いことを餘りにくどいぞと抑へる、
 返て知るや、雪齋は君に報して知らしむと言ふが諸人は何う知つたぞと座下への
 注意也、た些子あり中には一人や二人は莽鹵ならぬ者もあらうと言ひ更に備々、
 多くは到底物になりそうも無いと揚げたり抑へたりして學人を獎勵する甜き
 者は甜く苦き者は苦し、これは山は是れ山、水は是れ水といふたも同じこととて、佛法
 の祖道の真過の真諦のといふ程度を幾重も超越した天真爛漫の妙味である甜い
 者が甜いと知れ、苦い者が苦いと知れ、ば天下泰平國土安穩て何の世話も無い、
 コて着語に答話を謝す御説明まことに御苦勞で御座ると言ひ更に錯て注脚を下
 す然かし其の御説明で禾山の太鼓に疵がつかはせぬか、イナ學人を義解に陥らせ
 るてあらうぞと歎き、好し、三十棒を與ふるに雪齋は三十棒を受けるだけの罪過は
 十分にあるぞ、棒を喫し得るや也、未だしや、諸人は雪齋と同様に三十棒を喫する
 資格があるかと學人を警醒しつゝ、便ち打つとビシヤリとやつて奮に依て、黒漫々
 これほどに手を盡しても、相變らず明暗々の境には到られぬかと、重ねく、に吾人
 を叱責せられたのである。

第四十五則 趙州萬法歸一

垂示要道便道舉世無雙當行即行全機不讓如擊石火似閃
 電光疾焰過風奔流度刃拈起向上鉗鎚未免亡鋒結舌放一
 線道試舉看

道はんと要すれば便ち道ふ世こぞりて比なし、凡そ宗師たらん者が宗乘を擧揚し
 て學人を接化するにあつては、之を言句にあらはさうと思へば如何なることと
 も言はれぬといふことは無い、其れは本より世間の常情を飛び超えた話であるに
 依て舉世無比である、又行すべきに當ては即ち行ずと之を身の行ひにあらはさう
 と思へば如何なる手段方法を以ても之を行ふ、其れが皆全機讓らずとあつて或る
 一部分の姑息手段ではない、例へば拄杖を拈すれば其の杖頭に十方法界を盡し、拂
 ふを豎れば其の拂ふ頭上に三世諸佛を集めるといふやうなわけ、其の機轉の迅
 速なることは擊石火の如く閃電光に似たり、瞬く間も猶豫することを許さぬ其の

活潑峻峻なることは疾焔過風とあつて、さなきだに消し止めやうの無い大火事を
 烈き風が吹き煽ぐといふ有様で手のつけやうのあるものでは無い、又譬へて見や
 うならば流を奔り刃を度る矢の如く下る激流を渡り觸るれば斬れる刀の下を潜
 るといふ機合の時に、少しも隙間があつたならば忽ち喪身失命するやうなもの
 である、それ故に是の如き師家が向上の鉗鍵を拈起する場合になつては、如何ほど
 伶俐俊發なる學人であつても未だ免かれず鋒を亡じ舌を結ぶことを鉗鍵は前に
 もあつた鍛冶職や鑄物師が銅鐵を煨煉する時の器械で、其れを師家が學人を陶冶
 する手段に譬へたのであり、鋒を亡じは戰を止むる姿、舌を結ぶは黙して退ぞく貌
 サテ其次の一線道を放ちてといふ一句は甚だ突然であつて前後の續きが悪いも
 のだから、古人にも色々の説があるが、天桂和尚は此の放の字の上に哲の字が脱け
 たのであらうと言はれる乃ち假りに暫らく一線道を放ちて試みに擧す看よと續
 けば、實に作家の手段は前に言ふたやうに寸分の隙間もないから、手のつけやうも
 足の下しやうもないけれども、今暫らく假りに一筋の道を開いて、此の公案を參究
 して見るが好いと云ふことになつて、能く分るやうである。

本則擧僧問趙州萬法歸一。一歸何處。抄者趙老漢○堆山積嶽○州云我

在青州作一領布衫重七斤。孔果然拈得○還知趙州落處○度○還見趙州麼○納僧鼻

天下唯我獨尊○水到渠成風行草
 低○荷或未然老僧在爾脚跟下

趙州は前にも屢々出てあつた觀音院の從諗禪師で、六十にして初て參じ二十年の
 修行を経て八十の時に大悟徹底し、其後四十年爲人度生して百二十歳の壽命を保
 つたといふ偉人である、或僧の問は萬法は一に歸す一は何の處にか歸すといふの
 である、萬法といふは萬象といふも諸法といふも同じとて、凡そ世の中に有りとな
 らぬ物から事がら千差萬別であつて一つも同じものは無いけれども、段々と其
 の本源を推し究めて見れば唯一つになつてしまふ、其の一つの所を儒教では太極
 と云ひ基督教では獨一眞神とも云ふので、其れを佛法では眞如とか法性とか菩提
 とか涅槃とか法身とか妙心とか本來の面目とか主人公とか那一物とか這箇とか、
 色々な名目を其の時と場合とに依て幾つものつけてある、ソコで此の僧もふやう、
 千差萬別なる一切諸法が一相平等なる眞如法性に結歸するといふとは能く分つ

て居るが、其の一相平等なる眞如法性は、何處に結歸するのであるぞとの問であるから、之を儒教の方の言葉で言へば、萬物は太極に歸す太極は何の處にか歸すといふことになる。ソレで宋朝頃の儒者たちが此問題に就て苦心の末に、遂に太極は無極であると云ふ説を立てたのである。又之を基督教で言ふたならば、萬物はゴットが御造りなされたがゴットは誰が造つたのでありますぞとの問にならう。今の基督教家で果して如何に之に答へることであるやら、只々例の如くゴットは無始無終であるとか、ゴットのことは人間の智識の及ばぬことであるとか言ふて、片付けばばかり置くわけにも往くまいと思ふ。他はさもあらばあれ、圓悟は此の問に對して、這の老漢を拶着すと云ふ。老漢とは趙州老人をさす。能く問ひ詰たぞと使喚したのである。其の一の歸處は山に堆く、嶽に積む。幾らでもあるぞとからかひ、切に思ひ鬼窟裡に向て活計を作すことを、何か胸中に一物あつて此の一間に趙州を閉口させやうなどと思ふて居たならば、大失敗するであらうぞと問者を抑へる。州云く我れ青州に在て一領の布衫を作る重さ七斤。拙僧は先頃青州といふ土地に居た時に布の衣を一領こしらへたが、其の重さが七斤ほどあるよ。これは一體に萬法とい

ふことであらうか、歸一といふことであらうか、佛法といふものであらうか、禪宗といふものであらうか、其やうな臭い匂ひのある理窟や議論では無い、此の人は又會て或僧が如何なるか是れ祖師西來意と問ふたのに答へて、庭前の栢樹子と言ふたこともある。前の禾山の解打鼓と同様で頓と手のつけやうの無い鐵槌子である。決して口舌を以て説明することの出來べきものでは無い。着語に果然として七縱八橫案の通りに趙州は自由自在なものである。漫天の網を拽却す。一領の布衫が漫天の網となつて宇宙萬象みな其中に引かけられたぞ。還て趙州を見るや、コレは學人に向つて此の趙州老の活作略が見えるかとの注意。衲僧の鼻孔、還て拈得す。只この一言に天下の衲僧の鼻孔を悉く捏ぢあげてしまふたぞとの稱揚。サテ此次に向ほ着語が四つあるけれども、何れも皆評唱の中の語句が混じてきたので、圓悟自から着語として下したものは思はれないけれども、其の語句が何れも皆此の公案に參ずる扶けになるのであるから、ザツと讀てゆかう。還て趙州の落處を知るや、趙州が此の問に對して是の如く答へたる其の落着の處が分るかとは、學人への垂誡。若し這裏に見得すれば、便ち天上天下唯我獨尊、這裡といふは趙州の答話をさす。此の

答話を本統に會得することが出来れば、天下に獨歩することが出来るぞ、水到れば、渠成り、風行けば、草偃す、コレは勞せずして成効するといふこととて、水さへ到れば別に作らないでも渠が出来るやうに、趙州の答が如何にも無心にして能く物に應じ無碍自由であるぞと云ふ、苟し或は未だ然らずんば、老僧は、爾が脚跟下に在らん、老僧とは趙州をさし、爾とは問者をさす、若しも趙州にして此の無心にして自由なる働さが無かつたならば、貴公に何んな目にあはされたかも知れぬと抑揚した。

頌 編辟曾挨老古錐

○何必○抄著○老漢○ 七斤衫重幾人知 ○再來不直○半文錢○

○又却○他 ○又却○他 如今拋擲西湖裏 ○山僧也不要

下載清風付與誰 ○自古自今○

○他○一○子○親○得

編辟曾つて挨す老古錐、編は字の如く物をアムこと、辟は逼の字と同じ意味になつてツメヨセルこととて、草鞋などを作る時に草を段々とツメヨセルことを編辟と云ふそうである、乃ち萬法を一に編辟し更に其一を更に何處へやるかと段々に詰め寄せるアンバイ、かやうな問ひかたを、人天眼目にある十八問の中では編辟問と名

けてある、サテ其編辟問で曾つて挨す、此の挨の字は推なりと訓じて、今彼の僧が趙州に推問してくる形容、老古錐とは趙州老人をさす、古錐といふは字の如く古い錐であるから、年経て益々銳利になつた貌である、着語に何ぞ必とせん、何も其やうに趙州老人を問ひ詰める必要は無い、ナゼかと云ふに一の歸處は十方三世に幾らもあるに、這の老漢を、抄着す此の着語は無い方が好いと思ふ、挨抄して何の處に向て去る何處まで編辟するつもりを、恐らくは脚をすくはれるであらうぞと言ふ、七斤衫の重さ幾人か知らん、頻りに追ひ詰めて、一番勝負を勢ひこんだ所を、ヒラリと布衫重さ七斤と抜けられた其の布衫七斤の重さは如何ほどあるか、能く合點の出来る人は幾たりあるぞと言ふ、着語に再來半文錢に直らず、先刻趙州老から承はりました同じ品を再び持てきて買ふ人はあるまいぞと、益々其の價を高からしめた直に得たり、口圓擔に似たり、圓擔は前にもあつたが荷物を擔ふときの横木のこと、て言ひたいと思ふても言ひ得ない時の口つきが、荷物の重いために擔木が撓むやうな貌になるといふ、惡口であるそやうな、乃ち此の布衫七斤には誰でも閉口であらうと云ふのである、又却て彼に、一等を贏ち得らる、籌は昔し算術に使ふた竹のこと

て、今ならば算盤の玉一つといふほどのことである。彼とは趙州をさし如何に伶俐らしく問ひ詰めても、到頭趙州に勝を取られたと言ふ、如今抛擲す西湖の裡いかにも彼の重さ七斤の布衫は貴重な品ではあらうけれども、今雪竇は其のやうな品に用がないに依て、雪竇山の西の湖水の中へザブリと抛擲して棄て、しまたと言ふ、ナゼかといふに彼の僧は一何處にか歸すといふ向上の問題を振り廻はしてきたのを、趙州が布衫重さ七斤と擲げ出したは實に超佛越祖の手段であるけれども、サテ又其の超佛越祖の處に腰を据えては、溺を避けて火に投ずるやうなものであるから、又其れをもソツくり皆西の海へサラリと棄て、しまふた、これが即ち雪竇爲人の大機大用である。着語に、雪竇の手脚に、還して始て得てん捨てるとも拾ふとも雪竇の勝手にさせて置くが好いと、先づ賛成して置て、山僧も也、た要せずイヤ、國悟も其のやうな重い布衫などには用がないと言ふ、下載の清風誰にか付與せん、この下載といふことは、太平御覽に出て居る故事で、河舟が荷物を積み載せて河上へのはるのを上載と云ひ、其の荷物を盡く卸してしまふて、空舟が河下へくだつて往くのを下載といふのである。そらな、今や佛法も禪道も菩提も涅槃も七斤の布衫も皆

悉く西湖へ棄て、しまふて、スツカリ空虚になつた下り舟へ、而も出し風といふ追手日和で、矢を射るが如く走りゆく愉快さ、これを誰に付與して此の愉快を分つたものであらうぞと、雪竇が獨りて面白そうに謠ふて居る。着語に、自古自今とある、これは昔も今もといふこととて、其の誰にか付與せんと言はれる、下載の清風は何時ても何處にも颯々と吹きとほしに吹て居るぞと言ふ、且く道へ雪竇他のために唱酬するか他のために、註脚を下すか、コレは學人に向て、今雪竇が斯う言はれたのは、彼の布衫七斤といふに對し、趙州に向て答へられたのであるか、又は諸人のために、彼衫七斤の説明をせられたのであるか、その差別を眞參實究して見よとの慈訓、一子親く得たり、コレは實に雪竇は能く之を頌せられたぞとの讚歎である。

第四十六則 鏡清雨滴聲

垂示 一槌便成超凡越聖。片言可折去縛解粘。如氷凌上行。劔刃上走。聲色堆裏坐。聲色頭上行。縱橫妙用。則且置。刹那便去。

時如何。試舉看。

一。槌に便ち成ず凡を超え聖を越ゆ槌といふは佛家に於て印度以來の鳴物が鐘だの太鼓だのと色々ある中に於て尤も古風な鳴らし物で八角に削つた大きな木を下に立て、置て更に小さく削つた八角の木を以て其の大きな木の小口をカチリと鳴らすのである。今でも古い儀式を行ふとき別して何ぞ大衆一同に宣告するともある時には先づ其の槌をカチリと鳴らすのが儀式の始まりである。ソコで今は其のカチリと一槌ならしたばかりで未だ何とも一言も發しないうちに早く便ち成ずとモ一疾に大悟徹底させて居るといふ宗師の作略は凡を超え聖を越えて迷ひの凡夫だの悟りの聖者だのといふ兩々相對した程度を全く透り越してしまふた境界ぞ、サテ又片言にして折む可し如何なる諸訛の疑難にあふても一言と迄も無い僅かに片言にして折む可し此の折の字は決擇の義で明かに斷案を下す意味である其れで以て如何なる縛をも去り粘をも解く縛は申すまでも無いが粘は糊で貼り附けられたやうに色々な妄想執着疑團等を離れ得ない姿其れを今は宗師片言の下に悉く解脱して自由の身となることが出來ると云ふサテ其の接化の手段

の活潑敏捷なることは氷凌上に行き劔刃上を走るが如く氷の上を行くときに少くも油断があつたならば氷が破れて水中に溺れるであらうし劔刃上を走るに少くも滯ふつたならば命があるまい其れと同様に聲色堆裡に坐し聲色頭上に行く聲といふは耳から種々様々な煩惱の種が入ってくる色といふは眼から種々様々な煩惱の種が入ってくる好い聲だと云ふてはモツと聞たい厭な色だと云ふては見たくもないと順境には食欲を起し逆境には瞋恚を起す他の鼻舌身意の香味觸法に於けるも皆同様であるに依て今は聲色の二字を以て一切の煩惱妄想を代表させ其の煩惱妄想の限なく集つて居る處に坐しもしれば行きもする之を永嘉大師は證道歌に欲に在て禪を行ずるは知見の力なり火中に蓮を生じ終に壞せずと語はれてあるサテ其の縦横妙用は且く置く剎那に便ち去る時如何師家の縦横妙用自在無碍なることは言ふにも及ばぬことではあるが其の提携を受けて謂ゆる一槌片言の下に忽ち徹底し去る有様は如何なものであらうぞ其れは實に容易なことでは無い試みに舉す看よと本則に結歸させた

本則 舉鏡清問僧門外是什麼聲

不問聲二句僧云雨滴聲

清云。衆生顛倒迷已逐物事生也。〇〇〇〇。僧云。和尚作麼生〇〇〇〇。

如何〇〇〇〇。清云。泊不迷已〇〇〇〇。僧云。泊不迷已〇〇〇〇。意旨〇〇〇〇。

鏡清禪師のことは第十六則のところで大略申して置いた通り雪峰義存禪師の法〇〇〇〇。

嗣て常に啐啄同時の機といふこと唱へられた人である。或日雨の降つて居る時に〇〇〇〇。

座下の一僧に向て門外是れ什麼の聲ぞ戸の外〇〇〇〇て何か音のして居るのは何である

かと問ふた。鏡清が全く其れを何の聲とも知らずに問ふたわけには有るまい。例の〇〇〇〇。

啐啄の機て此の僧がまだ卵殻の中に居るけれども、已に自性を識得して居るであ〇〇〇〇。

らうが、モ一外から啄と其の卵をツ、キ破ても好からうか、先づ試験して見やうと〇〇〇〇。

いふ考へて斯う問はれたらしい。故に圓悟は等閑に一鈎を垂ると着語したうまく〇〇〇〇。

金鱗が釣れれば好いが、更に雙を患ひずんば問て什麼かせん。鏡清が雙になつたの〇〇〇〇。

てさへ無かつたならば、雨の音は誰にも分つてゐるのに、其れを人に問ふて何にする〇〇〇〇。

と此の問の尋常でないことを響かせる。僧云く雨滴聲ハイ雨だれの音て御座いま〇〇〇〇。

すまことに正直の答のやうではあるが、此僧も亦たマンザラ野暮でも無いので、コ〇〇〇〇。

ゝて悟り臭い見識などを言ふべきでは無い。現成公案そのまゝに雨滴聲であるか〇〇〇〇。

ら雨滴聲と答へたと云ふ氣味である。故に着語も妨げず、實頭なるを、誠に正直ぞと〇〇〇〇。

言ひ、更に好箇の消息うまく言つたぞと揚げた。然るに鏡清は許さない。乃ち云く衆〇〇〇〇。

生顛倒して己に迷ふて物を逐ふ。敢て彼れが雨滴聲といふた語に就て其れを奪ふ〇〇〇〇。

たといふわけでも無く、更に斯う突爾と言ひ出された。コレは楞嚴經に一切衆生〇〇〇〇。

無始よりこのかた己に迷ふて物となし、本心を失して物の爲めに轉ぜらるゝ云々〇〇〇〇。

とあつて、次下に若し能く物を轉ぜば則ち如來に同じとある。今其文句を省略して〇〇〇〇。

示されたやうに思はれる。然かし此れも亦た其文句の意味には用がない。只彼の僧〇〇〇〇。

の此に於て脱體し得たりや否やを勘驗するためばかりである。着語に事生ぜり、雨〇〇〇〇。

滴聲には己に迷ふとか物を逐ふとか云ふ沙汰は無いのに、俄にも經文の御説明と〇〇〇〇。

は此れは一事件起つて來たぞと冷かす。其便を得るに慣れたり、彼僧が雨滴聲と外〇〇〇〇。

境を以て答へたのを捉へて、直に己に迷ふて物を逐ふと小言を言ひ出した様子は、〇〇〇〇。

第四十六則 鏡清雨滴聲

四八三

誠に能く人を接することに熟練したものと云ふのである。鏡鈞、搭索、鏡鈞といふは日本の熊手のこと。搭索といふは物へ引かけて遠くの物を引き寄せる鎖りのことである。今鏡清が己れに迷て物を逐ふと言ふた一言に、彼の僧を思ふさま引捉らへてしまふた他の、自分の手脚に還す、斯ういふ手段は鏡清の獨り藝であるから、勝手にさせて置くより外に仕方が無い、然るに此の僧は中々に屈しない更に進て云く、和尚作麼生、それがしは雨滴聲を雨滴聲と聞いたまての事でありすが、あなたは一體何うも聞きなされましたナと突こんだ、着語に果然として、敗缺を納る、到頭此の僧は此れて失敗ぞと言ふ、又槍頭を轉じ來れりと言ひ、更に妨げず當り難しと言ひ、又槍頭を轉じて、倒まに人を刺すと言ふ、皆此僧が遠かに守勢を攻勢に改めたのを冷かしたのであるが、悉く圓悟の着語とは受取れない、清云く、泊と己に迷はず、此の泊不迷己と云ふ句に就ては、古人に色々な異説がある、先づ此れは鏡清が自分のことを言ふたと云ふ説と、其うでは無い彼の僧を誡めたのであるとの説で、自然に不の字の訓にズとザレとザラントスとの三説が起るのである、鏡清自分のことを言ふたと云ふことになれば、即ちズの訓又はサラントスの訓で、泊んと己れに迷

はず又は泊んと己れに迷はさらんとす、いづれにしても我は全く己れに迷はないとは言はぬが、大抵迷はない又は迷はないやうにするぞと云ふので、迷とも悟とも窺ひのつかぬ所、即ち垂示に謂ゆる聲色裏に坐し且つ行くのであると言ひ、又彼の僧を誡めたと云ふ方で見れば、泊んと己に迷はざれば迷はぬやうにしると垂示したことになる、圓悟は咄と打ち拂つて更に直に、得たり分疎不下と抑へた、分疎不下といふは申し譯が立たぬと云ふことである、人々各自勝手に看るより外はないが、前に擧げた三訓の中ではザラントスの訓に随つて、イヤ我はモ一少して己れに迷ふことを厭ふて、其外に何ぞ有るかと求めることに成りそうであつたぞと云ふ意味であらうと思ふ、如何にも言葉をツザと廻り遠く使はれてあるやうで解しにくいけれども、要は己れに迷ふて物を逐ふといふことを厭ひ棄てるには及ばぬ、其己れに迷ふて物を逐ふ其儘に自由を得られなければならぬといふ意味に見えるのである、ソコで僧は更に泊んと己に迷はざる意旨如何と詰め寄せた、着語に、這の老漢を、抄着す、前に謂ゆる分疎不下の處を好くも抄着したぞと、おだて、更に人を逼殺す、餘程質問の勢ひが強いぞとほめ、又、前、箭は、猶ほ、軽く、後、箭は、深し、前に和尚作麼生と

誠に能く人を接することに熟練したものと云ふのである。鏡鈎、搭索、鏡鈎といふは日本の熊手のこと。搭索といふは物へ引かけて遠くの物を引き寄せる鎖りのことである。今鏡清が己れに迷て物を逐ふと言ふた一言に、彼の僧を思ふさま引捉らへてしまふた。他の、自分の、手脚に、還す、斯ういふ手段は鏡清の獨り藝であるから、勝手にさせて置くより外に仕方が無い。然るに此の僧は中々に屈しない更に進て云く、和尙作麼生。それがしは雨滴聲を雨滴聲と聞いたまての事でありますが、あなたは一體何うも聞きなされましたナと突こんだ。着語に、果然として、敗缺を納る。到頭此の僧は此れて失敗ぞと言ふ。又槍頭を轉じ、來れりと言ひ、更に妨げず、當り難しと言ひ、又槍頭を轉じて、倒まに人を刺すと言ふ。皆此僧が遠かに守勢を攻勢に改めたのを冷かしたのであるが、悉く圓悟の着語とは受取れない。清云く、泊と己に迷はず。此の泊不迷己と云ふ句に就ては、古人に色々な異説がある。先づ此れは鏡清が自分のことを言ふたと云ふ説と、其うては無い彼の僧を誡めたのであるとの説と、自然に不の字の訓にズとザレとザラントスとの三説が起るのである。鏡清自分のことを言ふたと云ふことになれば、即ちズの訓又はサラントスの訓で、泊んと己れに迷

はず又は泊んと己れに迷はざらんとす、いづれにしても我は全く己れに迷はないとは言はぬが、大抵迷はない又は迷はないやうにするぞと云ふので、迷とも悟とも窺ひのつかぬ所、即ち垂示に謂ゆる聲色裏に坐し且つ行くのであると言ひ、又彼の僧を誡めたと云ふ方で見れば、泊んと己に迷はざれ迷はぬやうにしると垂示したことになる。圓悟は咄と打ち拂つて更に直に、得たり、分疎不下と抑へた。分疎不下といふは申し譯が立たぬと云ふことである。人々各自勝手に看るより外はないが、前に挙げた三訓の中ではザラントスの訓に随つて、イヤ我はモ一少して己れに迷ふことを厭ふて其外に何ぞ有るかと求めることに成りそうであつたぞと云ふ意味であらうと思ふ。如何にも言葉をつざと廻り遠く使はれてあるやうで解しにくいけれども、要は己れに迷ふて物を逐ふといふことを厭ひ棄てるには及ばぬ。其己れに迷ふて物を逐ふ其儘に自由を得られなければならぬといふ意味に見えるのである。ソコで僧は更に泊んと己に迷はざる意旨如何と詰め寄せた。着語に、這の老漢を、撻着す。前に謂ゆる分疎不下の處を好くも撻着したぞと云だて、更に人を逼殺す。餘程質問の勢ひが強いぞとほめ、又前、箭は、猶ほ、軽く、後、箭は、深し、前に和尙作麼生と

攻めたよりも、今度の矢の方が鏡清の胸板へザクリと透つたやうであるぞと冷かす。清云く、出身は猶ほ易かる可し。脱體に道ふことは難かるべし。聲色以外に身を出だして悟りに落つくことは容易であるが、迷ひの悟りといふ場合を透りぬけて、脱體その儘に言ひ得ることは容易でないぞと、非常に老婆心切の說法である。故に圓悟は子を養ふの縁すなはち小兒を育てる方法ぞと言ふ。然も是の如くなり、雖も徳山臨濟ならば、什麼の處に向ひ去らん。此れでも濟まぬことは無いけれども、若し此れが徳山の臨濟のやうな悪辣の手段の師家であつたならば、どんなことに成つたことであらうぞと言ふ。又喚て雨滴聲と作さずんば、喚て什麼の聲とか作さん。然かし此れは最初鏡清が門外什麼の聲ぞと問ひ、彼の僧は雨滴聲であるから、雨滴聲であると答へたのを、鏡清が彼れ此れとむつかしくしたのであるが、然らば雨滴聲を雨滴聲と言はないで何の聲と言ふたものであらうぞと、コレは鏡清に向ふやうにして實は學人に參究させるのである。要する所は都べて眞意義は語句の間には無いのである。其時の顔つきから身ぶりから聲の出やうまでが、皆勘驗の要點であるから、今も尙ほ己れの身を其の場合に置いて見て、實に今自から斯く鏡清に

問はれたとして參究せんでは、到底何の詮もないことになる。尙ほ結局の着語に直に得たり分疎不下、眞に脱體に道ふと云ふことは、其れは鏡清自分に於ても到底出來ぬことぞと云ふのである。

頌 虚堂雨滴聲

從來無間斷

作者難酬對

果然不知○山僧從來不是作者一若

謂曾入流

刺頭入聲益○不喚作

依前還不會

山僧幾會問爾來○還不會

南山北山轉秀霏

頭上脚下○若喚作雨聲則踏不喚作雨聲

虚堂雨滴聲虚堂といふは人の居らぬ空虚の家である。外はドシ／＼と雨のふる音がする。此の雨の音を誰も聞て居らぬけれども、雨はドシ／＼と居る。此間に迷ひも悟りも無い。己れに迷ふの物を逐ふのといふ沙汰は入らぬ。着語に從來問斷なしとある。此雨は無始劫來未來永劫ふり通しにふつて居る。大家這裏に在り三世の諸佛も歷代の祖師も山川草木も日月星辰も皆この雨滴聲中に生々存々して居るのぞと言ふ。作者酬對し難し。然るに若し之を雨滴聲であると言へば己れに迷ふて物を逐ふなどと叱られるし、さればとて雨滴聲を雨滴聲でないと言へば、現成公案

に背く、コレは何とも酬對しやうの無い謂ゆる言語道斷心行所滅のところぞと言ふ、着語に果然として知らず此れは誰にも出来まいと思ふて居たが案の通りであつた、山僧從來是れ作者にあらざ尤もかくいふ圓悟などは本より作者でも作家でも無いから、最初より酬對しやうなどとは思ふて居らぬと、益々絶言の眞味を開示せられた實に此の一句には權あり實あり放あり收あり殺活擒縱て、五千四十八卷の經文も八萬四千の法門も悉く攝盡して居るやうに思ふぞとの讃歎若し會て流を入すと謂はばコレは楞嚴經に觀世音菩薩が耳根圓通と申して、耳に聲を聞くといふことから得道せられたと云ふことを説て、初め聞中に於て流を入し所を亡じ、所入既に寂にして動靜の二相了然として生ぜずと言はれたことがある、此の中の流を入すとある流の字は耳で色々な聲を聞いて思量分別する主觀の作用を謂ひ、所を亡ずとある所の字は其の耳に感ずる聲のことで即ち客觀のものである、ソコで今その流を入れて所を亡ずと如何なる音聲に逢ふても、其れを聞いて思量分別をする主觀の心性へ引き戻して、客觀に引き出されないやうにさへすれば、如何なる音聲が如何ほどに攻め寄せてきたからでも、少しも其れに亂されるといふことが無

くなるから、ソコの所を亡ず即ち客觀が無くなると謂ふのである、然るに今は若しも其やうな流を入れて所を亡ずといふやうなことであつたならばどこまでも主觀と客觀と二つに分れ能所對立して居るのであるから、己れと物と脱躰現成することが出来ぬに依て、次の句に依前として還て不會と拂ひのけるのである、着語に頭を刺して膠盆に入る、若しも流を入すなど、云ふ佛法くさいことであるならば頭を膠の中へ突こんだやうなもので何とも動きが取れまいぞと言ふ、しかし喚て雨滴聲と作さずんば喚て什麼の聲とか作さんとコレ座下への拶着て、其の眞意義を參究させるのである、依前として不會この句の意味は已に前にも言ふた通りのとて、流と所とを二つに分け入と亡と隔てるやうなことで、到底此の公案を領會することは出来ぬ、コレと互ひに注意せなければならぬことは、已に此の入流亡所の法門は楞嚴經の中に於ても、尤も肝要の一段である、然るに今禪錄の上に於ては其れを半文錢の價値もないやうに謂て居る、此れは何故であらうぞ、若し此の誦詖に於て一步でも踐み違へたならば、再び救ふべからざ邪見に陥ることになるのである、着語に山僧幾ひか會て、備に問ひ來る、コレは圓悟が座下の學人に對して、

是まで幾ひとなく其方だちに問ひ試みたのも全たく、のことぞと言ひ更に、這の漆桶我に無孔の鐵鎚を還へし來れ漆桶といふのは目も鼻も分らない坊主どもと云ふ罵り到底この公案には手を着け得まいに依て此方に渡せと叱る然らばコレで愈々不會と定つたかと云ふに、雪竇は更に一轉して會不會と謠ひ出した實は會するの會せぬのといふ沙汰は無いぞと言ふ、着語に兩頭坐斷これて會も亦た雨滴聲不會も亦た雨滴聲兩處不分どちらとも分けて見ることは成らぬぞ、ナゼかといふに這の兩邊に在らず彼の雨滴聲は會の不會のといふ兩邊に片寄たものには無いからである、然らば如何なるものぞといふに南山北山轉た秀霈イヤも何處も彼處も車軸を流すやうな大雨ぞと言ふ、着語に頭上脚下とある耳に雨聲ばかりでは無い眼には雨色鼻には雨香舌には雨味て身には雨觸意識も心魂も皆悉く雨秀霈て雨の外には宇宙も萬象も無い、是の時に當りて若し喚て雨聲と作すは、晴喚て雨聲と作さずんば喚て什麼の聲とか作さんと言ひ又這裡に到て須く是れ脚實地を踏て始めて得べしと言ふ、此の二語は評唱中の語の混入したのであらうと思ふが、其の意味を辯ずるまでも無い、

第四十七則 雲門六不收

垂示天何言哉。四時行焉。地何言哉。萬物生焉。向四時行處。可以見體。於萬物生處。可以見用。且道。向什麼處。見得衲僧。離却言語。動用。行住坐臥。併却咽喉唇吻。還辨得麼。

天何をか言ふや。四時行はる。コレは論語に出て居る孔子の語を借りて來て、真如法性の徳が元來言句議論を離れて、宇宙萬象の本體たることを示された、四時は申すまでも無く春夏秋冬である、春になつて花が咲き秋になつて實が生る其間に誰も號令かける者も無ければ監督する者も無い、地何をか言ふや、萬物生ず誰も號令をかけず誰も監督はせんけれども、山川艸木人畜土石みな其れ／＼に生々存々を遂げて居る其間に權利とも言はねば義務とも言はぬ、迷ひとも言はねば悟りとも言はぬ、吾々も互ひに此四時の行はるゝ處に向て、以て體を見るべし、平等一相の本體、即ち真如法性は如何なるものであるかと云ふことを、コレで能く合點せんければ

成らぬ、又萬物の生ずる處に於て以て其の用を見るべし。萬別千差の諸法みな其れ
 くの妙用を具へて、參同契に謂ゆる火は熱し風は動搖水は濕ひ地は堅固而も一
 々の法に於て根に因て葉は分布すとある様子が分らねばならぬ、宇宙萬象の本體
 妙用は其れて好いが且く道へ什麼の處に向てか、衲僧を見得せん、其の天地の間に
 於て萬物の靈長と稱せられる人類の中に於て、最も太尊貴生である衲僧は如何な
 るものであらうぞ、言語動用行住坐臥を離却すること彼の天の何とも言はざるが
 如く、咽喉唇吻を併却する彼の地の何とも言はざるが如くにして、而して彼の四時
 行はれ萬物生るが如くに還て辨じ得んやと言ふて本則を拈出する。

本則 舉僧問雲門。如何是法身。

多少人疑者○千聖門云。六不收。斬釘截鐵。跳不出。漏逗不少。

靈空裏走。靈龜曳尾。

韶州雲門山文偃禪師のことは前の第六則にも第十四則にもあつたから其傳記は
 略して、或僧が如何なるか是れ法身と問ふた、法身のことも今さら申すまでも無い
 が、佛身に法身と報身と應身との三身あるといふのが常の語で、之を萬物の本體と

現象と妙用とに當れば即ち法身は本體に當る、即ち垂示に於て天地の徳に比せら
 れたもの、何とも言はずに四時行はれ萬物を生ずる其最大根元に向つて、且らく人
 格を附して法身と謂ひ更に之に尊稱を與へたときに久遠實成の如來とも法性法
 身の佛とも名けるのである、然し此れは全く暫時の假りの名て其實は何とも名く
 べきものではない、又其の姿を何とも形容し得べきものでもない、然るに今此僧は
 其の法身といふは如何なるものであるかとの問題を提出したのである、着語に多
 少の人疑着す、コレは此僧に限らず誰ても疑ふて居ることである、千聖も跳不出か
 やうな問題は千佛萬祖も此の以外に跳出することは出来ぬ、しかし既に法身とい
 ふ名目の下に問を發したのでは、漏逗少からずどうせ満足なものには成らぬぞと
 言ふ門云く、六不收、雲門大師の答話は、イツても斯のやうな手も口も出せないこと
 を言ふのが特色である、第十四則の對一説、第十五則の倒一説、第二十七則の體露金
 風いづれも皆謂ゆる鐵樞子で、煮ても焼いても喰はれたものではない、或は之を義解
 して六不收といふは宇宙萬象本體たる法身の空、間的にも時間的にも無限である
 といふことを示す爲めに、六合の内に收めることが出来ないと云ふたのであると

か又は六は眼耳鼻舌身意の六根に收め得べきでは無いと言ふたのであるとか、色々な俗説をつける者が有ても其れは皆直指單傳の趣では無い故に圓悟は斬釘截鐵と言ふた此の一言は銳利さ加減はすさまじいものぞと云ふのである、又八角の磨盤空裏に走ると着語した磨盤といふは石臼の臺である、八角の石臼の臺が虚空を飛てゆくと言ふは何のことであらうぞ、何ともかとも意味も理由もつけられたものでは無い其れと同じやうに此の六不收といふ答へも手がつけられぬぞと言ふのである、靈龜尾を曳く然かし六不收とても七不入とても、苟くも已に言葉に出した上からは、ハヤ其の痕迹が見えるぞと云ふ、

頌 一二三四五六 ○周而復始 ○滴水滴凍 碧眼胡僧數不足 ○三生六十劫 ○磨盤何曾見 ○聞

知而故犯 ○少 少林謾道付神光 ○一人傳虛萬人傳實 ○從頭來已錯了也 卷衣又說歸天竺 ○一○憐一船

不 ○少 天竺茫茫無處尋 ○在什麼處 ○始是木 夜來却對乳峰宿 ○割破眼晴 ○且

○道是法身是化身 ○放爾三十棒

一二三四五六 ○コレは雪竇が何を數へ初めたのであらう、雲門は法身を六不收と答

へたが雪竇は一二三四五と答へたのであらうぞ、いろはにほへととも、天地玄黄宇宙洪荒とても、人々各自に答へて見たら好からう、圓悟は周て復た始ると言ふ、七八九十一二三四と無始却來未來永劫はてしが無い、これが法身の當躰よ、滴水滴凍とコレは極寒の時に一滴の水が落ちれば一滴だけ直に凍り、更に一滴おちれば又一滴凍る、其間に髪を容るゝの隙もないと云ふことである、そうなる許多の工夫な費やして什麼をか作さん、結局數量に落ちぬことを六不收だの一二三四だのと色々な分別をして何にするぞと抑へて、畢竟法身は言語道斷心行所滅であるぞと云ふことを示し、且つ第二句の地盤を作る、ソコで第二句に、碧眼の胡僧も數へ足さず、此の一二三四五六は如何に達磨大師でも少しも増すことも出来ぬば、減らすことも出来ぬ、着語に、三生六十劫、生れかはり死にかはり六十劫の長い間かゝつても、到底數へ切るわけにはゆかぬ、達磨何を曾て夢にも見ん、一鉢に雪竇は何のために、こへ達磨などを引出して來たのであるか、此れは本より達磨などの知つたことでは無いと言ふ、閑黎、什麼として、か、知て、故らに、犯す、碧眼の胡僧も數へ足さずと知て居りながら、ナゼ一二三四五六などと自分で數へたぞと答める、第三句に、少林謾に道

ふ神光に付す一鉢に此事は謂ゆる千聖不傳であつて、他人がら受けることも出来ねば、他人に授けることも出来ない、即ち冷煖自知するより外は無いためであるのに、其れを初祖の達磨が少林山に於て二祖の神光に付屬したなどは甚だ錯つたことぞ、と是れから法身が達磨と改名してしまふた着語に、一人虚を傳ふれば萬人實と傳ふ、然るに達磨は神光が髓を得たなどと云ふたものであるから、遂に衣鉢を争ふやうな錯りを生ずるに至つたのだと言ふ、更に従頭來己に、錯り了れり根元最初から錯を將て錯に就たのである、衣を卷て又説く天竺に飯ると、況んや復た達磨が神光に法を付してから、死て熊耳峰に葬つたと思ふたのが、其實は天竺へ飯つたのであるなどと説くものがあるが、コレは何とした大錯誤ぞ、一鉢に達磨が支那へ來たと思ふのが誤りである、達磨東土に來らず二祖西天に往かずと云ふては無いか己に來たことの無い達磨か何て天竺へ飯るものか、其んなことを言ふものは皆眞箇の達磨を知らぬからのことである、眞箇の達磨は人々各自の頭上にも脚下にも無往無來て現に面壁兀坐して居るては無いか、着語に、一船の人を賺殺す、天竺へ飯つたなどと言はれては、乗合人一同の迷惑ぞと言ふ、憺憺といふは、耻辱といふこと

との梵語であるそらな、天竺へ飯つたなどと言はれては、達磨の大耻辱であらうぞ、天竺若々として尋ぬるに處なし、然るに若し達磨が飯つて居るであらうと思ふて、印度十六大國を山の奥から谷の底まで尋ねたからと云ふても、決して達磨にお目にかゝることは出来ぬ、其れなら、什麼の處に居るか尋ねて見ると、學人を警醒して始て是れ、太平いよ、達磨といふやうな厄介者が居ないと云ふなら、其れで始て安心の境界を要する所は佛とか祖とか名けられる者が外にあると思ふて居る間は、不安心の至りて安眠は出来ぬぞと云ふのである、しかし、輒もすれば其の佛祖の跡尻を追ひ廻す者が多いやうであるが、如今、什麼の處にか在る、愈々達磨が居ないか、ヒョツと其處らに居りはせぬかと重ねて學人に拶着する、然らば終に達磨の行衛は不明ときまつたかと云ふに、夜來却て乳峰に對して宿す、昨夜この雪竇の處へ宿をかりに來て、我が雪竇山の別峰たる乳峰に對して泊つたぞと言ふ、コレは乳峰に限つたことでは無い、吾々互ひが朝な朝な達磨を抱いて起き、夕べ夕べ達磨を抱いて寝て居るのであるが、おほかたは自から知らずに、其れも煩惱これも生死の種と邪魔にばかりして居るのである、着語に、備が、眼睛を、刺殺す、サ、達磨を是の

如く眼前へ出されて見れば、誰でも見えなければならぬはずぞ、しかし雪竇が斯ういふのも、風なきに浪を起すのていつそ行衛の知れない方が安心ぞと云ふ、且らく道へ是れ法身か是れ化身か、かやうに雪竇が振りまわして居る達磨とかいふ品物は、謂ゆる法身といふものか又は化身といふものか、能く審細に参究しろ、少しても迂論な奴は許さぬぞと云ふので、備に放す三十棒と結んだ。

第四十八則 王太傅煎茶

本則 舉王太傅入招慶煎茶作家相案○須有奇特○等閑無事○大家著二隻眼○惹禍來也 時朗上座與明招把銚一火弄泥團滾○不 朗翻却茶銚○事生也 太傅見問上座茶爐下是什麼果然 朗云捧爐神果然中他箭了 太傅云既是捧爐神爲什麼翻却茶銚何不與他本分 朗云仕官千日失在一朝錯指注是什麼語話○社撰禪和如麻似粟 太傅拂袖便出灼然作家○許 明招云朗上座喫却招慶飯了却去江

外打野櫻更與三十棒○遊脚眼龍只具一 朗云和尚作麼生抄者○也好與一抄

招云非人得其便果然只具一隻眼○道得 雪竇云當時但踏倒茶爐解當見

山爭奈賊通後張弓○雖然如是也未稱三德
山門上客○一等是澄那澄那就中奇特

王太傅といふは王延彬といふ居士で、後には昔し三公の一に數へられた太傅の官にまで昇進したものと見えるが、是の時には泉州の知事を勤めて居た頃のこと、見える、乃ち其頃泉州の招慶寺に住して居られたる長慶慧稜禪師に参禪して、餘程知見も進んで居たらしい、或時其の王太傅が招慶寺へ往て見ると、明招も來てゐる、朗上座も居あはせたので、お茶を煎じて飲むといふことになつた、此の朗上座といふは後に長慶の法を嗣いで福州報慈の慧朗禪師と稱せられ、一方の大善知識になられたが、此時にはまだ上座といはれて小僧あつかひされて居るほどのことであるから、到底十分な問答商量の出来なかつたも無理は無い、明招といふは羅山道閑禪師の法嗣で、婺州明招山の徳謙禪師のことである、サテお茶を飲む時になつて、朗上座が明招和尚に茶瓶を取て進ぜやうとする途端に、其の茶瓶を引つくりかへし

てお茶を覆してしまふた、其れを王延彬が見て居て、直にスカサズ朗上座に向つて問答を仕掛けたのである。本則の文に據れば、時に朗上座は明招のために銚を把るとある。其下の着語に「火泥團を弄する漢、この火の字のことは前にもあつたと思ふが五人を伍となし五伍を火となすといふ、兵隊の組織の名で、即ち一火といへば二十五人一組のことである。今は其れを太傅と明招と朗上座と泥團を弄するワンバク小僧のやうなのが幾人も集つたぞといふ、最初から都べてを抑下した着語である。更に煎茶を會せず、別人を帶累す、自分の茶を飲むことを知らないから他人にまで迷惑をかけるぞと罵る。朗茶銚を翻却す銚の字は温器なりといふ註がある。日本でも酒を温める器を銚子といふ、今は土瓶でも急須でも好い茶を煎る器と見ればすむ、これが太傅や明招を勘破するため、ワザと土瓶引くりかへしたのでは無く、全く誤つて覆したものと見える。着語に「事生ぜりサ、大變だ、又果、然、どうせ其んなことをするだらうと思ふたといふアンバイ、斯る場合に臨んで自由を得ることは平生餘程素養が十分でない」と難しい。今から百年ばかり前に江戸高輪の東禪寺の弟子に古梁上座といふのがあつた。此寺は舊仙臺侯の菩提所であるから、

或時仙臺侯が御參詣になつて、書院で休息して居られる所へ、古梁上座が天目臺に薄茶のたてたのを載せて持つて往て、侯に渡す途端に侯の膝の上のところへ引くりかへして、侯の袴から衣服からピツシヨリ汚してしまふた、一鉢に渡しかたが悪かつたのやら、先方で受取そこなつたのやら分らんけれども、疍癩の強い氣儘な大名のことであるから、理窟なしに腹を立つて、刀をヌラリと引き抜いて、此の小僧と睨みつけた。其時に古梁は僅に十三歳であつたが、少しも驚かないばかりで無く、ハイツと言ひながら首を延して侯の膝元へずり寄つた。其の機合に侯もチョツと氣を奪はれて、方丈を喚べつと言ふ、方丈は謂ゆる事生ぜり、古梁が大變なことを仕出かして困つたものと怖る／＼出て見ると、仙臺侯は此の小僧を予に下さいと言はれる。方丈は唯々恐れ入て如何やうとも宜しくと言ふ、侯は言葉を改めて、然らば此れから後は此の小僧に十分學資を與へて修行させて見たいと思ふから、方丈も前が其の監督を引受けてくれとの御依頼で、其後は仙臺侯の十分な保護を受けて學問修行を仕とげ、遂に仙臺の瑞鳳寺住職になり、近世稀有の學匠と稱せられた。南山古梁禪師が其の人である。然るに今王太傅は朗上座が土瓶を引くりかへしたを

見ると直に太傳上座に問ふ茶爐下是れ什麼ぞ今引くりかへした土瓶の掛けてある茶爐の下は何であるかと言ふのである着語に果然として禍事とうく大變な事になつたといふ朗云く捧爐神ハア此の茶釜の掛つて居た火鉢の下には捧爐神といふて火鉢を捧げてる神さまが居りますと言ふた日本の俗にシガミ火鉢と稱する火鉢などの足のところに鬼のやうな形のものが造つてあるのが多くあるあれは謂ゆる捧爐神の姿で其の火鉢を引くりかへさせないやうに守護するわけであるやうな着語に果然として他の箭に中れりコレは朗上座に轉身の活路がないといふことを答めたので太傳が茶爐の下と言ふた其言葉につきまわつて捧爐神と答へたのが全く敵の矢先へ引ずりこまれたといふものであるしかし取敢へず直に捧爐神と答へた所は一往妨げず奇特なりとほめる太傳云く既に是れ捧爐神ならば什麼としてか茶銚を翻却せりやナ捧爐神であると云ふか捧爐神なるは茶爐を守護して茶銚などを引くりかへさせないやうにしそやうなものであるにナゼ今のやうに引くりかへさせたのであるぞコレは中々面倒な議論となつて來た着語に何ぞ本分の草料を與へざるコレ朗上座に向つてコレ一つ達磨門下

の禿僧らしい働らきが無ければならぬに何といふ手ぬるいことであるぞと圓悟が齒がゆがるのである一鉢に茶銚を引くりかへしたのを吾々も互ひの煩惱生死無常轉變に思ひ合せたので茶爐下是れ什麼ぞと問ふたは其の煩惱生死の根底には何があるぞと言ふたやうなものソコ捧爐神と答へたのは此の煩惱生死の本體は眞如法性であると言ふたことになるから更に眞如法性が何故に煩惱生死を起すかと詰つたのが既に是れ捧爐神什麼としてか茶銚を翻却すと攻めて來たのであるモ一斯うなつて來ては是非ともに少なくとも煩惱即菩提生死即涅槃娑婆即寂光といふ所モ一つ進んで謂ゆる本分の草料であれば其の煩惱生死も菩提涅槃も悉く打ち拂つて灑々落々太平無事の所を見せなければならぬのである然るに朗上座はいつまでも太傳の言葉につきまよて受け太刀にばかりなつて居るから圓悟は更に事生ぜりイヤ益々大事になつたぞと言ふ然るに朗云く仕官千日失一朝に在りと相變らず他の語路を尋ねてある千日の長い間忠實に御奉公して居た良臣も僅かな失策のために罪過に處せられたやうなもので本來清淨なる眞如法性が一念の妄動に因て五道に輪廻するやうになつたのであると答へたソ

つて圓悟が錯て指注す是れ、什麼の語話ぞ、説教坊主が婆々談義をするやうに、何を言ふて居るぞと叱る、杜撰の禪和麻の如く、粟に似たり斯のやうな杜撰の禪僧は朗上座に限らず世の中にウヨク澤山居るぞと罵しる、杜撰といふことに就ても色々な説がある、其中に昔し杜氏の人て師傳も受けず典據にも依らず、妄りに獨斷説を書き散らして世に示したので、世人が都べて妄浪にして信用の出來ないもの、ことを杜撰すなはち杜氏の撰述のやうである、と云ふたのである、と云ふことである、禪和といふは禪和子とも云ふて禪僧といふも同じことである、太傅拂袖して便ち出づ、王延彬も切角朗上座を勘驗しやうと思ふた効もないから、フイと座を起つてしまふた、着語に灼然作家サスガに太傅は年來長慶の提撕を受けただけのことはある、とほめた他に、一隻眼を具すること、を許す然し太傅の作畧も十分とは許せぬ、僅に片目だけぞと言ふ、然るに之を傍聽して居た明招の徳禪師が見かねて、朗上座は招慶の飯を喫却し了りて却て江外に向て野裡を打すサテ、朗上座は招慶慧稜禪師の董陶を受けて居るにも拘はらず、招慶門下の禪僧らしい働らきが出来ないで門外の川端で譯もないことをフイ、と騒いで居るワと抑へたのである。

る野裡といふは春さきに野山の草木を焼いた跡の焼けのこりの木の根などのこと、とて、其れを薪にするために多くの男女が取りに往て、フイ、騒いで居ることを、打野裡といふのが、更に一轉して都べて譯もなく、ガヤ、騒ぐこと、打野裡といふ方言になつたのである、と云ふことである、着語に更に、三十棒を與へん、明招が斯う言ふただけでつまらんど、シンと朗上座を打ちなぐれば好かつたにと云ふのである、這の獨眼龍も、只、一隻眼を具す、明招徳謙禪師は左眼失明して居られたから、世に獨眼龍と稱せられてあつた、其獨眼龍も今は名詮自性で片目しか見えぬ、手ぬるい言ひ分ぞと抑へ更に也、た、須く、是れ、明眼の人、點破して、始て、得べしと暗に後の雪實の着語を豫言する、然るに朗上座なほ屈せず和尙作麼生と明招の意見を反問に及んだ、着語に、抄、着、よくも抄し得たぞと擲論し、更に也、た、好し、一抄を與ふるに、是非此の一抄が無ければならぬ所ぞと、おだて、終に、這般の死、郎當の見解を作さいらん、サスガに明招は朗上座のやうな活氣のないヨボ、した見解では無からうと次の明招の答を豫想する、郎當は前にもあつたと思ふが老羸零落して力のない日本の俗語にヨボ、した有様である、招云く、非人、其便を得たり、コレは維摩經の語で

コゝて非人と云ふのは鬼神のことである、都べて鬼神は精神確固たる人に對しては崇りを作すことは出来ぬ、然るに若し人が喜ぶとか恐るとか怖れるとか云ふやうな精神に動搖を起した隙間を窺ふて、色々な働らきをすると云ふのである、即ち今は捧爐神が朗上座に隙間のあるのを窺ふて茶銚を翻却したぞと言ふたのである、着語に果然として、只一隻眼を具す案の外に片目であるぞと抑へ、又一半を道ひ得たりと言ひ、一手は擡げ、一手は搦ゆと言ふ、皆明招の道徳の不十分であると云ふとを答めるのである、ソコで結局の判決は雪寶云く、當時但茶爐を踏倒せん、若しもわれ雪寶であらうならば、既に茶銚を翻却す、太傅がスカサズ茶爐下是れ什麼ぞと言ふた時に、直に其の茶爐を一踏に踏み倒してしまふのであつたと、これが雪寶の王太傅を接せる大機大用である、茶銚を踏み倒してしまへば議論の種が無くなる、大死一番し來らない限りは到底本統の働きはあらはれない、着語に争奈せん、賊過後の張弓、今さら致し方もない次第である、然も是の如くなり、と雖も、未だ徳山門下の客と稱せられず、茶爐を踏倒しただけでは未だ十分でない、徳山門下の本色ならば、ドシンと太傅に一棒を喰はせるのぞと言ふ、等に是れ、潑郎潑頼中に就て、奇特

なり、太傅も明招も朗上座も皆ひとしく潑郎潑頼であるに、其中では雪寶の茶爐踏倒が比較的、マゝ奇特な分である、と、圓悟甚だ不満足の語氣である、潑郎潑頼といふは潑は水をアバクことであるか、其れが、都べて亂暴なことの形容になり、又頼と云ふはコゝては人に金錢などを強請するやうなことになるので、つまり破落戸とか蕩樂者とか東京などでゴロツキと謂ふやうな類のことを、潑頼潑郎と云ふのである、
 獨眼龍只具一隻眼、曾未呈牙爪也無牙爪可呈、應機非善巧尋泥團滾有什麼限、堪悲不助理君作家

頌 來問若成風

成文不虛發、不妨要妙、應機非善巧、堪悲。

獨眼龍

只具一隻眼、曾未呈牙爪、應機非善巧、堪悲。

生雲雷

盤大地人一時與、早天露、逆水之波經幾回。

來問風を成すか若し、コレは太傅が茶爐下是れ什麼ぞと問ひ掛けた勢ひは、熟練した大工などが手斧をハッシと下すときに空気を切てスーッといふ音がするやうな勢ひである、と云ふのである、其れでコゝの風の字は古來オトと訓ませることになつて居る、着語に箭みだりに發せず、實に太傅の一間には中々力があるとほめた、

又偶爾として文を成す太傅の一間が別に思考を要せず突然と言ひ出したのであるけれども茶爐下は何麼とは中々立派な文語ではないかとほめ更に妨げず要妙なるをと重ねくの稱賛である然るに朗上座の應機善巧に非ずその應答の機合が全く善巧を失して風を成すの間に應ずることが出来ぬ着語に泥團を弄する漢に什麼の限りかあらん全く泥遊びの子供のやうであると言ひ又方木と圓孔に返す丸い穴へ四方な木を填めたやうな答であると抑へ妨げず作家に撞着す到底太傅ほどの作家の相手にはなれぬのであると貶める悲むに堪たり獨眼龍曾て未だ牙爪を呈せず然るに世に名高き獨眼龍の明招が傍らに居て口を出したのであるから龍らしい活動をするかと思ふたに牙も爪も出さずに龍らしい働きのないのが甚だ残念であると言ふ着語に也た牙爪の呈すべき無しナニ元來この獨眼龍にも牙も爪も無いのであると抑へたのか揚げたのか什麼の牙爪とか説かん一鉢に雪寶が牙爪を必要らしく言ふのが分らぬぞと咎めたとは言ふもの、此獨眼龍也た他を欺くことを得ず中々そう馬鹿にすることも出来ぬぞと上げたり下げたりである牙爪開く此れから後は雪寶が明招に代つて下した自分の着語を頷

して此の公案を結んだのである着語に備還て見るや其の開いた牙爪を諸人は見たかと學人への一拶雪寶却て些子に較れり然し雪寶の判決も些子にあたるだけのことと十分の牙爪とも言へないと抑へ明招に若し恁麼の手脚あらば雪寶の手傳を假らないでも疾に茶爐を踏倒したて有つたらうにと圓悟が齒嚙みをする雲雷を生ずいよく龍が牙を振り立て爪を怒らしたのであるからついで雲を起し雷を鳴らすといふことになつて來た着語に盡大地の人一時に棒を喫すコレには誰ても驚かない者は無からうと言ひ天下の衲僧身を着くるに處なしと言ふ皆稱讚の語更に早天の霹靂コレは朗上座や明招の手ぬるいのに呆れて居た所へ雪寶の一言を喜ぶ有様いよく結句に逆水の波幾回をか經る彼の雲雷に依て霈然たる大雨のふり續いた結句逆水漲ぎり怒濤ほとばしること幾回なるを知らぬぞと自家の作略を稱讚しぬいた着語に七十二棒翻て一百五十と成ると雪寶の自讃に對して三十棒や五十棒では足らないから七十二棒喰はせたが其れが極力強く打たから倍の働き百五十棒になつたらうぞとコレが圓悟の太傅に對する應機である

第四十九則 三聖以何爲食

垂示七穿八穴。擣鼓奪旗。百匝千重。瞻前顧後。踞虎頭。收虎尾。未是作家。牛頭沒馬頭。回亦未爲奇特。且道過量底人來時如何。試舉看。

七穿八穴して鼓を擣き旗を奪ふコレ戦争の例を以て主客應對の機鋒相譲らざる様子を明かす七穿八穴は攻勢を取て抜けつ潜りつ戦ふ有様鼓を擣き旗を奪ふは大勝利の様子サテ又其の相手かたに於ても百匝千重前を瞻後を顧るコレは守る方の形勢で城を高くし堀を深くし百匝千重の要害堅固の上に追手も搦め手も少しも油断なく多くの哨兵を置てあるサテ又其の策略に至ては虎頭に踞て虎尾を收ると始終完全に把挂し得ても未だ是れ作家にあらずまだ十分の衲僧とは許されない牛頭没し馬頭回るといふは迅速敏捷の貌で其應對の機会が間に髪を容れぬやうても亦た未だ奇特と爲さず然らば如何なる人を喚て作家と爲し如何

なる作略を以て奇特とするのであらうかと云ふに且く道へ過量底の人來る時如何過量といふは分量を超過して居るのであるからモハヤ作家とも奇特とも名くべからざるものである其のやうな人であらう試みに舉す看よ此の本則に舉げられた三聖の如きが即ち其人であると云ふのである

本則舉三聖問雪峰透網金鱗未審以何爲食不不妨疑自在○此問太峰云待汝出網來向汝道或人多少聖價○作聖云一千五百人善

知識話頭也不識識迅雷霹靂可然識家宗師天然自在峰云老僧住持事繁不在勝真○放過三聖といふは鎮州三聖院の慧然禪師と申して臨濟大師の嫡嗣である臨濟大師が遷化の時に臨て門下の諸子に向ひ吾が滅後に於て吾が正法眼藏を滅することを得ざれと言はれた其時に此の三聖禪師が進み出て争てか敢て和尚の正法眼藏を滅却せんやと言ふたソコで臨濟大師が更に若し人ありて備に問はば作廢生と言はれた時に三聖は大喝一聲カッとして怒鳴つた臨濟は其一喝を聞て安心したものと見えて誰か知らん吾が正法眼藏道の瞎驢邊に向て滅却せんことをと印可せら

れた偉人である、然るに大悟徹底の後も諸方の名高き知識たちを勘驗してあるか
 れたので、乃ち今此雪峰との問答も其頃の事と見える、雪峰のことは前に屢々出て
 あつたから今さら言ふまでも無からう、サテ其の三聖が雪峰に對しての問は網を
 透る金鱗未審何を以てか食と爲さんと云ふのである、コレ呈解問と云ふので自分
 の悟りを呈出して他の調査を受けるのである、又借事問とも云ふて世間の事を借
 て佛法の大事を商量するのである、乃ち今網を透る金鱗と云ふは普通佛法の修行
 とか證悟とか云ふ程度を透りぬけて、謂ゆる歸家穩坐太平無事の身となつた者は、
 彼の修行とか證悟とか云ふ網の中に居た時のやうに、坐禪だの觀法だの念佛だの
 題目だのと云ふやうな食物がありませんが、是れから後は何を食て生活したもの
 てありましやうぞ、語を換えて言へば悟後の平生は何うであらうと云ふので之を
 淨土門の言葉で言へば極樂へ往生してしまふた後は何うするぞと云ふのである、
 着語に妨げず縦横自在なるを已に網の外へ出てしまふた魚であるから自由自在
 なわけである此の問太高生いかにも向上高尚な問であるとほめ更に爾只自知す
 べし己れの食ふ物を他に問ふには及ぶまいと答め、又自知して居るなら何ぞ更に

問ふことを必とせんと抑へる、峰云く汝が網を出て來らんを待て汝に向て道はん
 既に三聖は自ら網を透り來れりと云ふのを、雪峰は知らん顔して其の上に乗るか
 うり、貴公が其の網を出て來たことであつたならば、其後の食物を教へてつかはそ
 うぞと、抑へたのやら揚げたのやら頓と窺ひのつかない答で、如何にもゑらい御挨拶
 であるから、着語に人の多少の聲價を減ず、これでは三聖が尙ほ全たく教網の中
 に滯ふつてるやうに聞えて、彼れが名譽に關係するであらうぞと云ふのである、し
 かし雪峰はサスガに作家の宗師であるから、天然自在なものであると稱讚した、け
 れども三聖は決して此れて閉口する人物では無い、聖云く一千五百人の善知識話
 頭だも也た知らず、イヤ和尚は門下の衆徒が一千五百人もあると稱せられる大善
 知識では御座らぬか、然るに人の間に對して答話をすることも御存知ないとは驚
 き入りましたと言ふ、これも亦た抑へたのやら揚げたのやら頓と窺ひのつかない
 豪い掛合かたでは無いか、故に着語にも迅雷霹靂はなはだ群を驚かすとある、又時
 跳するに、一任すと言ふコレはモ一三聖が言ひたいまゝに言はせて置くより外は
 無からうと云ふのである、果して峰云く老僧住持事繁し、イヤ予は寺の用事が多く

て忙がしいよと言ふ、コレは三聖の機鋒を避けて遁げたのであらうか、又は三聖の
 話頭を許したのであらうか、頓と手のつけやうが無い、故に着語にも勝負に在らず
 とある、三聖が勝つたのでもなければ、雪峰が負けたのでも無い、結局人情の上の判
 断に落つべきでは無い、然し雪峰がコ、て三聖に一棒を喰せれば十分であつたに
 一着を放過したと残念がり、そは云ふもの、此の老僧住持事繁といふた、此語最も
 毒なり、前の備が網を出て来るを待てと烈しく言ふたのよりも、却て此のスラリと
 抜けた所に悪水を頭からあびせ掛けた勢があると云ふのである。

頌 透網金鱗何千兵易得一將難求 休云滯水向他處外立 搖乾蕩坤活潑好

振鬣擺尾誰敢辨端倪 千尺鯨噴洪浪飛去過那邊

一聲雷震清颯起有眼有耳如聾如 天上人間

知幾幾沙作什麼 打云爾在什麼處

網を透る金鱗云ふことを休めよ水に滯ふると既に是れ網を透り來つた魚である

と云ふからには、水の中に束縛されて居るはずは無い、必らず自由自在に諸方を飛
 躍してあるくに相違ないぞと三聖禪師の出没縦横なる様子を語たふた、五祖山の
 法演禪師は此の中の休云滯水と云ふ一句で此の公案を頌了つてあると言はれ
 た、そやうな第一句の着語に、千兵は得易く、一將は求め難しとある、教網に滯ふつて居
 る不啻啗の漢は幾くもあるが、佛見法見を超脱した禪僧は實に得がたいと言
 ふ、何似生サテ此の金鱗は何に似て居るかと座下の諸人に搜らせる、千聖も奈何と
 もせず、已に佛祖の法網を脱し來つたのであるから、千佛萬祖も手は着けられぬ、第
 二句の下に、他の雲外に向て立つ水に滯ふらなると云ふならば、何處に居るぞ、遙か
 に雲外に向て飛び去つたと言ふ、其勢ひは實に活潑々地である、然るに雪峰が之れ
 に向つて網を透り来るを待て道はんと答へられたのは、甚だ人を馬鹿にした話ぞ
 と云ふので、且く鈍置すること、無く、んば好しと言ふ、然らば其の金鱗は如何に働
 かと云ふに、乾を搖し、坤を蕩して、鬣を振ひ、尾を擺ふ、其の勢ひのすさまじさ、天地を
 震動させる活動ぞと云ふ着語に、作家、作家と揚げ、更に未だ是れ他の奇特の處にあ
 らず、天地を震動させるだけのことは、此の金鱗の平生であつて、さまで珍らしいこ

とては無い、本分の力を出せば十方法界七華八裂するぞと云ふ、其れ故に放出すること、又何ぞ妨げん、此の金鱗は何處へても放つて見るが好いと云ふ、誰か敢て端倪を辨ぜん、雪竇は振盪擺尾と形容せられたけれども、其實は到底何とも形容し得られるものではない、然るに僅に振盪擺尾とは箇の技倆を倣し得たり、ザツとした伎倆ぞと抑へる、賣弄出て来て、妨げず、群を驚かす、の賣弄の二字は衍文であると云ふことである、其他は解し易い、次に千尺鯨噴て、洪浪飛び、コレは三聖が一千五百人の善知識話頭だも也、た知らずと反撃した勢ひを、大鯨が潮を噴出して山の崩れるやうな荒浪を飛ばせたやうであるぞと謠ふたのである、着語に那邊に轉過し去る、其の勢ひて何處へ往てしまふたと言ひ、妨げず、奇特と言ひ、盡大地の人を一口に吞盡すと重ね、三聖を讚歎する、一聲雷震ふて、清塵起る、コレは雪峰が他の三聖のすさまじい威勢で、咬みついて来たにも拘はらず、スラリと老僧住持事繁しと抜けた機会を、夕立の雷聲がゴロ／＼と鳴ると思ふまに、忽ち清風の颯と吹き起つたやうであるぞと謠ふ、着語に、眼あり、耳あり、聲の如く、旨の如し、コレは雪峰が三聖の攻撃を知らぬ顔して居る様子が、眼があつても見え、耳があつても聞えぬかのや

うであるぞと云ふたので、大寂靜中に在て大動亂に應ずるには是非ともに斯うなければならぬのである、誰か悚然たらざらん、其の平氣に沈着した威光には却て誰ても怖れるてあらうと言ふ、清塵起るとコレ、雪竇のくせて例の通りに引返してきた、古人が雨後の青山色うたゝ、新たなりと評してあるが、實に其の通りのことである、着語に、什麼の處にか、在る、其の清風が何處に何う吹いて居るぞと、學人に參究させ、さらに咄と清風を打ち拂つた、天上人間、知ぬ幾々、その清風は十方法界颯々たらざる所は無いと、雪峰の眼光が宇宙に輝きわたる様子を稱揚したのである、着語に、雪峰は窄く陣頭を把り、三聖は窄く陣脚を把る、コレは垂示に謂ゆる七穿八穴と百匝千重との戦略で、孰れを孰れとも勝負のつかぬ様と言ふ、土を撒し、沙を撒して、什麼をか作さん、コレは雪竇の巧妙なる文才を抑へたやうに揚げたので、學人をして其句下に死在せしめざらんと、の慈意である、遂に打て、云く、你什麼の處にか、在ると到頭圓悟本分の正令を行じた。

第五十則 雲門塵塵三昧

垂示 度越階級超絶方便機機相應。句句相投儼非入大解脫門。得大解脫用。何以權衡佛祖龜鑑宗乘。且道當機直截逆順縱橫。如何道得出身句試請舉看。

階級を度越し方便を超絶す都べて何事にもせよ其の目的を達するまでには、幾段も階級を経なければならず、又必ず其の目的を達せる方法を實行し其の便宜を量らなければならぬ佛法修行も其の通りのごとて、今更事新しく申すまでも無いが十信十住十行十回向十地といふ五十段の階級を経て、始めて等覺の位に昇り更に進て妙覺の佛陀になるまでには、三大阿僧祇劫といふやうな長い間、有だの空だの中道だの八萬四千の法門だのと種々さま／＼の方便道をたどりて、ヤツと其の目的の菩提涅槃を證得するのである。然るに今この禪宗は其等の都べての階級を度越し都べての方便を超絶した所を立脚の地として、更に其れ以上の働き即ち百尺竿頭に立て、更に一步を進めるのであるから、其の立場に於て機々相應し句句相投すと主客應對の間に於て、水ももらさずスツキリと契合するやうで無ければな

らぬ、其れに就ては大解脫門に入て大解脫の用を得るに非ずんば此の解脫といふことも今更に辯ずるまでも無いが解といふは束縛を離れたこと、脱といふは籠の中に入れられて居た鳥などが其の籠を飛び出した形容に過ぎぬのであるから吾々互ひが朝な夕な一切萬事に於て、眞實自由自在に働らくことが出来さへすれば、其外に別に解脫と名くべき尊いものも有り難いものもあるのでは無い、然るに大解脫門とても言へば、何やら吾々人間の上の事では無く、謂ゆる極樂とか淨土とか云ふ處に、別段なものでもあるかのやうに思ふ癖がついて居るのを、先づ第一に打破してしまはなければならぬのであるとは云ふものゝ、其の一切萬事の上自由自在に働らくと云ふことは、理窟で分つて口で言ふだけは何でも無いが實地になつては三度の食事すなはち箸の上げ下しにも、容易に自由は得られるものには無い、これは甘いからモツと食べたいと云ふ食欲も起れば、こんな物が食はれるものかなどと瞋恚も起る、食欲や瞋恚に支配を受けるやうなことで、菩提の涅槃のと云ふ話をする資格を何うして得られやうぞ、況や其の菩提も涅槃も度越超絶した程度の談に於てをやである、サテ今のが垂示は其眞實の大解脫の用を得たも

のて無くては、何を以てか佛祖に權衡とし、宗乘に龜鑑たらんと云ふ、何うして佛祖の佛祖たる量を計るの權衡となり直指單傳の宗乘を參究するもの、龜鑑すなはち手本となることが出來やうぞと云ふのである、且く道へ當機直截逆順縱橫すなはち大解脱の働きを以て自由自在に如何が出身の句を道ひ得ん、此の出身といふことも即ち解脱自由の意味であることは申すまでも無からう、試みに擧す、看よと雲門出身の句を提示する、

本則擧僧問雲門如何是塵塵三昧 天下初僧盡在道裏作窠窟 **門云。**

鉢裏飯桶裏水 布袋裏盛鉢○金沙混雜○將鉢

擧す僧あり雲門に問ふ如何なるか是れ塵々三昧、コレは華嚴經に本ついた問て彼の經に一塵の中に無量刹を現するとか又は一微塵の中より正受に入るとか云ふ、一切諸法無礙圓融の道理を説かれてある、即ち塵と云ふは微塵で塵々と云へば都べての微塵すなはち顯微鏡でも見えないほどの微細なる塵埃の中にも無量刹を現する刹と云ふは世界と云ふこととて世界と云へば廣大なことのやうに思ひ塵と

云へば微小なことのやうに思ふのは、大小廣狹といふ凡夫現在目前の情量に支配されるからである、然るに今は普賢廣大の三業と申して眞實大悟徹底の人の働きが顯はれる場合には、大小の遠近のと情量情見を超脱するのであるから、一滴の白露の上にも天上の雲も月も山も河も皆悉く影を映すやうに、一微塵の中に十方法界を攝盡する、其の境界を個人の上を得るのが即ち三昧である、三昧と云ふは梵語で漢譯すれば正受といふことになる、正受は讀て字の如く正しく受けるといふとて、譬へば明かなる鏡は花が來れば花のまゝに月が來れば月のまゝに、歴々分明公然無私に受けるやうに、吾々の心の鏡に一點の曇りも無くなつて、宇宙萬象ありくと其の實相妙用を公明無私に顯はすことの出來るやうになるのが即ち三昧である、サテ此僧は是れまで謂ゆる華嚴の法門を研究し來つたものと見えて、今は華嚴經八十卷の法を僅かに塵々三昧と云ふ四字に約めて、雲門大師の之に對する意見を勘驗するつもりと見える、着語に天下の衲僧盡く道理に在て窠窟を作す、其の實は誰も彼れも朝な夕な寢ても起ても此の三昧を離れて居らぬのであるけれども、やゝもすれば彼の階級や方便に束縛されて、窠窟に陥り自由を得られないので

ある、今此の僧もハヤ此の塵々三昧といふ語に就て何か別物のあるやうに執着して居ることは、已に此の問を起し來つたので分つて居る。滿口に霜を、含むコレは前にもあつたが口で言はふとしても決して言へなひ形容の俗語である。沙を撒じ、土を撒じて、什麼をか作さん、塵々だの三昧だのと佛法くさい名目などを並べ散らかして何にするぞと叱る。門云く、鉢裏飯桶裏水、ナニ塵々三昧かッレは飯鉢の中には飯があり、水桶の中には水が入つて居るのヨ、これが雲門大師の華嚴經である。若しも強ひて此の語を釋迦所説の經文などに當て填めて、何うとか斯うとか理窟をつけたり道理を討ねたりしたならば、唯に雲門の罪人となるばかりでは無い、釋迦も亦た泣くであら、鉢裏飯は鉢裏飯で何の不足がある。桶裡水は桶裡水で何の不足がある。着語に布袋裡に錐を盛る、コレは雲門の機鋒の如何にも鋭利な様子を言ふたので、布の袋に入れてある錐の尖が忽ち布を穿つて出るやうである。と云ふのである。金沙混雜、しかし鉢裏飯桶裏水とは實に能く道ひ得ては有るけれども、更に一語も言句に顯はさいには如かぬに依て、金沙混雜の感じがすると云ふのである。乃ち錯を將て、錯に就く、彼の僧が塵々三昧と問ひ來つたのが己に錯である。然るに其れ

に對するに言句を以てしたのも亦た錯では無いか、ナゼかと云ふに、含元殿裡には長安を問はず、含元殿といふは唐の景宗皇帝が建られた宮殿で、即ち天子の居處である。長安は即ち其の含元殿の在る處であつて見れば、含元殿の裡に居りながら長安は何處であると問ふ必要はない。今も己に鉢裡飯桶裏水は言はずも知れたことであるに、其れを殊更に鉢裏飯桶裡水と言ふただけ野暮では無いかと、益々祖師門下の眞箇の三昧を開示するのである。

頌 鉢裏飯桶裏水 ○也○漱口三十年始得 多口阿師難下觜 ○者○知○舌○頭○○爲○什○麼○却

北斗南星位不殊 ○喚東作四作什麼○坐立儼然 白浪滔天平地起 ○深○脚○下

擬不擬 ○天○著○天○著 止不止 ○更○添○怨○苦 箇箇無棍長者子 ○不○少○者○晒

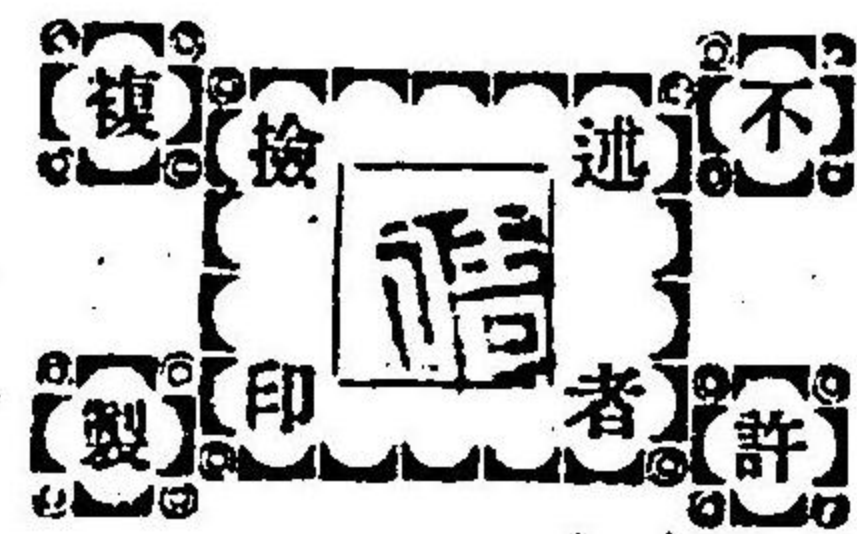
鉢裡飯桶裡水と例の如く本則の主眼を其儘に拈提し來つた。着語に露也、コレは丸出したナと云ふたアンバイ沙を撒し、土を撒して、什麼をか作さん、如何に奇警なる妙句であつても、畢竟眼中に入れば翳となるの土沙よ塵埃よと抑へ口を瀬くこと三

十年にして始て得てん其のやうなと言ふた口は非常に汚れて居るに依て、三十年もかゝつて能く洗はなくてはと云ふ多口の阿師も舌を下し難し、此の鉢裡飯桶裡水といふ一句には如何ほど饒舌多辯なる人でも、何とも一語を加へて説明することも辨駁することも出来まいぞと、コレで本則は頌し了つたのである、着語に舌頭を縮却すソレは舌を縮めて居るから舌を下し難いのである、舌を伸しさへすれば何とても言へる、かやうな着語は都べて學人を警醒して一方に片よらせぬためである、法を識る者は懼る言ふて言へぬことは無いけれども、言ふべからざること、言はぬが法である、什麼としてか却て恁麼に擧す、雪竇自から舌を下し難しと言ひながら、ナゼ斯んなことを言ふのであるぞと咎める、北斗南星位殊ならずコレは鉢裡飯桶裡水といふことを語を換えて謔ふたので、北斗星の位置はいつても北に在り、南極星の位置はいつても南に在る、即ち位不殊て何も別段に思量分別して彼れが此れかと心配するには及ばない、花は年々かならず紅に咲き、柳は歳々かならず緑に芽出すては無い、故に着語にも東を喚て西と作して、什麼か作さんと言ひ、又坐立儼然坐すべきは儼然として坐し立つべきは儼然として立つまでのことよ

と言ひ更に長者は長法身、短者は短法身、鶴の脚は長いまゝの佛で鴨の脚は短いまゝの如來増すことも減らすことも要らぬ、こう言へば亦た其れに取りついで柱に腰し株と守るものもあらうが、時としては忽ちに白浪滔天平地に起るといふことを知らねばならぬ、前の北斗南星位不殊と此の白浪滔天平地起と是れが同じ姿であらうか、全く別物であらうか、若し此間に一步でも踏み違ひたならば、塵々三昧など云ふことを夢にも窺ふことの出来るものには無い、着語に脚下深きこと、數丈イヤ其の滔天の浪がお互ひの脚の下にと、言ひ資主互換この白浪滔天と前の北斗南星と互ひに主となり資となり、然として、備が頭上に在り、ソレ脚下と思ふまに又頭上にもと言ふ、備又作麼生と學人に氣を付けて、マゴつくと許さぬぞと便ち打つ、擬不擬、止不止、コレは擬議せんとすれども擬議せられず、さればとて止めんとするにも止められずと云ふのである、彼の孔子が道は須臾も離るべからず離るべきは道に非ずと言ふたやうなもので、離れたいと思ふたからでも離れられるものには無いが、然らば其の道とは如何なるものかと云へば、聲もなく臭もなく其れ至れるかなて、何とも擬議するとは出来ぬ、今も丁度それと同じやうな場合である、着語

に蒼天蒼天その擬議し得られぬ場合に於ては、天を仰いて嗚呼と言ふより外はない又什麼とか説かんと何とも言ふて見やうがないと云ふ、然るに其れを強て擬せんとしたり、敢て止めんとしたりする、即ち彼れの此れのと途中に流浪して居る者は箇々無禿の長者子ぞと言ふ、之は本は法華經の故事で、近くは寒山の詩に本ついたのである、法華經の故事といふは、大福長者の子が誤つて乞食になつたといふので、本來成佛の吾々が煩惱生死の凡夫となつて居るのに譬へたのである、其れを寒山が詩に作つて、六極常嬰苦、九維徒自論、有才遺草澤、無勢閉蓬門、日上巖猶暗、烟消谷尚昏、其中長者子、箇々總無禿、と詠したのである、禿といふは、禿鼻禿の事、それも無いと云へば、九裸躰といふことである、大福長者の一子と生れたものが、九裸躰とは餘りになさけない話であるが、吾々も互ひも釋迦何人ぞ我何人ぞといふ、本來成佛の身でありながら、階級だの方便だのといふ葛藤にばかり束縛されて、少しも大解脱自由無礙の働きが出来ないとは何事ぞと叱る、着語に即當、少からず、ヨボくした有様、傍觀の者が晒ふてあらうぞ、お耻つかしい次第では無いかと云ふ、

明治三十九年四月二十五日印刷
明治三十九年四月二十五日發行



講述者 大内青巒

發行者 今村金次郎

印刷者 太田音次郎

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市芝區露月町十八番地
東京市芝區露月町十八番地
東京市芝區四軒屋町廿六七番地
東京市芝區四軒屋町廿六七番地

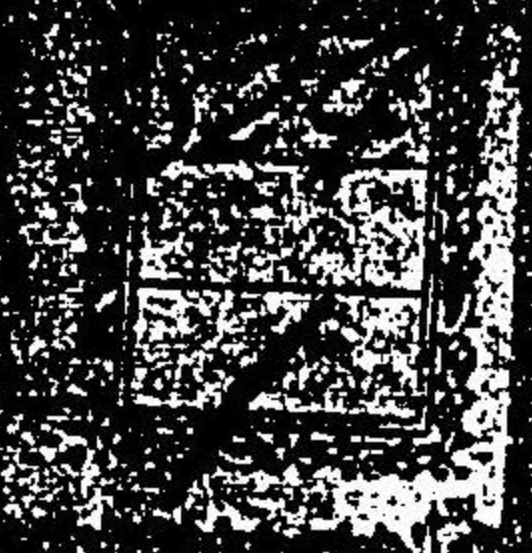
特約賣捌所

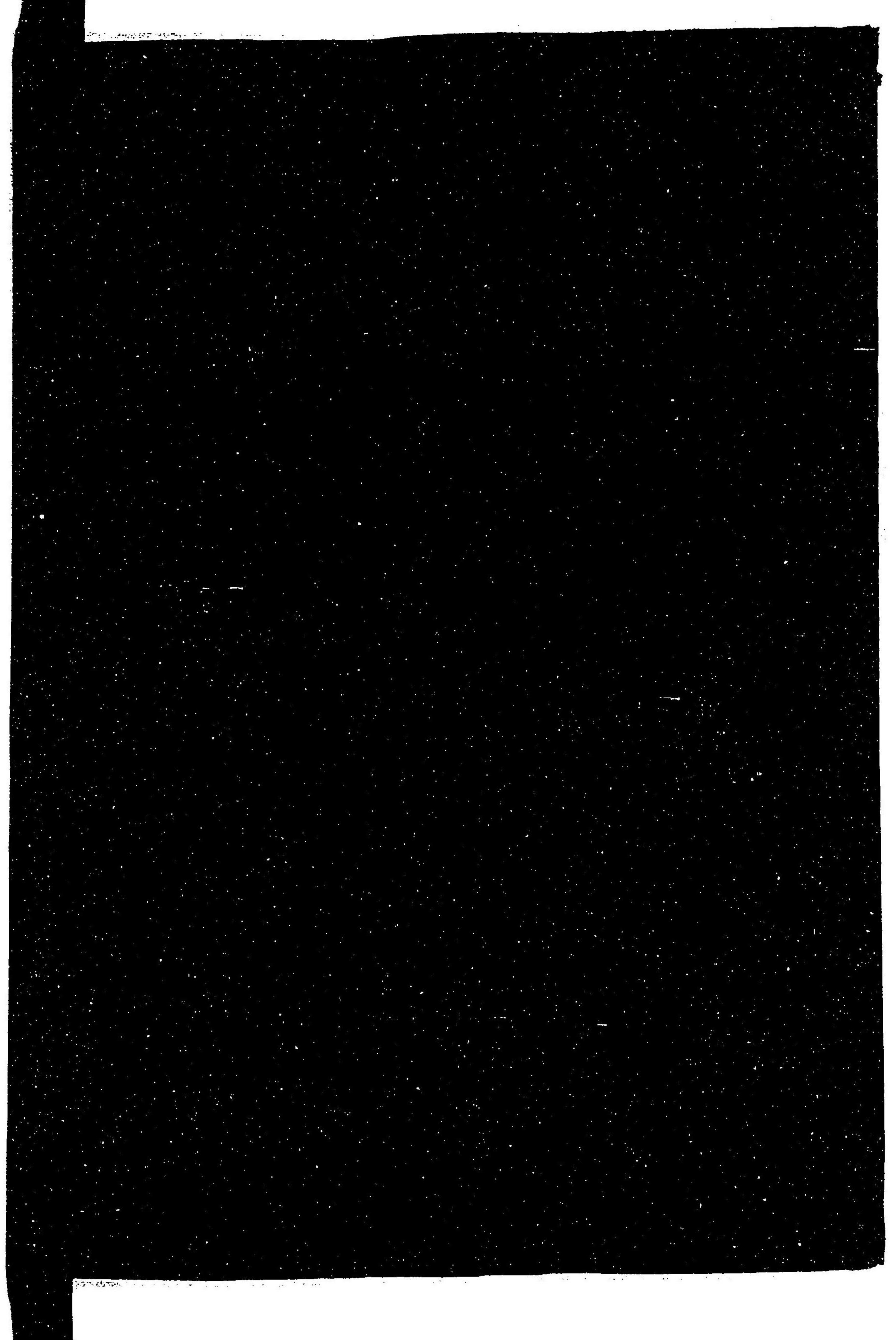
東京市神田區表神保町
全 京橋區中橋廣小路
京都市木屋町二條
大阪市東區南本町四丁目

東京市神田區表神保町
前川文榮
積貝文書院

發行所 東京市芝區月町 鴻盟社

電話新編三〇二七番





019817-001-1

324-1

碧巖集講話

大内 青巒/著

上

M39

ABG-0641

